

茨城女子短期大学紀要

第44集（2017年）

＜目 次＞

1. 太宰治「一つの約束」雑感
～「雪の夜の話」「惜別」との関連から～
…………… 小林 和子 …………… 1
2. 学びのイメージを生かしたカリキュラム・マップ作成の試み
～2年間における保育科学生の学びに関する意識調査から～
…………… 助川 公継 ……… (1)
3. 実習報告会におけるアクティブラーニング
—実習事前事後指導の在り方を探る—
…………… 安藤みゆき・富田 浩子・海野 富江 ……… (11)
4. 「保育実践演習」の授業内容の検討
—「いっしょに遊ぼう」の実践を通して—
…………… 神永 直美・佐藤 豊・助川 公継・海野 富江
角田 雅昭・安藤みゆき・橋本 祥子・馬立 明美
富田 浩子・長谷部はるか・廣部 朋美 ……… (32)

茨城女子短期大学

44	茨女短大紀	No. 44 P1 ～ 88	茨 城 2017
----	-------	----------------	----------

太宰治「一つの約束」雑感

「雪の夜の話」「惜別」との関連から

一、

太宰治の「一つの約束」という小品に私が出会ったのはだいぶ前のことで、ある大学の一般教養科目「文学」の講義で太宰治を紹介するにあたって、紙面の関係から非常に短い作品を探していた時だった。印象に残る話で、太宰らしさを私なりに強く感じたため、以来講義のプリントの中でこの作品を使ってきた。

しかし、この作品の冒頭の遭難者と燈台守一家とのエピソードが戦争末の同時期に書かれた他の二作品「雪の夜の話」（『少女ノ友』昭和19年5月）と「惜別」（朝日新聞社、昭和20年9月刊）にもほとんど同じ形で使われていることに気づき、太宰治について門外漢の自分ではあるが、なぜ太宰はこのエピソードを同時期に何度も繰り返し語ったのか、このエピソードは各作品の中でどのような役割として使われているのかなどに興味を持ち、今回少し調べてみたいと考えた。

その「一つの約束」という作品は次のようなものである。引用は現代仮名遣いに直した。

難破して、わが身は怒濤に巻き込まれ、海岸にたたきつけられ、必

小林 和子

死にしがみついた所は、燈台の窓縁である。やれ、嬉しや、たすけを求めて叫ぼうとして、窓の内を見ると、今しも燈台守の夫婦とその幼き女兒とが、つましくも仕合せな夕食の最中である。ああ、いけねえ、と思った。おれの凄惨な一声で、この団欒が滅茶々々になるのだ、と思つたら喉まで出かかった「助けて！」の聲がほんの一瞬戸惑つた。ほんの一瞬である。たちまち、ざぶりと大波が押し寄せ、その内気な遭難者のからだを一呑みにして、沖遠く拉し去つた。

もはや、たすかる道理は無い。

この遭難者の美しい行為を、一体、誰が見ていたのだろう。誰も見てやしない。燈台守は何も知らずに一家団欒の食事を続けていたに違いないし、遭難者は怒濤にもまれて（或いは吹雪の夜であつたかも知れぬ）ひとりで死んでいったのだ。月も星も、それを見ていなかった。しかも、その美しい行為は厳然たる事実として、語られている。

言いかえれば、これは作者の一夜の幻想に端を発しているのである。けれども、その美談は決して嘘ではない。たしかに、そのような事実が、この世に在ったのである。

ここに作者の幻想の不思議が存在する。事實は、小説よりも奇なり、

と言う。しかし誰も見ていない事実だって世の中には、あるのだ。そうして、そのような事実こそ、高貴な宝玉が光っている場合が多いのだ。それをこそ書きたいというのが、作者の生甲斐になっている。

第一線に於いて、戦って居られる諸君。意を安んじ給え。誰にも知られぬ或る日、或る一隅に於ける諸君の美しい行為は、かならず一群の作者たちに依って、あやまたず、のこりくまなく、子々孫々に語り伝えられるであらう。日本の文学の歴史は、三千年来それを行い、今後ともまた、変る事なく、その伝統を継承する。

この「一つの約束」が収録されている『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、1990年）の解題には次のように出典に関して書かれている。

「一つの約束」は昭和十九年頃の発表と推測されるが初出誌未確認である。歿後『如是我聞』に収録された。『如是我聞』所掲この作品の初出に関しては全集に「一つの約束」末尾には、「『青森県某誌』（昭和十九年頃、誌名未詳）——とある。（中略）「一つの約束」の初出雑誌切り抜きが残されていて、初出本文は確認しうるが、それによれば、初出誌はB5判であったようだ。青森県内での文芸雑誌の発行状況について、もつともよく知っていると思われる小山内時雄に教示を乞うたところ、「昭和十九年では、青森県の俳誌も統合されて刊行になっており、しかも、B5版（ママ）とすれば『月刊東奥』ぐらいしか考えられず、それに所載がないとすれば一寸見当もつきません」（昭和六十三年十月十九日付山内祥史宛手紙）ということであった。（中略）

全号調査したが、「一つの約束」の所載誌はなかった。今後の調査に期待したい。

しかし、その後も所載誌は見つかっていないようで、山内祥史『太宰治の年譜』（大修館書店、2012年12月）にも昭和十九年の項に□の枠組みで「『一つの約束』昭和19年頃脱稿」とあるのみで、初出は確認できていない。

切り抜きが残っていたということから、どこかに所載されたことは間違いないようであるが、戦争末期で紙の無い時代にどのような雑誌に載ったのかは重要である。特に、この作品の最後の「第一線に於いて、戦って居られる諸君」以下の部分をどのようなメッセージ性を持って書かれたのかということを考えるにも、つまり、戦争中の太宰の文芸銃後運動などとの関連や、戦後の太宰のリベルタン宣言（注1）などとの問題などから知りたいのではあるが、今のところ不明なままである。

また、『太宰治大事典』（志村有弘編、勉誠出版、2005年1月）や『太宰治全作品研究事典』（安藤宏編、勉誠社、1995年11月）『太宰治事典』（東郷克美編、学燈社、1995年5月）などにも項目としても入っていない、今まで全く顧みられることもなかった小品である。

この「一つの約束」という作品は出典未詳というそのような事情もあってか、管見によれば、この作品を論じたものは竹内栄美子「語り手はどこにいるのか——太宰治『一つの約束』」（『太宰治研究21』和泉書院、2013年6月）のみである。

しかし、この論は、「第一線で戦っておられる諸君」以下の最後のバ

ラグラフに焦点を当て、「文学のためであれ、戦争のためであれ、一家団欒を壊さないためであれ何であれ、彼らは死なないほうがよかったと私には思われてならない」と書かれ、『死』は称揚されるべきものではない」「そんな資格は誰にもない」と続けられ、論の最後に「稀代の語り手太宰治であるだけに、それを踏み越えてしまった振る舞いが惜しまれてならない」と結ばれている。この小品を国策的と断罪する、この主観的な論が端的に示すように、戦争協力者の太宰に否定的な太宰論者はこの水夫と燈台守のエピソードが何度も戦争末期の昭和十九年に繰り返されてることに気づきながら、敢えて論じることが避けられてきたのかもしれない。

戦争中の太宰治に関しては、日本浪漫派との関係から国粹主義的な面と抵抗主義的な面のどちらにいたのかというのは評価の分かれるところであるが、私はここではこのエピソード自体に注目していきたい。

竹内氏が残念がるように、最後の部分に注目して昭和十九年に発表されたことを鑑みれば、太宰の文芸統後の宣言と読むこともできる。

しかし、太宰は、遭難者が一家団欒を壊すことを一瞬躊躇することによって自らが死んでいく物語。それは「幻想」にすぎないかもしれないが、「美しい行為」と呼び、「誰も見ていない事実」にこそ、「高貴な宝玉が光って」おり、「それをこそ書きたいというのが、作者の生甲斐になっている」と書く。

そして、荒れ狂う暗い海から這い上がってきた悲惨な遭難者の姿と、明るく暖かな室内で幼子と若夫婦の夕餉を囲む幸福な一家団欒の情景を対照させること自体が太宰の意図だったのであろう。「炉辺の幸福」（注

2）への憧れを強く抱きながらも、誰にも知られることなく怒涛にのまられていく自らの宿命を、それこそが文学者の宿命との予感を太宰はこの時すでに感じていたはずである。

これは、まさに太宰のロマン主義宣言ともいえるものであり、文学とはそのようなものであるはずだという強い思いが、このエピソードには込められている。

二、

同じ昭和十九年に書かれた短編「雪の夜の話」にもよく似たエピソードが出てくる。

戦争中のこの時期に多くなる、女性の語りの文体をとった小品で、次のような一文から始まる。

あの日、朝から、雪が降っていたわね。もうせんから、とりかかっていたおツルちゃん（姪）のモンベが出来あがったので、あの日、学校の帰り、それをとどけに中野の叔母さんのうちに寄ったの。そうして、スルメを二枚お土産にもらって、吉祥寺駅に着いた時には、もう暗くなっていて、雪は一尺以上も積り、なおその上やまずひそひそと降っていました。

「私」は、妊娠中の義姉に食べさせようと思っていたスルメを無くし、その代わりに綺麗な雪景色を目に焼き付けて、それを義姉へのお土産にしようとする。

人間の眼玉は、風景をたくわえる事が出来ると、いつか兄さんが教えて下さった。電球をちよつとのあいだ見つめて、それから眼をつぶっても眼蓋の裏にありありと電球が見えるだろう、それが証拠だ、それに就いて、むかしデンマークに、こんな話があった、と兄さんが次のような短いロマン스를私に教えて下さったが、兄さんのお話はいつもでたらめばかりで、少しもあてにならないけれど、でもあの時のお話だけは、たとい兄さんの嘘のつくり話であつても、ちよつといのお話だと思ひました。

むかし、デンマークの或るお医者が、難破した若い水夫の死体を解剖して、その眼球を顕微鏡でもって調べその網膜に美しい一家団欒の光景が写されているのを見つけて、友人の小説家にそれを報告したところが、その小説家はたちどころにその不思議の現象に対して次のような解説を与えた。その若い水夫は難破して怒濤に巻き込まれ、岸にたたきつけられ、無我夢中でしがみついたところは、燈台の窓縁であつた、やれうれしや、たすけを求めて叫ぼうとして、ふと窓の中をのぞくと、いましも燈台守の一家がつつましくも楽しい夕食をはじめようとしている、ああ、いけない、おれがいま「たすけてえ!」と凄声を出して叫ぶとこの一家の団欒が滅茶苦茶になると思つたら、窓縁にしがみついた指先の力が抜けたとたんに、ざあつとまた大浪が来て、水夫のからだを沖に連れて行つてしまつたのだ、たしかにそうだ、この水夫は世の中で一ばん優しくてそうして気高い人なのだ、という解釈を下し、お医者もそれに賛成して、二人でその水夫の死体をねんごろに葬つたというお話。

私はこのお話を信じたい。たとい科学の上では有り得ない話でも、それでも私は信じたい。私はあの雪の夜に、ふとこの物語を思い出し、(後略)

このあと、胎教のために「綺麗なひとの絵姿を私の部屋の壁に張つてください」というお嬢さんのためお兄さんは「孫次郎というあてやかな能面の写真と、雪の小面という可憐な能面の写真を二枚張り付け」、その真ん中に「兄さんのしかめつらの写真」を張つてお嬢さんに嫌がられ撤回する。兄は妹より沢山美しい景色を見てきているので妹の目より「俺の眼を見たほうが百倍も効果があらあ」というが、お嬢さんは「でも、とうさんの眼は綺麗な景色を百倍も千倍も見たかわりに、きたないものも百倍も千倍も見てこられたお眼ですものね」と言われてしまう。新たな命の誕生を楽しみにする若夫婦と妹との日常的なたわいない話が語られる。これも今まであまり注目されてこなかった太宰中期の小品である。「遭難者」と「水夫」との違いはあるものの、例え話として語られる水夫と燈台守の一家団欒とのエピソードは「一つの約束」と殆ど同じ内容となっている。

デンマークの話とされているのは、「少女ノ友」という発表雑誌の読者層を意識して、明治時代から「人魚姫」「雪の女王」などで親しまれているアンデルセンの国だからであり、童話的要素を強くする意図からであろう。

「雪の夜の話」について詳しく考察した数少ない論文の一つである大塚美保氏(注3)は、このエピソードのプレテキストとして「安藤宏氏

のご教示による」として片岡鉄兵の「幽霊船」(『文芸時代』大13年11月)という短編を挙げている。

片岡鉄兵の「幽霊船」は三段組五枚足らずの短編で、短い「A舵手が死ぬるまで」と舵手が見た室内の男女の関係の現実を描いた比較的長い「B女が喪心するまで」からなる、戦前の昭和十一年に編まれた全八巻の「鐵兵傑作全集」(非凡閣)にも収められていない無名の短編である。

その「幽霊船」の「A舵手が死ぬるまで」の章は「沈んだのは幸華丸といふ大きな帆船である」という一文から始まる。

「暗礁」した「幸華丸」の「ほかの船員は、みな恐らく溺死したであろう」が「舵手ひとり、深夜、岬の鼻に打ち上げられ」、瀕死の彼は最後の力をふり絞って「おだやかな灯が洩れて居る」岬の「小舎」の「窓ガラスの身をくつつけるやうにして、室内を覗いた」が、彼の目に入った「一對の男女が作る室内の光景」は「色彩の強い光彩を以て彼の心臓に迫った」。「救いを叫んで、室内の男女の恍惚の力をせき止めやうか? 今、死なうとする舵手は彼が最後に此世に残さうとする夢を惜まなければならなかった。此の光景の進行を邪魔してまで、彼自身の救いを叫ぶ必要があるのを漠然と感じることは感じた。けれども、臨終の彼にはその力がなかった。彼には、光景を最後まで見届けて、室内の見知らぬ男女を祝福すると云ふ良い力が只一つ残されて居るばかりだった。そして「彼の死体は、苦もなく元の海へ攫はれ去つたのである」と結ばれる。

それに続く「B女が喪心するまで」は「燈台守の官舎は、風が吹く度にぐらぐらゆれた」と始まり、「憂鬱な顔をしている」「若い燈台守夫婦」は些細なことで夫婦喧嘩をしている。嵐の中酒を買ってこい、と言う夫

に対して女は「去年病気で死んだ許婚の人の事を想い出して彼に反抗している」。女は仕方なく酒を買いに行くが夫に対する憎しみは募り、夕食の食卓を囲みながら優しくした許婚を思い泣き続ける女を慰めようと男は女を引き寄せ接吻する。先に寝入ってしまった男をよそに女は涙の中に幽霊船の幻影を見る。嵐も収まった深夜、「あの人が戻ってきた!」と叫び、「喪心した」彼女を見下ろしていた「良人」に『妾、ごめんね。済まない事になっちゃって』彼女は空に向つてさう云ふと、さめざめと子供のやうに泣き出した」と結ばれる。

片岡鉄兵「幽霊船」というこの作品は、「A舵手が死ぬるまで」の舵手が目に焼き付けた睦まじい燈台守の若夫婦の光景が、「B女が喪心するまで」で実際のすれ違う夫婦の現実を対比させるのが狙いなのである。彼女の見た幽霊船や死んだ許婚の幻は実際に遭難した舵手の姿の錯覚ということになる。

私も「一つの約束」に描かれた遭難者と燈台守夫婦のエピソードには太宰の事なので確かに典拠があるだろうとは初めから思っていたが、「幽霊船」を見つけたという安藤氏の慧眼に脱帽する。この典拠との違いを探ることによって太宰の意図も明確になってくる。

片岡鉄兵の「幽霊船」は嵐の中窓外から舵手が見た「恍惚とした」男女の姿と室内の男女の現実を際立させるといふ構成で、主眼は後半の男女のすれ違う現実のほうにある。遭難した瀕死の舵手が窓外から見た「祝福すべき」若いカップルの営みは、実際は思いやりのない夫と死んだ許婚が忘れられない妻との陰湿な関係にある夫婦の姿に他ならなかった。

私は太宰の繰り返しされるこのエピソードの典拠を求めてネット上を探

索していた時に、テニスの「イノック・アーデン」を挙げている人を見かけたが、今回初めて片岡鉄兵の「幽霊船」を読んで「イノック・アーデン」ではなく、間違いなく太宰が典拠にしたのはこの作品のほうであろうと確信した。

「イノック・アーデン」は、流離つて帰ってきた水夫イノック・アーデンが自分の親友と結ばれた妻の幸せそうな姿を窓外に見て身を引き再び流離うという物語であり、昭和初めに翻訳され、昭和十一年に岩波文庫にも収められたので、多分太宰も読んでいたであろう。しかし、そのような話は古来たくさんあって、近年のベトナム戦争を描いたアメリカ映画「ディアハンター」も似たような話だった記憶がある。また、片岡鉄兵の「幽霊船」自体も「イノック・アーデン」から影響を受けたとは思われない。片岡の「幽霊船」は夫に対する不満から死んだ許婚の幻影を見る女に主眼があるのであるからテーマとしても違っている。

この片岡鉄兵の「幽霊船」にインスピレーションされて作られたと思われる太宰治の「一つの約束」や「雪の夜の話」などの遭難者が窓外からみる光景が若い男女の睦事ではなく、「燈台守の夫婦とその幼い女兒とが、つましくも仕合せな夕食」を囲む一家団欒の幸福な光景に変えられていることは大事であろう。それにはこの作品群が書かれた太宰治自身の私生活が関係していたと思われる。

太宰には開戦の年の昭和十六年六月に長女・園子が誕生し、妻子を連れて翌年十月に病気の母を見舞うため久しぶりに郷里津軽に帰り、『新風土記叢書』の依頼を受け十九年五月から六月にかけて津軽を旅して、十一月に名作「津軽」を発表している。知られていることではあるが、

この時期は太宰が一家庭人として生きていこうとしていた時期と重なる。

昭和十九年八月に長男・正樹が誕生しており、「雪の夜の話」の妊娠している「お嫂さん」はその当時の太宰の妻・美知子とちょうど重なってくる。

太宰にとって、生活者としての幸福と文学者としての幸福の両立の可能性を夢見ることのできる最後の時期でもあったのではなからうか。だからこそ、戦禍が厳しくなってきたこの時期に遭難者と燈台守の一家団欒のエピソードが繰り返されたのであろう。

しかし、戦況はますます厳しくなり、敗戦と戦後の混乱の現実の中で太宰は二度とこの物語を繰り返すことはなくなるのであった。

このエピソードのほかに「雪の夜の話」という小品は、いろんな物語やエピソードを上手に太宰風に編みこんで作り出していくという、太宰作品の創作方法の一端を見せてくれるという点でも興味深い。

眼球に残像が残るというのも「網膜残像」として江戸川乱歩などもトリックの一つとして利用しているし、後半に出てくる胎教として壁に貼る「雪の小面」と「孫次郎」の写真のエピソードも大塚氏が指摘しているように、太宰が読んだという金剛巖著『能と能面』弘文堂書房、昭和十五年五月の序文に続く巻頭「孫次郎」という文章の冒頭「妻が妊娠すると、その座右に一つの美しい能面をかけて始終これを眺めるやうにすることが、私の家の代々の掟となつてゐる」で、それは「大抵小面とか孫次郎とかに定まつてゐるやうで」とあるところから太宰がとってきていることは間違いない。「小面」の中でも特に「雪の小面」としているのは、

この本の十章「能と能面」の「雪の小面」の話からであろう。

大宰の作品の多くが、先行する作品やほかの人の手紙や手記を典拠としていることは有名であるが、この「雪の夜の話」はその典型である。典拠であろう文章を探っていくほど、いろんなものを使いながら少女の語りの手法を使って、太宰ワールドに作り変えてしまう手法の見事さに感嘆する。

三、

この水夫と燈台守の一家の団欒の物語は、ふるさとの「人と人との心のふれあい」である「愛」を「専門科目」とする自らを再認識し、小泊にねえやの「たけ」を訪ねて「たけ」の横に座り、「生まれてはじめて心の平和を体験した」と書く、名作「津軽」（『新風土記叢書』小山書店、昭和19年11月刊）に続いて執筆された中編「惜別」（朝日新聞社、昭和20年9月刊）にも三度登場してくるのである。

ここで「惜別」の成立事情を説明しておこう。

昭和十八年十一月五日六日に行われた大東亜会議において「大東亜共同宣言」が採決される。日本文学報国会は同宣言の五原則を主題とする文学作品化を図り、内閣情報局と連携し、翌十九年の一月、太宰治をはじめ川端康成や白井喬二など執筆希望者約五十名に対して説明会を開いた。同年二月に太宰は大東亜五大宣言の中の「大東亜の独立親和の確立」にテーマを決めて「惜別」の意図」と題する五枚半の文章を執筆して提出。友人の小田嶽夫の『魯迅伝』を読み、『大魯迅全集』『東亜文化圏』などを入手し『惜別』執筆の準備を進めていった。十二月依嘱作家（小

説部門が六名、戯曲部門が五名）が正式に決定され、十二月二十日に仙台医専在学当時の魯迅について調査するため太宰は仙台に向かい、五日間滞在して取材した。翌二十年の初頭から書き始められ、二月末にはほぼ完成されていたが、刊行は終戦直後の九月となった。なお、実際にこの公募で執筆され発表されたのは、小説部門の太宰の「惜別」と戯曲部門の森本薫「女の一生」だけであった。

「あとがき」の中で太宰は次のように述べている。

この「惜別」は、内閣情報局と文学報国会との委嘱で書きすめた小説には違いないけれども、しかし、両者からの話が無くても、私は、いつかは書いてみたいと思って、その材料を集め、その構想を久しく案じていた小説である。材料を集めるに当って、何かと親しく相談に乗って下さった方は、私の先輩に当る小説家、小田嶽夫氏である。

（中略）小田氏にも、『魯迅伝』という春の花のように甘美な名著があるけれども、いよいよ私がこの小説を書きはじめた、その直前に、竹内好氏から同氏の最近出版されたばかりの、これはまた秋の霜の如くきびしい名著「魯迅」が、全く思いがけなく私に恵送せられて来たのである。私は竹内氏とは、未だ一度も逢った事が無い。しかし、竹内氏が時たま雑誌に発表せられる支那文学に就いての論文を拝読し、これはよい、などと生意気にも同氏にひそかに見込を附けていたのである。いつか小田氏にお願いして、竹内氏に紹介してもらおうかとさえ思っていたのであるが、そのうちに竹内氏は出征なされたとか。それで、この竹内氏のご苦心の名著も、竹内氏のお留守の間に出版せら

れ、そうして、竹内氏が出征の際に、あの本が出来たら、太宰にも一部送ってやれ、とでも言い残して行かれたのであろうか、出版元から「著者の言いつけに依って貴下に一部贈呈する」という意味の送状が附け加えられていた。これだけでも既に不思議な恩寵なのに、さらにまた、その本の跋に、この支那文学の俊才が、かねてから私の下手な小説を好んで読まれていたらしい意外の事実が記されてあって、私は狼狽し赤面し、かつはこの奇縁に感奮し、少年の如く大いに勢いづいてこの仕事をはじめたというわけである。（中略）

なお、最後に、どうしても附け加えさせていたきたいのは、この仕事はあくまでも太宰という日本の一家の責任に於いて、自由に書きためられたもので、情報局も報国会も、私の執筆を拘束するようないややこしい注意など一言もおっしゃらなかったという一事である。しかも、私がこれを書き上げて、お役所に提出して、それがそのまま、一字半句の訂正も無く通過した。朝野一心、とでも言うべきであらうか、これは、私だけの幸福ではあるまい。

作品の梗概は、次のようなものである。

周樹人（魯迅）と東北帝大医学部の前身・仙台医専で同級生であった老医師は、魯迅の「藤野先生」という文章を持ってきた、日露戦争の頃の「日支親善の美談、とでも言ったような記事にして発表しようと思っている」と言う、感じのよくない新聞記者に取材される。「親和の先駆」と題されたその記事を読んで違和感を覚えた老医師は、「恩師と旧友の面影を正す」目的で手記を書くことにする。

東北の辺境から仙台にきた老医師（「私」）は周囲になじめないでいたが、松島への旅で偶然、清国留学生の周さんと出会い親しくなる。松島の一夜で周さんは仙台へ来たいきさつと西洋の科学である医学を学ぶことで中国民衆の教化の志を語った。周さんの講義ノートに毎回朱筆を入れて熱心に指導する藤野先生や周さんにお節介をやく津田も交えて親しくなっていくが、周さんは東京で夏休みを過ごした後何かに悩む様子で、日露戦争中で、スパイとして日本兵に殺される中国人を笑って見る中国民衆の姿を幻燈で見たことをきっかけに医学生を辞めて本国で文学を志すことを決断し、藤野先生から惜別という言葉が書かれた写真をもらって帰国する。

教科書にも採られている非常に有名な魯迅の「藤野先生」など多くの資料や現地取材をもとに、太宰としては珍しい評伝的な中編小説を成した。この遭難者と燈台守の一家団欒のエピソードは、魯迅を描いた異色の中編小説「惜別」の中にも終わりに近い部分で出てくるのである。

また、別な日であったか、周さんは更にこんな即興の譬え話でもって私を啓発してくれた事があった。

「難破して、自分の身が怒涛に巻き込まれ、海岸にたたきつけられ、必死にしがみついた所は、燈台の窓縁。やれ、嬉しや、と助けを求めて叫ぼうとして、窓の内を見ると、今しも燈台守の夫婦とその幼い女兒とが、つつましくも仕合せな夕食の最中だったのですね。ああ、いけない、と男は一瞬戸惑った。遠慮しちゃったのですね。たちまち、どぶんと大波が押し寄せ、その内気な遭難者のからだを一呑みにして、

沖遠く拉っし去った、とまあ、こんな話があると思いますね。遭難者は、もはや助かる筈はない。怒濤にもまれて、ひよっとしたら吹雪の夜だったかもしれないし、ひとりで、誰にも知られず死んだのです。もちろん、燈台守は何も知らずに、一家団欒の食事を続けていたに違いないし、もし吹雪の夜だとしたら、月も星も、それを見ていなかったわけです。結局、誰も知らない。事実は小説よりも奇なり、なんて言う人もあるようですが、誰も知らない事実だって、この世の中にあるのです。しかも、そのような、誰にも目撃せられていない人生の片隅に於いて行われている事実こそ、高貴な宝玉が光っている場合が多いのです。それを天賦の不思議な触角で捜し出すのが文芸です。文芸の創造は、だから、世の中に表彰せられている事実よりも、さらに真実に近いのです。文芸が無ければ、この世の中は、すきまだらけです。文芸は、その不公平な空洞を、水が低きに流れるように自然に充溢させて行くのです。」

そんな話を聞かせてもらうと、私のような野暮な山猿にも、なるほど、そんなものか、やはりこの世の中には、文芸というものが無ければ、油の注入の少い車輪のように、どんなに始めは勢いよく廻転しても、すぐに軋って破滅してしまうものかも知れない、と合点が行くものの、しかし、また一方、あんなに熱心に周さんの医学の勉強を指導して下さっている藤野先生の事を思うと、悲しくなって、深い溜息の出る事もあるのである。

このエピソードは中国民衆を変えるためには西洋の科学である医学を

学ぶことが第一だと考えていた周さんが、幻燈事件をきっかけに、医学ではなく文学の力のほうを信じるようになる「警え話」として語られており、幻燈事件のみでは説得性に欠けると感じた太宰は、周さんに「誰にも目撃せられていない人生の片隅に於いて行われている事実こそ、高貴な宝玉が光っている場合が多いのです。それを天賦の不思議な触角で捜し出すのが文芸です」と語らせるためにこそこのエピソードをまたまた持ってきたのであった。文芸と言うものの意義を強調するためにお気に入りのエピソードを持つてくる必然性が太宰にはあったのである。

この「惜別」と言う作品は、太宰の作品の中では異色のものであり、評価の分かれる問題作なのであるが、魯迅に関して全く不勉強な私は、このエピソードに関して以外の事には今回は触れることを避けた。

創作の参考にされた「魯迅」の竹内好氏（注4）の不満に始まり、尾崎秀樹氏（注5）による創作の経緯に関する綿密な論など、太宰が描いた魯迅像についてのいくつかの論を今回私も散見したが、何を典拠に使用しようと、それが戦時中の内閣情報局からの委嘱小説であろうと、太宰は自分の事しか語らない作家であるただ述べておきたい。典拠の使い方の巧拙はあるかもしれないが、「惜別」で太宰は自分の文芸への思いを語っているのに過ぎないからこそ、三度遭難者と燈台守の一家団欒のエピソードを持ち出したのである。魯迅を高く評価する人にとっては物足らない魯迅伝であるには違いないであろうが、もともとその当初から「魯迅の晩年の文學論には、作者は興味を持てませんので、後年の魯迅の事には一さい觸れず、ただ純情多感の若い一清國留學生としての『周さん』を描くつもりであります」と、「『惜別』の意図」に太宰自身が書いてい

て、魯迅に寄り添うものではなく、太宰の魯迅、つまりは、いつもの通り、太宰自身を描くつもりであったことは明白である。

太宰は「惜別」の直前に書かれた名作「津軽」の中で、「信じるところに現実はあるのであつて、現実決して人を信じさせることができない」と書いているし、「雪の夜の話」でも「兄さんのお話はいつもでたらめばかりで、少しもあてにならないけれど」「私はこのお話を信じたい。たとい科学の上では有り得ない話でも、それでも私は信じたい」と書いていて、これこそがなんどもこの時期に太宰が繰り返したこのエピソードを語る理由なのであらう。

この時期の太宰の切実な文学創作者としての思いが、このエピソードには込められていて、「作者の一夜の幻想」は事実を超えた「高貴な宝玉が光っている」であり、そこにこそ科学を超える文学の力、魔法があると作家太宰は訴えたかったのであらう。医学を捨てて文学者として生きる道を選んだ魯迅に太宰が興味を持ったのもそこにあつたことは間違いない。

文学者太宰が戦争中に自分の在処を見つめて、「誰も見てない真実」を語るのが文学者の使命であると考えていたとして、それが異郷の地で玉碎していく兵士たちに対して呼びかけられたものであつても、それを戦後の平和な時代に生きている我々が今さら非難することは意味のないことではなからうか。

大宰にはこの時期にアツツ島で戦死した友人を悼んだ「散華」（「新若人」昭19年3月）という作品もあり、戦後にも「未帰還の友に」（「潮流」昭21年5月）という小品も書いている。「散華」の末尾の「純粋な献身」

こそは「文学のための死」と重ねられているのであり、180度変わった日本社会の中でも、戦中も戦後も太宰のロマン的心情は変わっていないと言える。

四、

評論家の平野謙は『現代の作家』（青木書店、昭31年）の中で、昭和十六年から戦争末期までの中期の太宰治を評して、「生活者至上主義」と呼び、中期の作品を高く評価した。

しかし、ロマン主義的、芸術至上主義的な生や死に惹かれる太宰の「生活者至上主義」にはやはり限界があつたというべきであらう。この昭和十九年に繰り返された遭難者と燈台守一家の団欒のエピソードは、所詮暖かい一家団欒の中にあるのではなく、それを壊さずその光景を目に焼き付けて怒濤の海に死んでいく者としての宿命を語っているともいえる。それは、トーマスマンの有名な芸術家小説「トーニオ・クレール」にも似ている。芸術家は決して平凡で幸福な生活者としての輪には入れない。それこそロマン主義者の宿命である。

昭和十四年一月に井伏鱒二夫妻の媒酌で見合い結婚した美知子夫人との間に十六年六月に長女園子を授かるが、妻美知子の妊娠中に書かれた「東京八景」（「文学界」昭16・1）では、破滅的な青春時代を清算することを決意して次のように語る。

私は、夕陽の見える三畳間にあぐらをかいて、佻しい食事をしながら妻に言った。「僕は、こんな男だから出世も出来ないし、お金持に

もならない。けれども、この家一つは何とかして守って行くつもりだ」その時に、ふと東京八景を思いついたのである。過去が、走馬燈のように胸の中で廻った。

終戦後も、「薄明」〔『薄明』新紀元社、昭21年11月〕では、三鷹、甲府での九死に一生を得る空襲体験を書いて「とにかく妻子を死なせてはいけない」と書く太宰であったが、それは戦中の回想であり、周知のように太田静子や山崎富栄との不倫関係もでき、それらを素材にした「ピヨンの妻」〔『展望』昭22年3月〕「斜陽」〔『新潮』昭22年7～10月〕など自らの火宅を描くことで一躍流行作家、時代の寵児となるのである。翌月の「父」〔『人間』昭22年4月〕では、次のように「炉辺の幸福」から逸脱せざる得ない自分を語るようになる。

親が無くても子は育つ、という。私の場合、親が有るから子は育たぬのだ。親が、子供の貯金をさえ使い果している始末なのだ。

炉辺の幸福。どうして私には、それが出来ないのだろう。とても、いたたまらない気がするのである。炉辺が、こわくてならぬのである。

「地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合いの形に似たる浮気」を繰り返し、寒風の中、幼い長女と赤ん坊を背負い、熱がある身で配給の列に並ぶ妻の傍らを、酔っぱらいながら年増の愛人と連れだってすれ違い、「義」のために「意地になって地獄にはまり込まなければならぬ」と自らに言い聞かせる主人公を描く。「父はどこかで、

義のために」「地獄の思ひで遊んでゐる」と書くが、「義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似てゐる」と結ぶ。

「家庭の幸福」〔『中央公論』昭23年8月、歿後〕ではその末尾に有名な「家庭の幸福は諸悪の下」と書き、「如是我聞」〔『新潮』昭23年5～7月、中絶〕では「老大家」を批判して、「彼らの神」は「家庭のエゴイズム」であり、「所詮は、家庭生活の安楽だけが、最後の念願だからなのではあるまいか」と糾弾する。家庭の幸福を象徴する夕餉を囲む燈台守一家の団欒からの遁走を繰り返す無頼派として戦後の混乱期に流行作家となる。

そして、昭和二十三年六月十三日に妻子を残して愛人・山崎富栄と玉川上水で心中し、遺体が発見された十九日は太宰の三十九歳の誕生日であり、のちに桜桃忌と呼ばれるようになる。

その桜桃忌の由来となった「桜桃」〔『世界』昭23年5月〕は次のように結ばれる。

私の家では、子供たちに、ぜいたくなものを食べさせない。子供たちは、桜桃など、見た事も無いかもしれない。食べさせたら、よろこぶだろう。父が持つて帰ったら、よろこぶだろう。蔓を糸でつないで、首にかけると、桜桃は、珊瑚の首飾りのように見えるだろう。

しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまずそうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は、子供よりも親が大事。

妻や幼子と囲むささやかな一家団欒に痛切にひかれながらも飲み屋で

愛人と極めてまずそうに桜桃を食べて、「子供よりも親が大事」と自分に言い聞かせるしかなかった太宰の最期がここにある。

所詮、太宰治という作家は、燈台守の一家の団欒を眼の底に焼き付けて怒涛の海に消えていくべき運命であることを、戦争末期のこの時期に見すえていたのであろう。それこそ、ロマン主義者の宿命なのであるから。

ロマン主義者の系譜である三島由紀夫にも太宰が残した「一つの約束」にもつながる最後の「約束」があったことを私は偶然思い出した。太宰の「一つの約束」は誰にも知られることなく戦地で死んでいく兵士への約束であり、同時に「誰も見えない事実」の中から「高貴な宝玉」を掘り出すことを自らの使命とするという文学者としての約束でもある。

三島由紀夫の「太宰嫌い」は有名であるが、三島は「私の遍歴時代」（『東京新聞』昭和38年1月10日～5月23日）の中で、その嫌悪には「愛憎の法則」が潜んでいることを認めている。

太宰治と三島由紀夫は世代も違うし、日本浪漫派と関係性も相違する。しかし、そのような具体的な関係ではなく、日本近代文学の中のロマン主義の系譜としてみると、隠された太宰治の「一つの約束」から時を経て、三島の「果たし得てゐない約束——私の中の二十五年——」（『サンケイ新聞・夕刊』1970年7月7日）へとどこかでつながっているように思える。もちろん三島由紀夫が太宰の誰も触れてこなかった小品「一つの約束」を知っていたとは思われないが、私が図らずしも授業で三島由紀夫を紹介するプリントに、これも太宰と同じ理由、短く端的にその作家を表象する文章として「果たし得てゐない約束」をずっと使っ

てきていた不思議に自分でも驚いている。

三島由紀夫の遺書ともいうべき「果たし得てゐない約束」の中で、「戦後民主主義とそこから生ずる偽善といふおそるべきバチルス」に苦悩しながらも「そこから利得を得、のうのうと暮らしてきた」自らを認めたうえで否定し、次のように結んでいる。

二十五年間に希望を一つ一つ失つて、もはや行き着く先が見えてしまったやうな今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、いかに俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに膨大であつたかに啞然とする。これだけのエネルギーを絶望に使つてゐたら、もう少しどうにかなつてゐたのではないか。私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行つたら「日本」はなくなつてしまふのではないかといふ感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代はりには、無機的な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであらう。それでもないと思つてゐる人たちと、私は口をきく気にもなれなくなつてゐるのである。

五、

今回、私が初めて門外漢の太宰治について何か紀要に書いてみようと思つたきっかけは、この春卒業するある学生の卒業論文がきっかけだった。

私がかれこれ三十年勤務した茨城女子短期大学は、当初は国語国文専

攻や国文科であったが、近年入学希望者の減少が大きく、学科名もことばの芸術学科、そして表現文化学科と変わり、卒業論文も身体表現と言語文化表現とに分かれ、日本文学を卒論に取り上げようとする学生も少なくなってきた。しかし、今年のある学生が、太宰治のほとんど注目されてこなかった短編「千代女」を取り上げて、先行文献が少ない中、真摯に作品に向き合って、彼女なりの結論を導き出した。

それを読んだ私は、初心に立ち戻り、私が思春期に出会い、日本文学に興味を持つきっかけともなった太宰治について、初めてその作品と真摯に向き合って何か書いてみたいと思った次第である。

大宰が「惜別」の「あとがき」に「春の花のように甘美な名著」と書いていた小田巖夫氏の「魯迅伝」と「秋の霜の如くきびしい名著」と書いている竹内好氏の「魯迅」を読み比べて、太宰がどのようにインスパイアされているのかをたどってみたいとは思ったのであるが、それはまたの機会に譲りたい。そもそも、魯迅の作品自体をほとんど読んでいない私なので、今回の「惜別」をきっかけに、じっくり魯迅の作品を読んでみようかと思い始めた。

(注1) 戦争中の国粹主義を全否定する風潮に対して「私は無頼派（リベルタン）ですから、この気風に反抗し、保守党に加盟し、まっさきにギロチンにかかってやろうかと思っています」（昭21年1月15日付、井伏鱒二宛書簡）と書き、また、「十五年間」（「文化展望」昭21年4月）の中でも「日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を罵倒してみたって、それはもう自由思想ではない。そ

れこそ真空管の中の鳩である。真の勇氣ある自由思想家なら、いまこそ何を措いても叫ばなければならぬ事がある。天皇陛下万歳！」と書き、「苦悩の年鑑」（「新文芸」昭21年6月）では「天皇の悪口を言うものが激増して来た。しかし、そうなって見ると私は、これまでどんなに深く天皇を愛して来たのかを知った。私は、保守派を友人たちに宣言した」などと書いている。

(注2) 「父」（人間）昭22年4月 より

(注3) 大塚美保 「『雪の夜の話』論」（『太宰治研究12』、和泉書院、2004年6月）

(注4) 竹内好 「藤野先生」（『近代文学』昭22年2月）、「花鳥風月」（『新日本文学』昭31年10月） など

(注5) 尾崎秀樹 「『惜別』前後」（『文芸日本』昭34年6～9月）

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省. 平成 22 年度保育士養成課程等の改正について (中間まとめ). 2010
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について. 2015
- 3) 中央教育審議会. 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申). 2006
- 4) 文部科学省. 大学設置基準等の一部を改正する省令. 2007
- 5) 鍛冶谷静・北村瑞穂・金津春江・榊原和子. 教員相互による公開授業参観の成果と課題―授業担当者及び参観者による報告書のテキストマイニング分析を通して―, 2015
- ・ 山之内輝美・永久欣也・古賀野卓. 保育者養成校における「総合演習」の教育実践報告―「保育・教職実践演習 (幼稚園)」に向けての課題を探る, 2010, 『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 (21)』, 209 - 218
- ・ 小山優子・栗山とし子・白川浩. 保育者養成における「教職実践演習」の取り組み, 2012, 『島根県立大学短期大学部松江キャンパス』, 53 - 62
- ・ 香川晴美・鈴木正和・伊藤潔志. 保育者の専門性としての発表能力とその育成―「保育・実践演習」を核とした科目間連携に向けて―, 2013, 『山陽学園短期大学紀要 第 44 巻』, 8 - 19
- ・ 鎌田由紀子. 保育者養成校における「保育実践演習」の授業展開と一考察, 2012, 『江戸川学園人間科学研究紀要 第 28 号』, 147 - 158
- ・ 大島英樹. 教職に関する科目としての「教職実践演習」の意味―「総合演習」としての対比において―, 2011, 『立正大学心理学研究所紀要 第 9 号』, 27 - 38
- ・ 栗原ひとみ. 「保育実践演習」における学生の実践力要請について―出前保育を通して―, 2016, 『植草学園大学研究紀要 第 8 巻』, 95 - 105

こうして振り返ると、「保育実践演習」は全教員協同型の授業として、教員の士気を高め、保育の現場と各々がもつ知識や専門性を結び付ける非常に意義深い授業であると考えられる。

(2) 今後の課題

「いっしょに遊ぼう」の活動は、保育科の入学人数が減少し、附属園の各年齢の園児数と同数程度であったことがあり、「少人数だからできること」として始まった。平成22年度から平成28年までの6年間は80人定員だったが、平成29年度からは100人定員に戻ることになったこともあり、今後学生一人一人が十分に力を発揮できるような授業方法を新たに模索していく必要がある。また、「保育実践演習」は、前述のように本来なら「自らの学びを振り返り、保育士としての必要な知識・技能を修得したことを確認する」ことが教科の目標にあげられており、最終学年に履修した方が望ましい科目である。あえて1年次通年科目として開講し、その成果も上述のように捉えられるが、時間割の過密で学生の自学時間の確保が難しくなっていることから、初年度通年科目の必要があるかどうかの検討も必要である。指定保育士養成施設して基準の「5 教育課程」に「⑦ 告示に定める教科目のうち、2科目以上を合わせて1科目とすることは、併合された科目の関連性が深いと考えられる場合は差し支えないが、教科目と、必修科目又は選択必修科目とを併合することは不適当であること」とあるように、関連性が深いと考えられる教科目を併合することも考えに入れながら、今後カリキュラムを考えていくことが必要である。

5. まとめ（カリキュラムマネジメントの視点から）

「保育実践演習」を1年時通年科目（2単位）として、「教職実践演習」を2年次後期科目（2単位）として開講してきた。

「保育実践演習」では、前半を「いっしょに遊ぼう」の活動を中心として展開した。それは、入学直後の学生が子どもの世界を知り保育の面白さを知るきっかけとなったり、保育を学ぼうとする意欲を維持、高揚させるという初年次教育の役割も果たしていると考えられる。後半は各自の保育への関心を深め、2年次の「ゼミナール」へ深化していけるようにと考え展開してきた。「ゼミナール」は、「保育の内容と方法」系列の科目として2年次の通年科目として開講している保育士必修科目かつ卒業必修科目である。10人前後の学生を保育科専任教員が担当し、子育て支援や社会的養護、障害児保育、保育内容研究（造形、音楽、身体表現）等の現代的課題を明らかにし追究するというものである。ゼミナールごとにフィールドワークや視察見学、子育てひろばの運営、親子音楽ワークショップの開催等様々な角度から学びを深めている。「教職実践演習」については、毎年、授業方法、内容を検討しながら実施しているところであるが、年度によって教員がオムニバスの（履修のカルテをもとに不足していると考えられる内容を織り込んで）行ったり、施設視察を取り入れたりしながら、これまでの学びのまとめとしている。

この「保育実践演習」「ゼミナール」「教職実践演習」の授業が、保育という専門性を学んでいく過程で有機的につながるとともに実習科目と共に保育科カリキュラムの核となるように構成していく必要がある。そして、教員同士が連携しながら科目横断的に関連させながら展開していくことで、保育科カリキュラムがより一層充実したものになっていくものと考えている。

そのようなことから「いっしょに遊ぼう」の初年度は、「保育科学生のために子どもたちとの交流の時間をとってほしい」と保育科からの強い要望で活動が始まった。回数を重ねる毎に、附属園の保育者にも趣旨を理解していただくとともに様子がわかり見通しがもてるようになってきたようである。すると、徐々に附属園の方からも育ちにに応じている内容であることや日常の保育と関連があること、経験したことがまた日常の保育に再現されるような活動という要望も出されるようになってきた。次第に、学生と一緒に作ったマラカスで表現遊びにつながったり、学生と共に行ったスイミーごっこが運動会のリズム表現へと発展したり、ダイナミックに制作した経験がきっかけとなり作品展へと発展したりという保育の流れの中に、「いっしょに遊ぼう」が位置づけられるようになってきた。新たに、附属園側から徒歩による園外保育の実施時に、安全確保のためにも学生とともに歩き、現地で自然に触れ合う活動を組み込んでほしいとの要望もあり、園外保育（4、5歳児対象）の下見、計画、準備、実施、振り返りを他の授業との科目横断的な取り組みとして行うようになった。子どもの育ちと学生の育ちとを共に考えることで、互惠性のある活動へと成長してきていることを感じる。

「いっしょに遊ぼう」の活動がきっかけとなり、附属園への自由参観（7時30分から18時30分までの開所時間のいつでも参観したりボランティア活動を行える）や、実習前の相談会（実習に関しての心配事を保育者に相談できる時間を設定）など、学生が附属園を身近に感じられるような試みも行うようになってきた。附属園の保育者にとっても学生を身近に感じ、保育科教員と共に保育者を目指す学生を育てていくという姿勢がさらに強まったように感じる。

〈教員にとって〉

本授業では、保育科全教員が担当となり授業を展開している。様々な専門性をもつ教員たちが、協同しながら意図を張り巡らせ授業を構成することは、そのこと自体が貴重な時間であると思われる。当然ながら普段の授業では、教員は各々の専門性を基に個人で授業を構成、展開している。しかし本授業は決して一人で作り上げることは出来ないものであり、そこから教員間の繋がりが深まり積極的な対話が生まれた。指導計画を練ることと並行しながら、触れ合う前にはどのような活動を通してどのようなことを学生に体感させ、準備へと繋げていけば良いのか、教員間での話し合いが何度も行われた。子どもたちの育ちへや附属園での積み重ねられてきた体験については、どの授業でどう解説していくかなども検討した。これは、まさに保育現場で保育者が子どもに対し保育をすることとはほぼ同義と捉えることができる。教員の専門性に加え、保育者養成機関として、教員自らが実際の保育の準備を一通り行うことは、教員が教員として成長するための一つの契機だったのではないと思われる。

また、指導計画を練り作成する過程で、改めて環境構成の意味や導線の在り方など、教員自身が再認識できた。子どもたちの対象年齢を考慮しながら、入学後間もなく保育に関しての知識がはばない学生たちに保育について伝えるためには、より丁寧な説明が必要であると同時にモチベーションの維持についても考えるに至った。学生一人一人の発言や取り組み方を捉え、声かけや支援の仕方を考えるようになってきたのである。準備時間が足りないと保育を想定できないままの活動になってしまう恐れもあったため、それぞれの教員が担当する授業のなかで関係する部分について説明を補ったり、作業を進めたり、指導計画を考えたりする時間をとるようになっていった。それは、準備の補完ではあったものの、横断的な授業のきっかけとなった。

4. 「いっしょに遊ぼう」の成果と今後の課題

(1) 成果

〈学生にとって〉

「いっしょに遊ぼう」の取り組みは、実習に臨む前に実際の子どもたちと遊びを通して触れ合う体験的活動としても位置づけられる。活動後の振り返りから、学生にとって「子どもの世界を知る」第一歩として大きな意味を持つ活動となったことがわかる。年齢毎の活動を計画・準備、実践し、振り返るというサイクルの中で、学生たちは各年齢の育ちの理解や主体的な活動を誘発する環境を準備することの重要性、言葉かけやかかわり方について実践的に習得したと考えられる。また、グループごとに話し合いを進め、準備をしていく過程で一人一人の学生が必ず分担を任されるということにより、責任をもって担おうとする様子が見られ欠席者がいない回が多く見られた。

振り返りシートに記された数々のエピソードからも、学生たちは子どもの表現世界の豊かさに感嘆するとともに、驚きと発見に満ちた温かなまなざしをもって、子どもたちを仔細にとらえていることがわかる。さらには、実体験をもとに、環境構成の改善点や、年齢に応じた新たな活動へのアイデアを記述している学生や、「人見知りへの対応」「けんかの仲裁」「泣いている子への対応」といった困難な状況に直面し、「うまくいかなかった」といった戸惑いや不安を抱く学生がおり、保育を学ぶことへの意欲を新たにしている様子もうかがえたことから、保育を学ぶことへのモチベーションが維持されていることも捉えられる。

「いっしょに遊ぼう」の活動での子どもとの出会いが、その後の学びや就職に影響したという学生もいる。その学生の振り返りの文章には、「その日は学生と園児が2人1組のペアになって活動する流れでした。私のペアになったRちゃんは、私がいろいろ話しかけてもそれに反応することもなく、手をつなごうとしてもつなぐことなくいっしょに遊ぶということもしないことに心が折れる寸前でした。(中略) その数日後、この経験を誰かに聞いてほしくて保育科の先生にお話ししました。そして初めて発達に偏りがある子どもだということを知りました。そして話を聞いた後、私の頭では『いっしょに遊ぼう』の活動中、自分がどんなかかわりをしていたかが鮮明に蘇ってきて、『どうしてもっと工夫した声かけやかかわりができなかったのだろう』ととても後悔しました。その日から発達障がいについての知識を徐々に学んでいくようになり、深く関心を持つようになりました。(中略) そして、運動会ではRちゃんが同じクラスの友達や先生、家族の声援を受けながらリレーを力一杯走る姿に涙が出ました。『いっしょに遊ぼう』は短大に入って専門的な知識を学び始めて最初に子どもたちとかかわる実践的な活動です。準備段階から自分たちが力を合わせて行うので、子どもたちは勿論、学生も楽しく活動できます。(中略) Rちゃんとの出会いは私の短大生活を充実したものにしてくれたと思います。」と記されており、「いっしょに遊ぼう」での子どもとの出会いが自分の将来を決定するターニングポイントだったと振り返っている。

子どもたちとの双方向的なやりとりの中で得られた学びは、様々な保育に関する学習を応用するという科目横断的な学習能力をも高め、保育者を目指す上での礎となっていくと思われる。

〈附属園にとって〉

「いっしょに遊ぼう」の取り組みを始めるまでは、同じキャンパス内にある附属園といっても、ときどき授業で参観に訪れることがあるくらいで、実習まではほとんど交流がないという状態であった。

○活動の様子と振り返りから

遊びの内容が子どもの実態に照らし合わせて適切だったか、環境構成や援助は適切だったか、何をどう予想しておかなくてはいけないか、指導計画の「評価の観点」を意識した振り返りを行った。

園児	段ボール片を組み合わせた形を 楽しめたか ・園児を迎えに行った時、歩きながら「すみっコぐらしのロケットを作りたい」と言って、意欲満々で、イメージを膨らませていた。そして、三角形の段ボールをどんどん組み合わせていった。 ・作りたい物がどんどん増えてきて、最後は海賊になりきっていた。自分達で作った物で遊ぶことで、大変盛り上がるということが分かった。 ・「○○を作る」と、目的をもって作り始める場合と、作っていくうちに形となって命名する場合があるということが分かった。  段ボールの作品	先生や学生、友達と一緒に活動する楽しさを 味わっていたか ・最初、様々な段ボールを見て、しばらく迷っていた園児が、丸い二つの穴が空いている段ボールを見て、「目、みたい」と言い、ロボットを作ることに決まった。その後も、細長い段ボールを足にするなど、どんどん作り上げていく様子を一緒にしながら、子どもはすごいと思った。 ・私のグループに、とうとう最後まで何も作ろうとしない園児がいた。色々話しかけてみたがダメだった。どのような関わり方や声かけをしたらよいか、とても迷ったし、このようなこのような時にはどうしたらいいのだろうか。  お姉さんと一緒に
学 生	教材の準備や環境は、園児のイメージ や表現活動への意欲を高められるよう なものであったか ・この活動を通して、子どもがイメージしやすい環境や準備をしていくことで盛り上がるということが分かった。 ・活動途中で段ボールが足りなくなってしまう慌てた。材料は、多めに用意しておくべきだと思った。 ・子どもが段ボールをどのように組み合わせていくかを予想したり想像したりして、準備をすすめていくことができた。 ・段ボールの質や大きさ、形など、色々あると、子どもはイメージしている物が作りやすいということが分かった。  話し合い	園児とかかわりながら、5歳児の発達を 理解することができたか ・5歳児は、友達の存在を認め、イメージを共有して作り上げたり、協力して、一人ではできない物を完成したりすることができるとことが分かった。 ・3、4歳児よりも、自分の考えをきちんともっているが、中にはスムーズに言えない子どももいた。 ・男の子と女の子の好みの差があった。 ・手先がかなり器用であることが分かった。 ・身体面では、歩き方や走り方がしっかりしていた。 ・‘この段ボールが何に見えるか’や、‘この形から何ができるか’など、5歳児は、とても想像力が豊かであることが分かった。  仲良し

〈5歳児〉「段ボール板を組み合わせて大きなものを作ろう」

○指導計画

指導日時 平成28年11月4日（金） 10:00～11:30 （8:50～11:55）

学 年 5歳児 さくら組 29名（男児 19名 女児 10名）

ふじ組 26名（男児 16名 女児 10名）

- 事前準備
- ・本日の活動について、担任の先生と打合せをする。（流れ・準備物 等）
 - ・幼稚園で恐竜や大型動物について話をしたり、絵本や図鑑などを目につくところに出しておいていただく。
 - ・グループを決めておく。学生…番号順 園児…幼稚園でのグループ
 - ・大小の段ボール片を作り、切り込みを入れておく。
 - ・土台を作っておく。

ね ら い	○学生や先生と一緒にあそぶ楽しさを味わう。 ○楽しそうな遊びや活動に興味をもち、喜んで参加する。		内 容	□段ボール片を組み合わせて遊ぶ。 □学生や友達と一緒に動くことを楽しみながら、イメージを作り上げ共有していく。	
時 間	環境の構成		予想される子どもの活動		保育者・学生の援助
9:50	・体育館に使用する物を用意しておく。 ・トイレ、床の清掃等、園児が安全に活動できる環境を整えておく。 〈準備物〉 ・段ボール片		○学生と一緒に移動する。 ・上靴持参 （雨天時…スクールバスにて）		・幼稚園へ園児を迎えに行く。（1G から2名）
10:00	（切り込みを入れたもの） ・段ボールカッター・ハサミ ・目玉用画用紙・のり		○グループに分かれて座る。 ○短大の先生の話聞く。 ・本日の流れについて話を聞く ・遊びのイメージをもつ		・5歳児と学生がグループになって活動できるように、予め名簿を参考にグループを決めておく。
			・短大の学生と挨拶をかわす ・初めて会う学生に挨拶をする ・自分の名前を伝える		・これから活動について期待がもてるように、見本を見せながら話をする。
			○活動する。 ・土台の上に形作る		・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。
			・段ボール片を組み合わせる		・切り込み同士をかみ合わせるやり方を、丁寧に伝える。
			・つなげる		・園児の動きや気持ちを、言葉に置き換えながらかかわる。
			・できた形からイメージを広げる		・偶然にできた形から園児なりのイメージを膨らませられるよう、学生のイメージを押しつけないようにする。
			・組み合わせる		・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。
			・他のグループののを見てみる		
10:50			○見せ合う		・それぞれのグループの形を認め合えるようにする。
11:20			○学生にさようならの挨拶をする。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。		・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、園児に感想を話したり、園児の話を受け止めたりして、また会うことが楽しみになるように挨拶をして見送る。
			○学生と一緒に幼稚園へ移動する。 ○片付けをする。		・幼稚園へ送る。（1G から2名）
評価 の 観 点	(園児) ・段ボール片を組み合わせた形を楽しめたか。 ・先生や学生、友達と一緒に活動する楽しさを味わっていたか。 (学生) ・材料の準備や環境は、園児のイメージや表現活動への意欲を高められるようなものであったか。 ・園児とかかわりながら、5歳児の発達を理解することができたか。				

○活動の様子と振り返りから

4歳児の表現活動(造形、音楽、身体)を通して、子どものイメージや想像力を高める遊びという視点から振り返りを行った。

【造形表現】

- ・魚の面の大きさが、子どもに合っていなかった。(大きい)
- ・マグロが悠々と泳いでいる感じにするのが大変であった。
- ・マグロの中に入りたくても入れない子どもがいたので、もっと大きく作ればよかった。



クラゲ

・フラフープで作ったクラゲは、スズランテープをたくさん付けて、クラゲのユラユラした感じが出るように工夫した。

【音楽表現】

- ・子どもも楽器を使ってみると、もっと楽しくてよかったのではないと思った。
- ・色々な BGM の中で、魚が泳ぐ様子を表現したが、海の中の雰囲気が出て、とても楽しかった。



楽器



魚になって

【身体表現】

- ・ダンスのテンポが、少し4歳児には速すぎたのではないと思った。
- ・始め私は、子どもも泳ぎたいように平泳ぎをやってみると、それを真似てやっている子どもがいた。
- ・マグロの尾から出てきた時に、「うんちだ!」と言ったり、地面に這うようにして身を潜めたりしている様子から、子どもの、大人にはないユニークな発想や、私が思っていた以上の想像力に驚かされた。
- ・4歳児は、意外と足が速く、また、全力で体を動かすことを好むということが分かった。子どもと遊ぶのは、体力がいると思った。
- ・この遊びはやはり、戸外が適していると思った。
- ・適宜、水分補給は大切である。



くじら



司会進行



リハーサル風景

〈4歳児〉「スイミーになって体を動かそう」

○指導計画

指導日時 平成28年 5月20日（金 曜日）

10:30～11:30

クラス 4歳児 もも組 31名 (男児 15名 女児 16名)
うめ組 32名 (男児 16名 女児 16名)

ねらい	内容		
	☐ 学生や友達と同じようなイメージをもって、一緒に動くことを楽しむ。 ☐ 学生と一緒に体を動かしたり体操をしたりして、触れ合いながら遊ぶ。		
時 間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	・子どもたちが活動する場所(芝生の運動場、雨天の場合は体育館)に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い気持のいい環境を整えておく。 ・活動(体操、水中を泳ぐ表現)のときに使う用具を考え、準備しておく。	○芝生の運動場(雨天の場合は体育館)に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持ていく。 (雨天の場合は上靴も) ・ブルーシートに帽子や水筒を並べて置く。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をしていた。 ・日差しが強いこともあるので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、あらかじめ名簿を参考にペアを決めておく。 ・お迎え係の学生が幼稚園へお迎えに行く。 ・ペア以外の学生は、スイミーの世界観を表現するので、様々な製作物を用いて楽しい演出ができるように考える。
10:40	／準備物 ・ブルーシート 荷物置き場 ・大型絵本「スイミー」 ・読み聞かせ用イス ・フラフープ	○あいさつをする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。	・子どもたちが到着したら、元気に一人一人と笑顔で挨拶をする。「ようこそ!待ってたよ!」一緒に遊びましょうね!」などと声をかけたり、自己紹介をしたりする。また、楽しい雰囲気をつくり、これからの活動に期待がもてるようにする。
10:45	・海に浮かぶにじいろ島に見立てて ・製作したビニール製バルーン ・製作したフラフープ装飾 にじいろくらげに見立てて ・製作した魚のお面(小) 子ども用 ・製作した魚のお面(大) 学生用	○「スイミー」の大型絵本の読み聞かせを聴く。 ・絵本のイメージをもつ。 ○ナレーターの話聞く。 ・これから展開する遊びのイメージをもつ。	・子どもたちが絵本に興味をもち、そのあとの表現活動に繋がるよう、子どもたち1人ひとりの隣に座り、読み聞かせと一緒に聴く。
11:00	・CD 「アンダー・ザ・シー」 活動時のBGM ・たいこ ・オーシャンドラム ・スプリングドラム ・ホイッスル など	○にじいろ島でまねっこポーズをして魚のお面をもらう。 ・海に浮かぶ様々な色のにじいろ島に出かけ、島担当の学生のポーズの真似ができれば、置いてある好きな色の魚のお面を選ぶ。 ○広い海の中へ探検に出かける。 ・カラフルな魚になりにきって学生と一緒に泳ぐ。 ・ペアの学生と話をし、自分の行きたい方向や場所を伝える。 ・クラゲやワカメなど海の中の生き物に出逢い、動きの真似をしたり、思い思いの魚に変身したりして海の世界を楽しむ。 ・近くの魚と一緒に、手をつないで泳ぐ。	・島担当の学生は見本として簡単なポーズを見せ、子どもたちが真似できるように促す。 ・ペアの学生は同じポーズがとれるように援助し、「上手にできたね」などと声かけをする。
	・フラフープや製作物などの使い方を工夫し、海の生き物やワカメなど見立てて遊べるように環境を構成する。	○同じ色の魚たちが集まり一緒に泳ぐ。 ・1つの大きな魚になりにきり気持ちを合わせて泳ぐ。 ○大きなマグロがやってくる。 ・見つかって食べられてしまわないように学生がつくる岩陰に小さくなって隠れる。 ・マグロの口に見立てたバルーンでトンネルを潜り抜けたり、飲み込まれたりしてスリルを味わう。 ○マグロに負けないような大群をつくってみんなで泳ぐ。	・「あつち楽しいお魚さんがいるよ!」クラゲを探しに行ってみよう!」などやってみて、気持ちになるように誘い、芝生運動場を泳ぎ回る。いろいろな発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・遊泳の途中で、「大きな波が来たよ!」もつと深くに潜ってみよう!」船が来たね!」などと、様々な見立てを楽しめるようにする。また、他の学生や子どもたちとの触れ合いも楽しめるようにする。
11:20	・体操をする範囲がわかるように、体操担当の学生はすばやく円になる。	○みんなが集まりスイミー体操を楽しむ。 ・周りで円になってスイミー体操をしている学生の様子を見学する。 ・ペアの学生と一緒にスイミー体操に挑戦する。	・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・子どもの様子から必要だと感じたときには、活動の途中で木陰で休憩したり、水分補給したりする時間をとる。
11:30		○学生にさよならの挨拶をする。 ・付けていたお面をもらう。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。	・子どもが力を合わせて大群をつくることで達成感を味わうことができるように工夫する。 ・みんなで音楽に合わせてスイミー体操を踊ることで一体感を感じられるようにする。 ・子どもの豊かな動きを促すように、大きな動きを心がけ、見本となるようにする。 ・うまく踊れないときにも「真似してみよう!」「上手だね!」などと声をかけして、最後まで体操が楽しめるようにする。
11:30		○学生にさよならの挨拶をする。 ・付けていたお面をもらう。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。	・「○○に変身できて楽しかったね!」「海の世界はおもしろかったね!」などと子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めて、また会うことが楽しみにできるようにさよならの挨拶をする。
評価の観点	(こども) ・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・イメージをもって表現活動を楽しんでいたか。 (保育者) ・用具の準備やかかわりはイメージがもてるようなものだったか。 ・先生や学生、友達と表現活動を楽しむための環境を構成できていたか。		

茨城女子短期大学

○活動の様子と振り返りから

今回の活動では、保育のねらいや活動にふさわしく年齢(3歳児)に合った教材の選択・準備・実践を学べつように、教材ごとのグループ活動とした。そのグループごとの振り返りを示す。



教材準備

視聴覚教材……………紙芝居、絵本、DVD 他

音楽的教材……………楽器、歌 他

製作教材……………画用紙、クレヨン、絵の具、紙コップ、空容器、段ボール

運動教材……………ボール、縄、フープ 他

自然教材……………動植物、空、木の実、石、水、氷、土、砂、泥 他

固定遊具や玩具…ブランコ、砂場、ブロック、積み木、ぬいぐるみ 他

その他



段ボール

・段ボール列車だけでなく切符や切符入れを作り、さらに、「ポッポー」「ガタンゴトン」など、声で効果音を付けたりしたことで、より盛り上がるのが分かった。



シャボン玉

・私が、「シャボン玉のお歌、知ってる？」と聞くと、「知ってるよ」と言い、皆で楽しく歌うことができた。またシャボン玉の魅力的な世界は、大人も子どもも楽しめた。



紙コップ

・3歳児は当初、紙コップで何をして遊ぶか戸惑っていたが、私たちが楽しく作り始めたので、しだいに興味を示し始め、ストローを吹くなどして楽しんで参加をしていた。そして、私たちと“おぼけを一番早く膨らませられるか”と競争するなど、展開した。



ペットボトル

・中の色水の量が多すぎてボーリングをしてもなかなか倒れなかった。またレーンの数が少なく、やりたい子どもが待っていたので、もっと多くした方がよかった。



新聞紙ビリビリ



新聞紙

・新聞紙という自由自在な素材を、ちぎったり舞ったりして、大変解放感を味わっている様子であった。
・新聞紙は柔らかくて、子どもには扱いやすいと思った。



絵本・紙芝居

・季節感を考慮して、海をテーマにした絵本や紙芝居を選択したので、読み聞かせをする環境として、水色のスズランテープを使って雰囲気盛り上げてみた。



クレヨン 他

・3歳児はカメをビンクで染めたり、全体を染めたり部分的に塗ったりするなど、それぞれ色々な染め方をするということが分かった。
・子どもが楽しめるような看板を立てたり、カメの絵を貼ったりして環境を整えたことで、遊びが盛り上がったのではないかと考えた。



音楽

(まのこ音頭)

・踊りのブースを、カラーコーンと棒で設定したが、もっと工夫した方が子どもが来たのではないかと考えた。
・踊り方をきちんと覚えておくべきだった。

平成 28 年度

(3 歳児) 「コーナー遊びを楽しもう」

○指導計画

指導日時 平成 28 年 7 月 15 日 (金) 10:00～11:00
 クラス 3 歳児 たんぽぽ組 30 名 (男児 15 名 女児 15 名)
 ひまわり組 31 名 (男児 16 名 女児 15 名)

ねらい	内容	内容
○学生と触れ合い、少しずつ慣れることができるようにする。 ○楽しそうな遊びや活動に興味をもつ。 ○保育のねらいや活動にふさわしく、年齢に合った教材の選択、準備、実践を学ぶ。	○子どもは、自分の興味のある遊びのコーナーに行き、遊び提供の学生らと触れ合いながら過ごす。 ○子ども担当の学生は、子どもと無理なく一緒に動いたり遊んだりする。 ○遊びのコーナー担当の学生は、子どもが楽しく遊べるようにする。	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動 保育者・学生の援助
8:50	(短大にて) ・広場に集合(雨天…体育館) ・本日の活動に使用する教材 *段ボールグループ 【看板】 *シャボン玉グループ 【看板・ビニール付きフープ】 *紙コップグループ 【看板・玉・箱・棒】 *ペットボトルグループ 【看板・バナナの面・デッキ・CD】 *絵本、紙芝居グループ 【看板・絵本、紙芝居・紙芝居の台・椅子・机】 *ジュース屋さんグループ 【看板・長机・ストロー付き紙コップジュース人数分】	○園児は、日常のディリープログラムで過ごしている。 (登園～室内自由遊び) ○片付けをする。 ○排泄、手洗いをする。
9:30	(幼稚園にて) ・予定の遊びの準備 ～配置は別紙の通り～	○本日の活動(一緒に遊ぼう)について担任からの話を聞く。
10:00	・遊びのコーナースタート	○学生が側にいてやりたい室内遊びをしている。 ○学生と無理なくペアになることができたなら、今遊んでいる遊具と一緒に片付けて、遊びのコーナーに行き過ぎず。
11:00	(幼稚園にて) ・用具等の片付け	○『ジュース屋さん』コーナーに集まる。 ・お土産(学生作成のジュース)をもらう。
11:30	(短大にて) ・広場に集合(雨天…体育館)	○学生にさようならの挨拶をする。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。
評価の観点	(子ども)・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 (保育者)・面白そうな環境や遊びに、少しずつ関わっていったか。 ・用具の準備や環境構成は、児のイメージや遊びへの興味関心を膨らませるものであったか。 ・児と触れ合いながら、3 歳児の発達を理解することができたか。	

○活動の様子



いろいろなザリガニ



ザリガニが泳ぐ



素敵なザリガニ池完成



最後の挨拶

○学生の振り返りから

年齢によるかわりや育ちの捉えを振り返る機会とした。学生の記述の中から代表的なものを抜粋する。

Q1. 5歳児と接する際に配慮したこと、心がけていたことは何ですか？

- ・子どもたちに自由に書かせつつ、さりげなくアドバイスをしよう心がけた。
- ・自分でできることが増えてくるのでできる範囲のことは自分できるようサポートした。
- ・ある程度の自己がはっきりしているので尊重することが必要だと思った。
- ・子どもたちが楽しんでくれるようにたくさん声をかけたり、子どもたち自らザリガニを貼ったりできるよう配慮した。
- ・自分から描きたいという気持ちが出るまで待ったりやりたい気持ちを大切にしたりした。
- ・無理に進めるのではなく、その子がやってみたい、やりたいと思うまで待つことがよい思った。

Q2. 全体を振り返って学んだことや気づいたことを書きましょう。

- ・子どもの発想や想像力は自分が思っていたよりも豊かであることに気づいた。
- ・年齢によって違う対応をしなければいけないこと、遊びも違うことが分かった。
- ・1年違うだけで話す言葉の量、相手に対する感情が全く違うことが分かった。
- ・3.4.5歳児と実祭に触れあって、それぞれの発達に応じて遊びの内容や先生が園児に対する対応の仕方も全然違うことが分かった。
- ・その子に合った環境や年齢別に合わせた環境作りが大切なことだと改めて感じた。

〈5歳児〉「ザリガニの池をつくろう」

○指導計画

指導日時 平成 27 年 7 月 6 日(月) 10:00 ～ 11:30

学 年 5 歳児 41 名 ふ じ組 21 名 (男児 10 名 女児 11 名)

さくら組 20 名 (男児 10 名 女児 10 名)

- 事前準備
- ・本日の活動について、担任と打ち合わせをする。(流れ・汚れてもいい服装)
 - ・幼稚園でザリガニについての本の読み聞かせをしておいていただく。
「ざりがに(350 シリーズ…いきもののしゃしんえほん)」写真：武田晋一 ポプラ社
 - ・段ボールでザリガニの池を作っておく。(グループ毎)
 - ・いろいろな種類の筆を用意しておく。
 - ・グループを決めておく。学生…番号順 園児…園でのグループ
 - ・紙芝居の下読みをしておく。

ねらい	内容	
○ ザリガニのイメージを、自分なりに表現しようとする。 ○ 先生や学生と一緒に活動を楽しむ。	○ 絵の具を使って、画用紙にザリガニを描いたり、自分で描いたザリガニを池に泳がせたりする。	
時間	環境の構成	予想される子どもの姿
9:50	・体育館に使用する物を用意しておく。 〈準備物〉 ザリガニの池、ブルーシート、白画用紙、筆、絵の具、絵の具入れ、糊、雑巾、はさみ 等 紙芝居「ザリガニつり」	○学生と一緒に移動する ・上靴、水筒持参 (雨天時…スクールバスにて)
10:00	童心社 ※筆…割り箸の先にフェルトを巻いた物・割り箸の先をつぶした物	○顔合わせをする ・グループ毎に集まる ・あいさつをする。 ○読み聞かせをする 「ザリガニつり」
11:30		○グループに分かれ活動する ・活動について話を聞く ・画用紙をもらう ・筆を選ぶ ・ザリガニを描く ・描いたザリガニを切り取る ・池に置く ・片付け ○みんなで集まる ・ザリガニの池を見る ・あいさつをする ○学生と一緒に幼稚園へ移動する
評価の観点	(園児) ・ザリガニを自分なりに表現しようとしていたか。 ・先生や学生、友達と一緒に活動する楽しさを味わっていたか。 (学生) ・用具の準備や環境構成は、園児のイメージや表現活動への意欲を高められるようなものであったか。 ・園児とかかわりながら、5歳児の発達を理解することができたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子



トンネルくぐり



メリーゴーランド（馬に乗って遊ぶ）



人間アスレチックを楽しむ（飛び越える）



電車の運転手になって遊ぶ

○学生の振り返りから

活動後に振り返りシートに書き込むことにより、自身のかかわりや育ちの捉えを振り返りの機会とした。学生の記述の中から代表的なものを抜粋する。

Q1. あなたはどのような環境構成を行いましたか？

- ・怪我をしないように芝生の上に落ちている枝や石を拾い安心して遊べる場所を作った。
- ・つばきの花で歩きやすい幅に道を作り、子どもたちが楽しんで遊べるようにした。
- ・ゴールの場所を作るだけではなくゴール地点という目印となるよう花でゴールを書き工夫した。
- ・子どもたち一人一人抱っこの仕方を変えた。

Q2. 子どもたちはあなたたちの用意した環境でどのように遊んでいましたか？

- ・一つ一つのエリアを順番に回り、緊張しながらも楽しんでた。
- ・花の迷路でいろいろな所へ走っていき、各ブースでのシールを集めるのに集中していた。
- ・背中の上をハイハイしたりトンネルとしてくぐったり、足をジャンプして跨いだりして遊んだ。
- ・最初はお互い緊張し遊び方に戸惑っていたが慣れてくるとスキンシップも増え笑顔で遊んでいた。

Q3. 4歳児と接する際に配慮したこと、心がけていたことは何ですか？

- ・初めての子どものと触れ合いだったので自分だけがずっと話さず子どもの話をちゃんと聞くこと。
- ・自ら進んでやりたいことを言えるように話しかけ並んでいるときも手遊びで同じ気持ちになる。
- ・目線を合わせる、はっきりした声と言葉遣い、また、安全に遊べるよう心がけた。

〈4 歳児〉「探検に出かけよう」

○指導計画

指導日時 平成27年5月1日（金） 10:30～11:30

クラス 4歳児 もも組 27名（男児 17名 女児 10名）

うめ組 27名（男児 17名 女児 10名）

ねらい	○学生や先生と一緒にあそぶ楽しさを味わう。 ○楽しそうな遊びや活動に興味をもち、喜んで参加する。	内容	□学生や友達とイメージを共有し、一緒に動くことを楽しむ。 □学生と一緒に探検したり、体操をしたりして触れ合いながら遊ぶ。
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	- 子どもたちが遊ぶ場所（芝生・体育館）に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い、気持ちのよい環境を整えておく。 - 子どもたちが木陰で休憩できるようにブルーシートを用意する。 - 椿の花道の時に使う用具を考え、準備しておく。	○芝生（雨天時は体育館）に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持っていく。（雨天時は上靴も持っていく） ○挨拶をする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・初めて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○短大の先生の話聴く。 ・今からの遊びのイメージをもつ。 ・ペンダントをもらう。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒にやる活動の話をしていただく。 ・暑い日が増えてきたため、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、予め名簿を参考にペアを決めておく。 ・ペア以外の学生は、7つのイベントを主催するため、様々な道具を用いて楽しい演出ができるようにする。 ・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり、追いかけてこや探検ごっこをしたりして緊張をほぐしていく。 ・「あっちに楽しそうなおところがあるよ」「こっちの道を進むとどこに繋がっているかな？」などとやってみようという気持ちになるように誘い、芝生運動場を探検する。色々な発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要に応じて水分補給や木陰で休息を取り入れる。 ・みんなで集まり、「マンゴープリン」を踊ったり、みんな一緒という一体感を感じたりできるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しくなるように挨拶をして見送る。
10:40	準備物 ・白線（椿の花道の目印） ・椿の花 ・7つの地点毎のイベント ・ペンダント ・CD/CDデッキ ・マンゴープリン用のお面 など	○挨拶をする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・初めて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○短大の先生の話聴く。 ・今からの遊びのイメージをもつ。 ・ペンダントをもらう。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒にやる活動の話をしていただく。 ・暑い日が増えてきたため、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、予め名簿を参考にペアを決めておく。 ・ペア以外の学生は、7つのイベントを主催するため、様々な道具を用いて楽しい演出ができるようにする。 ・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり、追いかけてこや探検ごっこをしたりして緊張をほぐしていく。 ・「あっちに楽しそうなおところがあるよ」「こっちの道を進むとどこに繋がっているかな？」などとやってみようという気持ちになるように誘い、芝生運動場を探検する。色々な発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要に応じて水分補給や木陰で休息を取り入れる。 ・みんなで集まり、「マンゴープリン」を踊ったり、みんな一緒という一体感を感じたりできるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しくなるように挨拶をして見送る。
11:10		○探検に出かける。 ・いろいろな道を通りながら、7つのイベント地点に向かう。 ・ペアの学生と話をし、自分の行きたいところややりたいことを伝える ○イベント地点にて遊ぶ。 ・ペアの学生と一緒に様々なイベントを体験し、ペンダントにシールを貼る。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒にやる活動の話をしていただく。 ・暑い日が増えてきたため、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、予め名簿を参考にペアを決めておく。 ・ペア以外の学生は、7つのイベントを主催するため、様々な道具を用いて楽しい演出ができるようにする。 ・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり、追いかけてこや探検ごっこをしたりして緊張をほぐしていく。 ・「あっちに楽しそうなおところがあるよ」「こっちの道を進むとどこに繋がっているかな？」などとやってみようという気持ちになるように誘い、芝生運動場を探検する。色々な発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要に応じて水分補給や木陰で休息を取り入れる。 ・みんなで集まり、「マンゴープリン」を踊ったり、みんな一緒という一体感を感じたりできるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しくなるように挨拶をして見送る。
11:30		○みんなで集まる。 ・マンゴープリンを踊る。 ○学生にさようならの挨拶をする。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒にやる活動の話をしていただく。 ・暑い日が増えてきたため、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、予め名簿を参考にペアを決めておく。 ・ペア以外の学生は、7つのイベントを主催するため、様々な道具を用いて楽しい演出ができるようにする。 ・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり、追いかけてこや探検ごっこをしたりして緊張をほぐしていく。 ・「あっちに楽しそうなおところがあるよ」「こっちの道を進むとどこに繋がっているかな？」などとやってみようという気持ちになるように誘い、芝生運動場を探検する。色々な発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要に応じて水分補給や木陰で休息を取り入れる。 ・みんなで集まり、「マンゴープリン」を踊ったり、みんな一緒という一体感を感じたりできるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しくなるように挨拶をして見送る。
評価の観点	（子ども）・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・自分からおもしろそうな環境や遊びにかかわっていたか。 （保育者）・用具の準備やかかわりはイメージがもてるようなものであったか。 ・先生や学生、友達と触れ合って楽しむための環境を構成できていたか。		

茨城女子短期大学

○活動の様子



ゆらんこに乗って遊ぶ



読み聞かせコーナーでの紙芝居



各コーナーの遊びを楽しむ子どもたち



コーナーをまわって集めたごほうびシール

○学生の振り返りから

活動後に振り返りシートで、学生自身のかかわりや育ちの捉えを振り返ったところ、3歳児をよく捉えている傾向が見られた。3歳児とのかかわりを通した体験から学生の記述を抜粋する。

Q1. あなたは、どのような環境構成を行いましたか？

- ・子どもの発達がそれぞれ違っていたので、その子の発達に合わせて玉入れの箱の位置を変えたり、動かしたりしてみた。
- ・仲良くなることから始め、少し心を開いてきたらコーナー遊び巡りを一緒に行った。
- ・幼児担当だったので、笑顔を大切に。もっていたカードを使って話しのきっかけを持つようにした。

Q2. 子どもたちは、あなたの用意した環境でどのように遊んでいましたか？

- ・楽しそうにカードのシールを集め、遊んでいた。自分の好きなコーナーばかり言っている子もいた。
- ・何回も遊びに来てくれていた子がいたほど、たくさんの子どもたちが遊びに来てくれた。
- ・自分の気に入ったものを繰り返しやっていた。ずっと同じところで遊ぶ子どもが目立っていた。
- ・不安な気持ちとわくわくした気持ちが入り混じっていて、初めはあまり笑ったりすることはなかったが慣れてきたらたくさん笑ったり、意思を伝えて遊んでいた。

Q3. 子どもたちの発達に適した環境構成であったと思いますか？

- ・興味をもってもらえるように、学生が「こっちは〇〇だよ！おいで」などと声をかけ遊びに誘っていたことや、たくさんの遊びのコーナーがあった。それぞれ違う遊びをして1つでもその子の苦手なものがあっても周りが楽しそうにやっていたら苦手な子でも挑戦してみようという気持ちになれる環境だった。

平成 27 年度

〈3 歳児〉「幼稚園のいろいろな場所で遊ぼう」

○指導計画

指導日時 平成 27 年 6 月 12 日（金） 10:30～11:30

クラス 3 歳児 たんぽぽ組 30 名（男児 15 名 女児 15 名）

ひまわり組 31 名（男児 16 名 女児 15 名）

ねらい	○学生と触れ合い、少しずつ慣れることができるようになる。 ○楽しそうな遊びや活動に興味をもつ。	内容	□子どもは、自分の興味のある遊びのブースに行き、遊び提供の学生らと触れ合いながら過ごす。 □子ども担当の学生は、子どもと無理なく一緒に動いたり遊んだりする。 □遊びのブース担当の学生は子どもが楽しく遊べるようにする。
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
8:50	・本日の活動に必要な物の確認。	○園児は、日常のデイリープログラムで過ごしている。	・本日の活動について 3 歳児担当の保育者と打ち合わせをしておく。
10:30	・幼稚園内に、予定していた遊びの準備。 ～配置は別紙の通り～	＊ブランコグループ【看板】 ＊トンネルグループ【看板・フープ】 ＊玉入れグループ【看板・玉・箱・棒】 ＊体操グループ 【看板・バナナの面・デッキ・CD】 ＊読み聞かせグループ 【看板・絵本、紙芝居・紙芝居の台・椅子・机】 ＊ジュース屋さんグループ 【看板、長机、ストロー付き紙コップ、ジュース】 ○ベアになる学生が寄っていったら、挨拶などをしながら知り合う。 ○学生と無理なくベアに分かれることができるようだったら、今遊んでいる遊具と一緒に片付けて、遊びのブースに行き過ぎず。	・児に当日の予定(学生が来園すること等)を話しておいていただく。 ・当日は、自由遊びをしている中に園児担当の学生が自然に入っていくアプローチする。 ・その際、園児の名前が分かるように名札を必ず付ける。 ・4 歳児と学生がベアになって活動できるように、予め名簿を参考にベアを決めておく。 ・ベアの園児に学生は元気に笑顔で挨拶をする。「お姉さんは○○、あなたのお名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりしながら「一緒に遊ぼうね」と誘ってみる。 ・まだ慣れないようであつたら無理強いせずに手をつないで遊びの様子を見にいったり緊張をほぐしていく。 ・「あっちに楽しそうなところがあるよ。」などと、やってみたい気持ちになるように誘い、遊びたいブースに行き、楽しい気持ちになるようにする。安全に配慮する。 ・遊びのブース担当の学生は、参加しようと寄ってきたベアが楽しく過ごせるような言葉かけ援助する。 ・自分の思うままに行動したい気持ち強い子どもがいた時には、その気持ちを尊重し見守っていく。 ・園児担当の学生は終了時刻近くには、『ジュース屋さん』のブースに行けるようにし、飲むまねっこをし、お土産のジュースをもらって満足感を味わえるようにする。
11:30		○『ジュース屋さん』集まる。 ・お土産をもらう。 ○学生にさようならの挨拶をする。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。	・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに話しかけたり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しみにできるように挨拶をして別れる。
評価の観点	(子ども)・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・面白そうな環境や遊びに、少しずつ関わっていったか。 (保育者)・用具の準備や環境構成は、児のイメージや遊びへの興味関心を膨らませるものであったか。 ・児と触れ合いながら、3 歳児の発達を理解することができたか。		

○活動の様子と学生の振り返り

大成学園幼稚園のブログより(6月12日)	学生の振り返りから(抜粋)
6月11日(木) 短大の体育館に出かけ、短大の先生やお姉さんたちと一緒に楽しい時間を過ごしてきました。 “近頃、幼稚園にカッパがでるらしい・・・” そんな話題で盛り上がっている、年長組。 そこにカッパから手紙が届きました。 「カッパがきてるかもしれない！」 「さっきお皿が見えた！」 子どもたちは、空想の世界にたつぷりと浸って楽しんでいました。 お姉さんたちから、いろいろなカッパの絵本を読んでもらいました。 面白い絵本に興味津々！ カッパのイメージが膨らんできたので、その気持ちを絵に表現しました。「カッパの周りは雨の水玉模様になろう！」「大好きなキュウリを持ってるんだ！」 可愛らしいカッパがたくさんそろいました♪	・幼稚園でカッパの話をしていて、楽しみにきてくれて嬉しかった。 ・手紙だけではなく、カッパを登場させてもよかった。 ・割り箸と軍手の指先に綿を入れた物で作った筆、画用紙(大,小)障子紙などの材料をいろいろ用意した。 ・障子紙は破れてしまい、適さなかった。 ・子どもたちは、カッパを信じる純粋な心をもっている事に気付いた。 ・カッパになりきって読めなかったので反省している。 ・描いている邪魔をしないように声をかけるタイミングを考えた。 ・自由に描けるよう、新聞紙をいっぱい広げた。 ・難しかったと思うが、自分の思い描くカッパを想像して伸び伸びと描いていたので、発達に適した環境だったと思う。 ・絵の具のコップの数が足りなかった。 ・カッパがいてと信じてカッパを呼んだり、話をしていたので、しっかり受け止められるように心がけた。 ・このような活動は、子どもたちの想像力が豊かになると思う。



幼稚園の作品展にて
「カッパのコーナー」

この活動ででき上がった作品
を5歳児と学生との共同制作
として、活動の様子(ドキュメンテーション)と共に展示

〈5歳児〉「カップの絵を描こう」

○指導計画

指導日時 平成26年 6月12日(木 曜日)

10:50~11:50

クラス 5歳児 さくら組 27名 (男児 16名 女児 11名)

ねらい	内容	時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
○ 学生や友達と一緒に空想する楽しさを味わう。 ○ 思いきり絵を描くことに挑戦する。	○ 学生や友達と会話を楽しみながら空想する。 ○ 学生や友達に自分がイメージしたことや考えたことを伝える。 ○ 自分がイメージしたことを絵にして充実感を味わう。				
10:50			・ 子どもたちが活動する場所となる体育館に、危険なものがないかどうか点検し安全な環境を整えておく。また、モップがけをするなどして気持ちのいい環境を整えておく。 ・ 活動に使用するものを準備しておく。 準備物 ・ カップが出てくる絵本 ・ ブルーシート ・ 模造紙 ・ 障子紙 ・ 筆 ・ 絵の具、墨 ・ CD	○ 体育館に移動する。 ・ 帽子をかぶり、水筒を持っていく。 ○ 短大の先生の話聞く ・ あいさつ ・ 本日の活動について ・ グループに分かれての活動など ○ 4つのグループになる ・ 5歳児 8グループ ・ 学生 8グループ ○ 短大の学生と挨拶をかわす。 ・ はじめて会う学生に挨拶をする。 ・ 自分の名前を伝える。	・ 幼稚園の先生に本日の活動について話をし、テーマであるカップについてのDVDを見たり、絵本を見たりしてカップが身近になるような活動を積み重ねていただけるようお願いしておく。また、短大学生との活動に期待が膨らむように話をしていたくようにする。 ・ 絵の具や墨を使う活動なので、汚れてもよい服装で来てもらえるように連絡しておく。 ・ 暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・ 5歳児と学生が8つのグループになり活動できるようにする。(担任の先生に1クラス4グループに分かれるよう伝えておく。学生も予め4グループに分かれておく)
11:00				○ カップの絵本を見る。 ○ 学生と一緒にカップの話をする。 ○ 学生と一緒にカップの絵を描く。 ・ 話をしながら絵を描く。 ・ カップのイメージをもって絵を描く。 ・ 思いきり描く。	・ グループが決まったら、元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊びましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして活動に誘う。 ・ グループ毎にカップが出てくる絵本の読み聞かせを行い、カップのイメージが膨らむようにする。 ・ 絵本を読むときには、子どもたち全員が見えているか確認し読み始める。また、みんなに聞こえるような声でゆっくりはつきりと読むようにする。 ・ 「カップってどこに住んでいるのかな?」「泳ぐの?」などと子どもたちから話が出てくるようにして、カップのイメージを膨らませるようにする。 ・ 筆や絵の具の使い方などわからなかったり、カップのイメージがわからない様子が見られたときには、一緒にやってみたり見本を示したり、話のやりとりをしていくなかで理解できるようにしていく。 ・ 学生自身が楽しそうにカップの話をするなど自由に思いきり描けるような雰囲気をつくり、描いてみたいという気持ちが膨らむようにする。
11:50				○ 片付けをする。 ・ 学生と一緒に身近なものを片付ける。 ・ 同じものを集める。 ○ 集まって描いたものを見る。 ○ みんなで「カップがわらう」を踊る。 ・ 一体感を感じる。 ○ 学生にさよならの挨拶をする。 ・ 感想を伝える。 ・ 挨拶をする。	・ どうしても描けない(やりたくない)という子どもがいたときには、担任の先生に状況を伝えどのようにしたらよいか相談する。 ・ 子どもの様子から必要だと感じたときには、活動の途中で水分補給をする時間をとるようにする。 ・ 片付けのときには、同じ道具を一カ所に集めたり、運んだりして学生と共に取り組めるようにする。 ・ それぞれの感想などを聞いたり、学生が感想を伝えたりして、いろいろなことに挑戦できて楽しかったという充実感がもてるようにする。 ・ 最後にみんなで、「カップがわらう」を踊って一体感を感じられるようにする。
評価の観点				(子ども) ・ 先生や学生、友達と一緒にカップをイメージして描く楽しさを味わっていたか。 ・ 自分のイメージややりたいことを学生に伝えながら活動に参加することができたか。 (保育者) カップをイメージできるような準備やかかわりになっていたか。 ・ 先生や学生、友達と一緒に描画活動を楽しむための環境を構成できていたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子と学生の振り返り

大成学園幼稚園のブログより(5月28日)	学生の振り返りから(抜粋)
いっしょにあそぼう(年中組)  短大の1年生との交流「いっしょにあそぼう」を行いました。 短大のお姉さんが幼稚園に迎えに来てくれて、みんなで短大の庭に行きました。 タンポポ島(フラフープ)や池(ミニフープ)、川(ロープ)を探検したり、一緒にゲームをしたり「タオルルンルンたいそう」をしたり、楽しいひとときを過ごしました。  メリーゴーランド  タオルルンルンたいそう	・自分の好きな色のしっぽを探したり、好きな道を通ったり、自分で選びながら遊べるのがよかった。 ・しっぽの色は、欲しい色がなくなってしまいもめることがあったので、もっと増やした方がよかった。 ・しっぽ色のは、選ぶことに興味を示さない子がいたので、何色も必要ないと思った。 ・一人で遊びながら活動する場面や、メリーゴーランドのように他の友達と協力して行う場面があり、発達に適した環境構成だと思った。 ・一人一人、興味のあるものが違うので、それぞれに対応できるようにしなくてはと思った。 ・子どもたちは、学生の動きをよく見ていた。 ・「やりたくない」という子に「一緒に踊ろうよ!」と言ったら「ほっといて」と言われた。どう声かけをすればよかったのだろうか。 ・4歳児は、運動機能も発達してくるので動くことが好きだから、タオルルンルンたいそうやジャンプなど、体を動かす活動は発達に合っていたと思う。 ・たいそうでは、楽しんでやっている子とやっていない子がいて、その子に合った対応が必要だと思った。 ・子どもと接する時には、座る体勢や視線の位置に気がつけたが、まだ子どもの気持ちややりたいことを理解できていなかった。次回は、子どもの気持ちを受け止められるようにしたい。 ・初めての「いっしょにあそぼう」だったので、子どもと一緒に遊び、優しく言葉かけをすることしかできなかった。

〈4歳児〉「しっぽをつけて遊ぼう」

○指導計画

指導日時 平成26年 5月8日(木 曜日) 10:30～11:30

クラス 4歳児 もも組 19名(男児 9名 女児 10名)
うめ組 20名(男児 11名 女児 9名)

ねらい	内容	
	○ 学生や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 楽しそうな遊びや活動に興味をもち、喜んで参加する。	□ 学生や友達と同一ようなイメージをもって、一緒に動くことを楽しむ。 □ 学生と一緒に体を動かしたり体操をしたりして、触れ合いながら遊ぶ。
時間	環境の構成	予想される子どもの活動 保育者・学生の援助
10:30	・子どもたちが活動する場所(芝生の運動場、雨天の場合は体育館)に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い気持のいい環境を整えておく。 ・活動(迷路、体操、しっぽ取り)のときに使う用具を考え、準備しておく。 準備物 ・ブルーシート ・荷物置き場 ・フラフラフープ ・たんぼぼ島に見立てて ・ミニフラフープ ・池に見立てて ・ロープ ・川に見立てて ・製作したビニールしっぽ(短) ・子ども用のしっぽ ・製作したビニールしっぽ(長) ・学生用のしっぽ ・体育棒 ・メリーゴーラウンドの軸 ・CD 「タオルたいそう」、活動時のBGM ・ホイッスル など	○ 芝生の運動場(雨天の場合は体育館)に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持っていく。(雨天の場合は上靴も) ・ブルーシートに帽子や水筒を並べて置く。 ○ あいさつをする。 ○ ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○ 短大の先生の話聞く。 ・これから展開する遊びのイメージをもつ。 ○ たんぼぼ島につながる迷路へ探検に出かける。 ・しっぽを繋げて作られた迷路を進む。 ・花摘みをする。 ・追いかけてっこをする。 ・いろいろな見立てをして遊ぶ。 トンネル 池や川 など ・ペアの学生と話をし、自分の行きたい方向や場所を伝える。 ・たんぼぼ島へ到着し、プレゼントのしっぽを受け取る。
10:40		・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をしていただく。 ・日差しが強いこともあるので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、あらかじめ名簿を参考にペアを決めておく。 ・お迎え係の学生が幼稚園へお迎えに行く。 ・ペア以外の学生は、迷路の途中のトンネルや川を作るので、様々な用具を用いて楽しい演出ができるように考える。 ・子どもたちが到着したら、元気に一人一人と笑顔で挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ!」「一緒に遊びましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりする。また、笑顔で楽しい雰囲気をつくり、これからの活動に期待がもてるようにする。 ・「あっちに楽しいところがあるよ」「お花探しに行ってみよう?」「虫がいるかな」などとやってみたい気持ちを伝えるように誘い、芝生運動場を散歩する。いろいろな発見やつぶやきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・散歩の途中で、「池に落ちないように、ピョンと跳んでみよう」「川があるよ。どうやって渡ろうか」「トンネルくぐってみよう」などと、様々な見立てを楽しむようにする。また、他の学生との触れ合いも楽しめるようにする。 ・しっぽやフラフラフープなどの道具の使い方を工夫し、迷路の道、トンネルや池、川、草原などに見立てて遊べるように環境を構成する。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ち強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの豊かな動きを促すように、大きな動きを心がけ、見本となるようにする。 ・活動に誘うときには、積極的に声をかけをし、楽しい雰囲気をつくっていく。
10:55		○ みんなで集まる。 ・周りで円になってタオルたいそうをしている学生の様子を見学する。 ・ペアの学生と一緒にタオルたいそうにチャレンジする
11:05	・しっぽ取りの範囲がわかるように、コーナー担当の学生は場所について座る	○ しっぽ取りをする。 ・まず自分たちが鬼になり学生を追いかけしっぽを取る。 ・今度は鬼になった学生からしっぽを取られないように逃げる。 ・子どもがしっぽを取ったり逃げたりすることで達成感を味わうことができるように工夫する。 ・子どもの様子から必要だと感じたときには、活動の途中に木陰で休憩したり、水分補給したりする時間をとる。
11:15	・2人1組でお家を作る。	○ りすさんのお引越しをする。 ・学生が作ったお家から、ホイッスルの合図で新しいお家にお引越しをする。 ・お家が見つからない子どもがいた場合には「あそこにお家があるよ」などと声かけをして、最後までゲームが楽しめるようにする。
11:25	・メリーゴーラウンドのときには9人のグループになる。 ・体育棒は危険のないようにしっかりと押さえる。	○ メリーゴーラウンドで遊ぶ。 ・ぐるぐる回って楽しむ。 ・みんなで集まりメリーゴーラウンドで遊ぶことで一体感を感じられるようにする。
11:30		○ 学生にさよならの挨拶をする。 ・付けていたしっぽをもらう。 ・話をする。 ・挨拶をする。 ・「○○を見つけて楽しかったね」「追いかけてこしたのがおもしろかったよ」などと子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しみになるようにさよならの挨拶をする。
評価の観点	(子ども) ・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・イメージをもって活動を楽しんでいたか。 (保育者) ・用具の準備やかかわりはイメージがもてるようなものだったか。 ・先生や学生、友達と触れ合って楽しむための環境を構成できていたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子

大成学園幼稚園のブログより(7月4日)	学生の振り返りから(抜粋)
今日(7月3日)は、年少組と短大の1年生と一緒に活動をする「いっしょにあそぼう」の日です。  お姉さんが作ってくれたお金とお財布を首から下げて、ワクワクしながら短大の芝生の庭に行きました。  「はらぺこあおむし」の大型絵本をみんなで見て、  お財布からお金を取り出して、あおむしが大好きなお菓子や食べ物のお面を買いました。  すると、はらぺこあおむしがニョロニョロやってきて、お菓子や食べ物になったみんなが食べられてしまいました。  はらぺこあおむしに食べられてみんなは大きなさなぎになって…  さなぎの皮を脱いできれいなちょうちょになって出てきました!!  とても楽しい時間になりました。短大のお姉さん、先生方、ありがとうございました。 園に帰ると、「はらぺこあおむし」の歌が聞こえてきました。 「げつようび げつようび りんごをひとつたべました それでもやっぱりおなかっぱっこぺこ〜♪ チャンチャン♪」	・あおむしが食べそうな物のお面やメダルなどを作り、活動までの準備も大切だと思った。 ・お面のホッチキスにセロテープを貼ることや、芝生の石拾いなどの安全確保が大事だと分かった。 ・まだ入園して3ヶ月の3歳児にとって、絵本を通して遊ぶのがいいと思う。 ・絵本を読んでから活動するのは、分かりやすかった。 ・子どもに興味をもてるように、「いらっしゃいませ〜」「どの食べ物がいいですか?」と声をかけた。 ・遊びと遊びの間に、少しずつ休憩があつてよかった。 ・子どもの視線なつて、一緒に楽しむようにした。 ・暑かったので、水分補給の時間を入れるとよかった。 ・食べられるところで怖がっていたので、説明の仕方を変えた方がいいと思った。 ・「こわい」と言ってきた子に「私と一緒に中に入る?」と安心できるようにかわった。 ・転ばないように、歩くスピードを合わせた。 ・5歳児と違い、まだうまく話せない子もいたので、一言一言丁寧に話しかけた。 ・どう接すれば伝わるか、3歳児に合った言葉遣いを心がけた。 ・3歳児は4.5歳児よりも体が小さく、言葉もよく聞かないと分からないので、表情などを読み取って、今この子は何をしたいのかを感じ取るように観察した。 ・子どもが楽しそうにしているので、一緒に共感できるようにした。

平成 26 年度

(3 歳児) 「はらぺこあおむしになって遊ぼう」

○指導計画

指導日時 平成 26 年 7 月 3 日 (木) 10:30～11:30

クラス 3 歳児 たんぽぽ組 24 名 (男児 12 名 女児 12 名)

ひまわり組 24 名 (男児 13 名 女児 11 名)

ねらい	○先生や短大の学生と一緒に遊びを楽しむ。	内容	☐ 先生や学生、周りの友達とふれ合う。 ☐ 絵本の世界に入り、「はらぺこあおむし」のイメージで、体を動かして遊ぶ。
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	- 子どもたちが遊ぶ場所 (芝生・体育館) に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い、気持ちのよい環境を整えておく。 - 子どもたちが木陰で休憩できるようにブルーシートを用意する。	○芝生 (雨天時は体育館) に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持っていく。(雨天時は上靴も持っていく) ○挨拶をする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・初めて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○「はらぺこあおむし」の大型絵本の読み聞かせを聴く。 ・絵本のイメージをもつ。 ○短大の先生の話聴く。 ・今からの遊びのイメージをもつ。 ○散歩に出かける。 ・いろいろな道を通りながら、点在するお店屋さんに向かう。 ○お店屋さんにて遊ぶ。 ・ペアの学生と一緒に様々なお菓子のお面を選び、メダルと交換する。 ○お面をかぶって散歩に出かける。 ・ペアの学生と自分の行きたいことややりたいことを伝える。 ・フープをくぐったり、友達のお菓子を知ったりしながら、芝生で遊ぶ。 ○あおむしと遊ぶ (逃げる)。 ・会場の音楽が止まったら、ペアの学生と共に安全基地に逃げる。 ・あおむしに食べられたこどもは、あおむし役の学生と一緒にあおむしになりきる。 ○みんなで集まる。 ・あおむしを広げ、バルーンで遊ぶ。 ○学生にさようならの挨拶をする。 ・学生と話をする。 ・挨拶をする。	・本日の活動について担任の先生と打ち合わせをし、子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をさせていただく。お財布とメダルを一人ひとりに渡していただく。 ・暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・元気に笑顔で一人ひとりと挨拶をする。「ようこそ」「待っていたよ」「一緒に遊ぼう」「お名前は？」等と声をかけたり自己紹介をしたりする。 ・子どもたちが絵本に興味をもち、そのあとの活動に繋がるよう、子どもたち一人ひとりの隣に座り、読み聞かせと一緒に聴く。 ・まだ慣れないようであれば、ふれ合って遊んだり、追いかけて遊ぶことや探検ごっこをしたりして緊張をほぐしていく。 ・学生がモデルとなり、予め作っていたお面を見せるなどして、お面を作って遊びたいという気持ちになるようにする。 ・徐々に「はらぺこあおむし」の世界観をもって遊べるように、すれ違う友達と声をかけあうことができるようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を見守る。 ・あおむしが蝶に変身するように、バルーンを広げ、音楽に合わせながら学生と一緒にという一体感を感じられるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊ぼうね」など、子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しみになるように挨拶をして見送る。
10:40	準備物 ・フラフープ (お店屋さん兼安全基地) ・なわとび、ロープ ・川や道など ・その他、散歩道で見立てられるもの ・CD ・バルーン		
11:10			
11:30			
評価の観点	(こども) ・先生や学生、友達とのふれ合いを楽しんでいたか。 ・自分からおもしろそうな環境や遊びにかかわっていたか。 (保育者) ・「はらぺこあおむし」のイメージで遊べるような環境の準備やかかわりは適切であったか。 ・先生や学生、友達とふれ合って遊べるような環境をつくることができたか。		

茨城女子短期大学

○活動の様子



「マーチを踊ろう」



「手遊び」



「ボールをつくってあそぼう」



「バルーンであそぼう」

○学生のふり返しから

(「これまでの学びのふり返し【保育実践演習】」: 2013年10月4日記入)

実習に活かすという面、とくに「子どもを理解する」という面から振り返った。

- ・ 幼児たちの目線に立って活動ができたと思う。
- ・ 子どもが何を考えているのか、何をしたいのか、どうしたら楽しんでもくれるのか、子どもたちを中心に考えて考えることがわかった。
- ・ 子どもたちは、それぞれ違う思いをもっていること、たくさんの物や人に興味があることを『いっしょにあそぼう』で学び、実習では一人ひとりに合った声かけ、援助を心がけることができた。
- ・ 短い時間でしたが、子どもとの会話の中での子どもが発信する言葉や行動の中から子どもの感性や個性を拾うことができ、私の驚きや発見になり感動したことを覚えています。なので実習でも子どもたちとの会話や子ども同士の会話、「言葉」ということに焦点をあてて見ることができたかなと思います。

〈5歳児〉「ウォークラリーをして体を動かそう」

○指導計画

指導日時 平成25年 6月12日(水曜日)

11:00~11:50

クラス 5歳児 さくら組 25名(男児 9名 女児 16名)
ふじ組 26名(男児 9名 女児 17名)

ねらい	内容		
	☐ 学生や友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。	☐ 学生や友達と会話を楽しみながら活動する。 ☐ 学生や友達に自分が考えたこと、思ったことを伝える。 ☐ 様々な活動に挑戦し、充実感を味わう。	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
11:00	- 子どもたちが活動する場所(運動場、雨天の場合は体育館)に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い気持のいい環境を整えておく。 - 体を動かす活動に使う用具を、コーナー毎にかごに入れておくなどして、スムーズに準備ができるようにしておく。	○運動場(雨天の場合は体育館)に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持ていく。(雨天の場合は上靴も) ○短大の先生の話を聞く ・あいさつ ・グループに分かれての活動など ○ペアに分かれる(コーナーの係も自分の持ち場へ) ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○チャレンジカードをもらう。 ○コーナー担当の学生から話を聞く。 ・本日の活動について ・準備してあるものについて ○ペアの学生と話をし、自分の行きたいところを伝える。 ○いろいろなコーナーでチャレンジする。 ○コーナーでのチャレンジが終わったら、チャレンジカードにシールを貼る。	・幼稚園の先生と本日の活動について打合せをし、担任の先生から子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をさせていただき、期待が膨らむようにしておく。また、思い切り体を動かす活動ができるような服装で登園するように家庭への連絡もお願いしておく。 ・暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持てくるように連絡しておく。 ・5歳児と学生がペアになって活動できるようにする。(チャレンジコーナーに分かれる学生もあらかじめ決めておく) ・チャレンジカードにあらかじめ名前を書いておき、ペアが組みやすいようにする。 ・グループが決まったら、元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってだよ」「一緒にいろいろなことにチャレンジしましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして活動に誘う。 ・一緒に行う活動に期待がもてるよう、準備したものなどを具体的に紹介しながら、どのようなチャレンジコーナーがあるか話をする。 ・「何からやってみよう?」「おもしろそうだね」などとやってみようという気持ちになるように誘い、子どもの気持ちを受け止めながらチャレンジコーナーを回る。 ・道具の使い方などわからなかったり、活動のイメージがつかめない様子があったときには、実際に体を動かしながら見本を示し、話のやりとりをしていくなかで理解できるようにしていく。 ・学生自身が楽しそうに活動することで楽しい雰囲気をつくり、興味が広がり、挑戦したいという気持ちが膨らむようにする。 ・どうしても参加したくないという子どもがいたときには、担任の先生に状況を伝えるようにしたらよいか相談する。 ・子どもの様子から必要だと感じたときには、チャレンジの途中で水分補給をする時間をとるようにする。 ・順番を待っている間などには、友達の様子を見たり、がんばりを応援したりして楽しむ。 ・片付けのときには、同じ道具を一か所に集めたり、運んだりして学生と共に取り組めるようにする。 ・それぞれの感想などを聞いたり、学生が感想を伝えたりして、いろいろなことに挑戦できて楽しかったという充実感がもてるようにする。 ・最後にみんなで、バルーンを広げて上下させ、風を感じたり隠れたりしてみんなで一緒にという一体感を感じられるようにする。
11:10	活動のコーナー ・かけっこ ・けんぱ ・ジグザグ走り ・ゴールへのシュート ・バランスボール ・ダンス (ミッキーマウスマーチ) ・手遊び(木陰で) ・ゲーム など 準備物 ・チャレンジカード ・シール ・コーン ・バランスボール ・フラフープ ・CD ・バルーン ・		
11:35		○片付けをする。 ・学生と一緒に身近なものを片付ける。 ・同じものを集める。 ○集まって成果を発表する。 ○みんなでバルーンで遊ぶ。 ・風を感じる。 ・一体感を感じる。 ○学生にさよならの挨拶をする。 ・感想を伝える。 ・挨拶をする。	
11:50			
評価の観点	(子ども) ・先生や学生、友達と一緒に体を動かして活動する楽しさを味わっていたか。 ・自分のやりたいことを学生に伝えながら活動に参加することができたか。 (保育者) ・チャレンジコーナーの道具の準備やかかわりは適切だったか。 ・先生や学生、友達と一緒に身体活動を楽しむための環境を構成できていたか。		

茨城女子短期大学

○活動の様子



「よ〜く、持てようね!」



「お姉さんがいるから大丈夫よ。」



「うわァ、上手だね!」



只今、リハーサル中!

○学生の振り返りから

『いっしょに遊ぼう』の体験を実習に生かすことができたかという視点から振り返った。

- ・私は今まであまり小さい子どもと接することがなかったが、この『いっしょに遊ぼう』を経験して、どのようにして話しかけるかなど学ぶことができ、実習の時に自分から子どもとかかわることができた。
- ・子どもとの会話や触れ合いの中で、子どもの感性や個性に感動したり驚いたりした。実習でも、子ども同士の 話に焦点をあてて観察することができた。
- ・『いっしょに遊ぼう』があったからこそ、実習で子どもに慣れていくことがスムーズにいったのではないと思う。
- ・『いっしょに遊ぼう』で子どもと思いきり遊んだことで、コミュニケーションの取り方を学ぶことができた。
- ・3、4、5 歳児の発達の違い(特に言葉や動き)など、教科書や授業では分からなかったことを自分の目で見たり学んだりして、実習への心構えができた。
- ・『いっしょに遊ぼう』で、人見知りの子や緊張している子には、特に笑顔で接したり楽しく遊んだりすると、喜んで遊び出すということを学んだ。部分実習でも笑顔で話しかけたら、たくさんの子どもが応えてくれた。

〈4歳児〉「お散歩に出かけよう」

○指導計画

指導日時 平成25年 6月19日(水曜日) 10:30~11:30

クラス 4歳児 もも組 29名 (男児 18名 女児 11名)

ねらい	内容	
	☐ 学生や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ☐ 楽しそうな遊びや活動に興味をもち、喜んで参加する。	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動
10:30	- 子どもたちが活動する場所(運動場、雨天の場合は体育館)に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い気持のいい環境を整えておく。 - 散歩(動物ごっこ)のときに使う用具を考え、準備しておく。	☐ 学生や友達と同じようなイメージをもって、一緒に動くことを楽しむ。 ☐ 学生と一緒に散歩したり、体操をしたりして触れ合いながら遊ぶ。
10:40	準備物 ・フラフープ ・トンネル ・ロープ ・池や川、くねくね道 ・ハードル ・トンネル ・バランスボール ・岩? ・散歩で何かに見立てられるもの ・CD ・バルーン など	○運動場(雨天の場合は体育館)に移動する。 ・帽子をかぶり、水筒を持っていく。(雨天の場合は上靴も) ○あいさつをする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・動物のパベットと話をし、自分の名前を伝える。 ○短大の先生の話聞く。 ・今からの遊びのイメージをもつ。 ○散歩に出かける。 ・花摘みをする。 ・かくれんぼをする。 ・追いかけて遊ぶ。 ・いろいろな見立てをして遊ぶ。 ・トンネル ・池や川 ・くねくね道 ・岩 など ・ペアの学生と話をし、自分の行きたいところややりたいことを伝える。
11:10		・本日の活動について担任の先生と打合せをし、子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をしていただく。 ・暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4歳児と学生がペアになって活動できるように、あらかじめ名簿を参考にペアを決めておく。 ・ペア以外の学生は、散歩の途中で出会う動物になるので、様々な用具を用いて楽しい演出ができるように考える。 ・子どもたちが到着したら、元気に一人一人と笑顔で挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊びましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりする。また、以前に作成した牛乳パックパベットの動物を動かしながら楽しい雰囲気をつくり、これから活動に期待がもてるようにする。 ・「あっちに楽しいところがあるよ」「お花探しに行ってみよう?」「虫がいるかなあ」などやってみようというように誘い、芝生運動場を散歩する。いろいろな発見やつづきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・散歩の途中で、「あれ、なにか動物が隠れているよ。なんだろう?」「川があるよ。どうやって渡るかな」「トンネルくぐってみよう」などと、様々な見立てを楽しめるようにする。また、他の学生との触れ合いも楽しめるようにする。 ・フラフループやロープ、ハードルやバランスボールなどの道具の使い方を工夫し、トンネルや池、川、草原などに見立てて遊べるように環境を構成する。 ・活動に誘うときに、パベットを使用して楽しい雰囲気をつくっていく。 ・学生自身が楽しんで活動することで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要だと感じたときには、活動の途中に木陰で休息したり、水分補給したりする時間をとる。 ・みんなで集まり、「どうぶつたいそう」をしたり、バルーンを広げて上下させたりしてみんなで一緒に一体感を感じられるようにする。
11:30		・「〇〇を見つけて楽しかったね」「追いかけてこしたのがおもしろかったよ」などと子どもに感想を話したり、子どもの話を受け止めたりして、また会うことが楽しみにできるようにさよならの挨拶をする。
評価の観点	(子ども) ・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・イメージをもって散歩を楽しんでいたか。 (保育者) ・用具の準備やかかわりはイメージがもてるようなものだったか。 ・先生や学生、友達と触れ合って楽しむための環境を構成できていたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子



子どもたちを迎える準備



ハスの葉っぱの上をびよんびよん



ハスの葉の舟に乗って



魚釣り

○学生の振り返りから

学生が活動後に記述した振り返りシートを「いっしょに遊ぼうの経験を、実習にどのように生かすことができたか」という視点でまとめたものを以下に示す。

- ・小さくて、あまりコミュニケーションが取れなくても、主張はあり、会話にならずとも、ことばかけをし続けること、よく話を聞くことが大事だと「いっしょに遊ぼう」で学びました。実習先でも3歳児とかかわるときの自信になり、積極的に動くことができました。
- ・体育館を池に見立てて、カエルになっていっしょに遊ぶと、子どもたちがどのように想像しながら遊んでいるのわかりました。また、本当にカエルになったように遊ぶ力に驚きました。実習でも見立て遊びをたくさんしました。
- ・小さい子どもに、どのように接し始めればいいのか、どのような声かけをすれば、どのように反応するのかなど、いろいろと試すことができて、実習の参考になりました。
- ・3歳児がどれくらい体を動かすことができるのかわかったので、実習で子どもたちと遊ぶときに役立ちました。遊びのレパートリーが増えました。
- ・指導計画通りにはいかないことがわかったので、実習ではいくつかのパターンを用意して臨むことができました。

平成 25 年度

(3 歳児) 「カエルになって遊ぼう！」

○指導計画

指導日時 平成25年 6月27日(木 曜日) 10:30~11:30

クラス 3歳児 たんぽぽ組 22名 (男児 12名 女児 10名)
ひまわり組 22名 (男児 11名 女児 11名)

ねらい	内容	
	○ 先生や短大の学生と一緒に遊びを楽しむ。	○ 先生や学生、周りの友達とふれ合う。 ○ カエルになって体を動かして遊ぶ。
時間	環境の構成	予想される子どもの活動 保育者・学生の援助
10:30	- 子どもたちが活動する体育館に、危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ごみなども拾い気持のいい環境を整えておく。 - 一緒に遊ぶために使う用具を考え、準備しておく。	- 本日の活動について担任の先生と打合せをし、子どもたちに短大の学生と一緒に広い体育館で遊ぶ話をしていた。 - 暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 3歳児と学生がペアになって活動できるように、あらかじめ名簿を参考にペアを決めておく。 - ペア以外の学生は、池の中のものや出会う生き物になり、体を動かして遊べるように様々な用具を用いて演出する。
10:40	準備物 ・フラフープ ・舟 ・ロープ ・ヘビ ・バランスボール ・カエルの卵 ・段ボールやラシャ紙 ・ハスの葉っぱ ・新聞紙 ・岩、石 ・ビニールテープ ・飛び石 ・C D など	○体育館に移動する。 ・水筒、上靴を持って行く。 ○あいさつをする。 ○ペアに分かれる。 ・短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・カエルのパペットと話をし、自分の名前を伝える。 ○短大の先生の話聞く。 ・今からの遊びのイメージをもつ。 ○カエルの池で遊ぶ。 ・泳ぐ。 ・舟に乗る。 ・追いかけて遊ぶ。 ・いろいろな見立てをして遊ぶ。トンネル ・ヘビ ・ハスの葉っぱ など ・ペアの学生と話をし、自分の行きたいところややりたいことを伝える。
11:10		・子どもたちが到着したら、元気に一人一人と笑顔で挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊びましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりする。また、以前に作成した牛乳パックパペットのカエル動かしながら「ここはぼくが住んでいるお池ですよ」などと言って楽しい雰囲気をつくり、これから活動に期待がもてるようにする。 ・「あつちに見えよ。そこまで泳いで行ってみよう」「お船に乗ってみたい」「カエルのトンネルくぐってみたい」など池の中のイメージで遊びたい気持ちになるように誘い、池の中を探検する。いろいろな発見やつづきを受け止め、楽しい気持ちになるようにする。 ・探索の途中で、「あれ、なにか生き物が隠れているよ。なんだろう?」「ヘビだ!」「逃げろ!」「カエルのトンネルくぐってみたい」などと、様々な見立てを楽めるようにする。また、その場所にいる学生との触れ合いも楽しめるようにする。 ・フラフープやロープ、バランスボールなどの道具や材料を工夫し、葉っぱのトンネルやヘビ、舟、飛び石などに見立てて遊べるように環境を構成する。 ・学生自身が、楽しんで活動する(言葉に出したり生き生きと活動するモデルとなる)ことで、様々な見立てを楽しんだり、イメージをもって遊んだりできるようにする。 ・自分の思うままに行動したい気持ちが強い子どもがいたときには、その気持ちを尊重しながらも危険がないように見守っていく。 ・子どもの様子から必要だと感じたときには、活動の途中に休息したり、水分補給したりする時間をとる。 ・みんなで集まり、「カエルのあめふりおんど」を楽しむ。近くの子が「手をあげて」「手を振って」などと次の動作を言ったり、一緒に歌いながら踊るなど楽しい雰囲気をつくっていく。 ・「たくさん泳いで楽しかったね」「お舟に乗って楽しかったね」などと子どもにも感想を話したり、子どもの話を聞き止めてたりして、また会うことが楽しみにするよう
11:30		○学生にさよならの挨拶をする。 ・カエルのパペットをプレゼントする。 ・話をし、 ・挨拶をする。
評価の観点	(子ども) ・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・カエルや池のイメージで遊んでいたか。 (保育者) ・用具の準備やかかわりはイメージがもてるようなものになっていたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子



活動前に絵の具を用意する学生



グループになって遊び方の説明を聞く

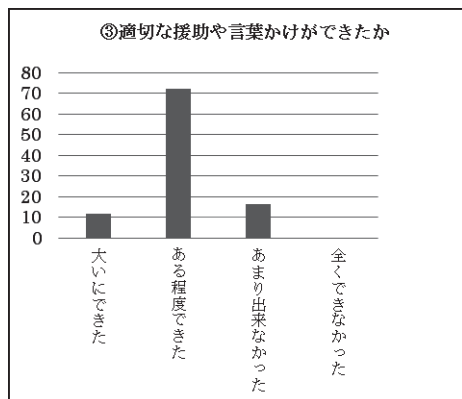
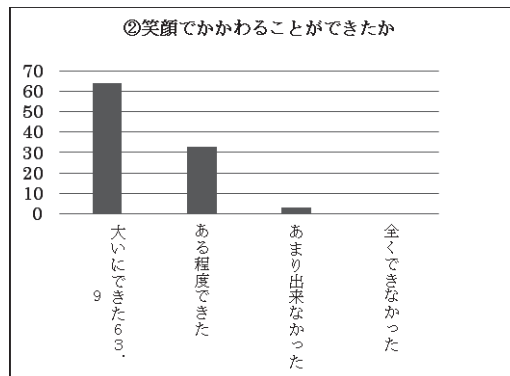
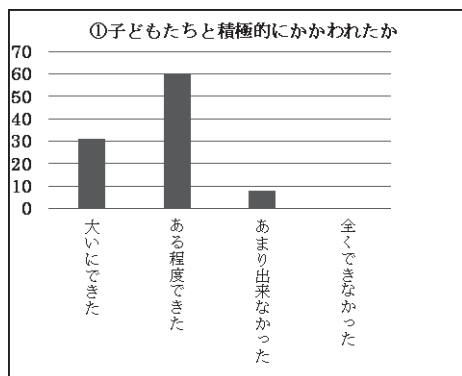


学生と一緒に絵の具を使って遊ぶ



海の生き物を大胆に描く

○学生の振り返りから



④印象に残った子どものエピソード

- ・子どもが描いたライオンの色が個性的だった。
- ・子どもたちが手に色をつけて遊び始めたとき「先生はやらないの？先生もやったら」と言われてしまった。子どもの遊びを邪魔しないようにと思っていたら一歩引いていたのだと気が付いた。
- ・紙に生き物を描くという遊びから、手足に絵具をつけて体全体で遊びを楽しむ姿に変わった。
- ・手を洗うバケツで色が混じり合うのを子どもたちが楽しんでいた。

〈5歳児〉「海の生き物を描こう」

○指導計画

指導日時 平成24年 7月11日 (水 曜日)

10:30～11:50

クラス 5 歳児 さくら組 24名 (男児 10名 女児 14名)
ふじ組 22名 (男児 8名 女児 14名)

ねらい	内容	
	☐ 学生や友達と会話を楽しみながら創作する。 ☐ 学生や友達に自分が考えたこと、思ったことを伝える。 ☐ みんなで一緒に創作する充実感を味わう。	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動
	子どもたちが活動する場所(体育館)に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。また、ゴミなども拾い気持ちのいい環境を整えておく。 創作活動に使う用具や材料を、グループ毎にかごに入れておくなどして、材料の配布がスムーズに行えるようにしておく。 準備物 ・厚紙 (大) ・らしや紙 (大) ・スポンジ ・筆 ・絵の具 (いろいろな色) ・絵の具皿 ・はさみ ・新聞紙 ・雑巾 ・バケツ ・ガムテープ ・色画用紙 ・クレヨン など	○体育館に移動する。 ・上靴、水筒を持っていく。 ○短大の先生の話聞く ・あいさつ ・グループに分かれての活動など ○グループに分かれる (4グループ) ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○グループの学生から話を聞く。 ・本日の活動について ・準備してあるものについて ○「海の中の生き物と陸の生き物」の活動に参加する。 ・学生とともに厚紙を切り抜く ・スポンジで色を染める ・周りに絵を描く ○片付けをする。 ・学生と一緒に身近なものを片付ける。 ・同じものを集める。 ○できたものをみんなで見る。 ・壁面に貼る ・みんなで鑑賞したり、話をしたりする。 ○学生にさよならの挨拶をする。 ・感想を伝える。 ・挨拶をする。
		・幼稚園の先生と本日の活動について打合せをし、担任の先生から子どもたちに短大の学生と一緒に活動の話をしていただき、期待が膨らむようにしておく。また、思い切り創作活動ができるように汚れてもいい服装で登園するように家庭への連絡もお願いしておく。 ・暑い日が続いているので、水分補給のために各自水筒を持ってくるように連絡しておく。 ・4グループに分かれて活動できるよう、子どもたちも4つのグループに分かれるようにする。 ・グループが決まったら、元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に楽しいものをつくりましょうね」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして活動に誘う。 ・一緒に行う創作活動に期待がもてるよう、準備したものなどを具体的に紹介しながら、どのような手順でどのようなものを作っていくのか話をする。 ・道具の使い方などわからなかったり、活動のイメージがつかめない様子があったときには、実際に手を動かしながら話のやりとりをしていくなかで理解できるようにしていく。 ・周りの友達の工夫やイメージを紹介し、さらに新しい考えが出てくるようにしていく。 ・どうしてもイメージがわいてこないような子どもがいたときには、「好きな動物はなにかな?」「海の生き物で知っているものはある?」などと話をし、きっかけをつかむようにする。 ・はさみ(カッター)の扱いに注意し、安全に活動ができるよう配慮する。また、材料や道具がわかりやすいように、場を整理しながら作るようにする。 ・絵の具を使うときには、床が汚れないように、新聞紙を敷いておく。 ・学生自身が楽しそうに創作することで楽しい雰囲気をつくることで興味が広がり、創作したいという気持ちが膨らむようにする。 ・片付けのときには、同じ道具や材料を集めたり、汚れた床を雑巾で拭いたりして学生と共に取り組めるようにする。 ・片付けの間に壁面に創作したものを貼り(絵の具がたれるようであれば床面に並べる)みんなで鑑賞できるようにする。 ・それぞれの感想などを聞いたり、学生が感想を伝えたりして、すごいものができたという充実感がもてるようにする。
評価の観点	(子ども)・先生や学生、友達と一緒に創作する楽しさを味わっていたか。 ・自分のイメージを友達や学生に伝えながら活動に参加することができたか。 (保育者)・お互いのイメージを出し合い創作するための材料の準備やかかわりは適切だったか。 ・先生や学生、友達と一緒に創作活動を楽しむための環境を構成できていたか。	

茨城女子短期大学

○活動の様子



マラカス作り



マラカスの橋を渡る

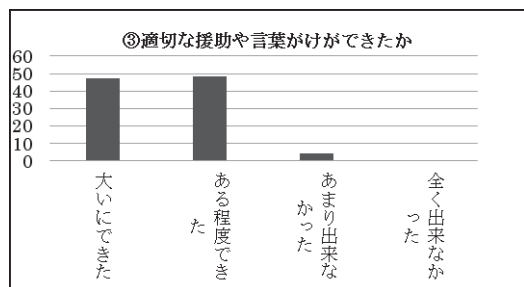
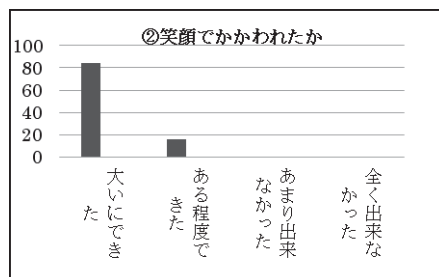
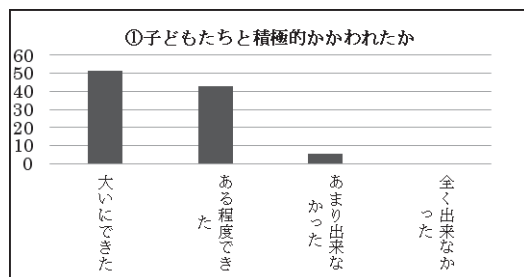


学生と一緒にミッキーマウス



マラカスのトンネルでさよなら

○学生の振り返りから



- ④印象に残ったエピソード
- ・笑顔で「できた!」と言ってくれた。
 - ・みんな元気でとてもいい経験になった。
 - ・最後に「また来てね」と何度も言ってくれた。
 - ・おもちゃを作り終わった後、音を鳴らして笑顔になってくれた。
 - ・友達同士で手をつないでもじもじしていた姿がとても子どもらしくて可愛かった。

〈4 歳児〉「マラカスを作って遊ぼう」

○指導計画

指導日時 平成24年 5月18日(金 曜日) 10:30～11:30

クラス 4 歳児 うめ組 26名(男児 10名 女児 16名)
もも組 25名(男児 8名 女児 17名)

ねらい	内容		
	○ 学生や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	○ 友達と同じ物を持ったり、身に付けたりして遊ぶ。 ○ 学生や友達と同じようなイメージをもって、一緒に 動くことを楽しむ。	
	○ 楽しそうな遊びや活動に興味をもち、喜んで参加する。	○ 遊びに使う物を学生と一緒に作る。 ○ 作った楽器を鳴らして楽しむ。	
時 間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	・ 子どもたちが遊ぶ場所（芝生）に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。 ・ いろいろなもので音が出るものを作ったり、音が出るもので遊んだりできるように準備しておく。 準備物 ・ トイレットペーパーの芯 ・ 鈴、豆類 ・ ペットボトルのキャップ ・ 段ボール ・ 竹 ・ スズランテープ ・ キラキラテープ ・ セロテープ ・ はさみ ・ マジック ・ 色紙 など	○芝生に移動する。 ・ 水筒を持っていく。 ○短大の先生の話を聞く ・ 本日の活動について ・ 準備してあるものについて ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・ はじめて会う学生に挨拶をする。 ・ 自分の名前を伝える。 ○芝生の上で遊ぶ。 ・ かけっこ ・ ボールやフラフープ ・ ロープ など ○音で遊ぶ。 ・ 音の出るものを身近なもので作る。 ・ マラカス ・ 太鼓 ・ 鐘 など ・ 音楽に合わせて体を動かす。 ・ 「ミッキーマウスマーチ」「さんぽ」など	・ 強風が吹いた後でもあるので、芝生の上に危険なものがないかどうか確認しておく。 ・ 短大の学生とはじめての活動が楽しみになるように、担任から短大のお姉さんたちと一緒に作ったり遊んだりすることを話しておいてもらえるよう打合せをしておく。 ・ 近くに水分補給をする場所がないので、各自水筒を持って来るように打ち合わせしておく。また、水筒を置く場所を木陰の涼しいところに設置しておく。 ・ 一緒に作ったり、遊んだりすることに期待がもてるように、フラフープやバランスボールなどを置いておいたり、製作したものを手にもって迎えるようにする。 ・ 元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。こちらから「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊ぼうね」「お名前は？」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして遊びに誘う。 ・ 不安そうな表情の子がいたら、これからの活動がどんな活動なのかをわかりやすいように話したり、好きな遊びを聞いて遊びに誘ったりする。 ・ まだ慣れないようであつたら、ふれ合って遊んだり追いかけてこやけんバをしたりして緊張をほぐしていく。 ・ 子どもの数より学生の方が多いため怖がりしないように、大勢でかたまつて壁をつくったりして視界を遮らないよう配慮する。また、できるだけ子どもの目の高さになって話をするようにする。 ・ あらかじめ自分で作っておいた音の鳴るものをならしてみたり、紹介したりしながら遊びに誘う。 ・ 作るコーナーでは、はさみやセロテープの扱いに注意し、安全に活動ができるよう配慮する。また、どんな材料があるかがわかりやすいように、場を整理しながら作るようにする。 ・ 学生自身が積極的に踊ったり、演奏したりして楽しそうな雰囲気をつくることで、興味が広がりが参加したいという気持ちが膨らむようにする。 ・ あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を観察する。表情などから子どもの気持ちを探り、無理のないように見守る。 ・ トイレに行きたい子どもがいたら、必ず担任の先生にその旨を話し、本館1階のトイレに連れて行き一緒に帰ってくる。 ・ 同じ道具を集めたり、一か所に集めたりして学生と共に片付けができるよう、個々にわかりやすいように話をする。 ・ 子どもが親しみのある曲（ミッキーマウスマーチやさんぽなど）を流し、それに合わせて自分で作った楽器をならす機会をつくり満足した気持ちになるようにする。 ・ 歌の歌詞を予め覚えておき、一緒に歌うことで子どもたちを巻き込み、楽しい気持ちになるようにする。 ・ 「楽しかったね」「また遊びましょうね」などと声をかけ、一人一人の表情を確認しながら挨拶をして見送る。
11:10		○片付けをする。 ・ 学生と一緒に身近なものを片付ける。 ・ 同じものを集める。 ○短大のお姉さんと一緒に作った楽器をならしたり、身体を動かしたりする。 ・ 音楽に合わせて作った楽器と一緒にならす。 ・ 音楽に合わせて身体を動かす。	・ 同じ道具を集めたり、一か所に集めたりして学生と共に片付けができるよう、個々にわかりやすいように話をする。 ・ 子どもが親しみのある曲（ミッキーマウスマーチやさんぽなど）を流し、それに合わせて自分で作った楽器をならす機会をつくり満足した気持ちになるようにする。 ・ 歌の歌詞を予め覚えておき、一緒に歌うことで子どもたちを巻き込み、楽しい気持ちになるようにする。
11:20	・ 雨天の場合は、幼稚園4歳児保育室で行う。	○学生にさよならの挨拶をする。 ・ 感想を伝える。 ・ 挨拶をする。	

評価の観点	内容
	(子ども)・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・自分から楽しそうな遊びを見つけ喜んで参加していたか。 (保育者)・音を鳴らしたり、音の出る楽器を作ったりすることができる材料の準備やかかわりは適切だったか。 ・先生や学生、友達と一緒に触れ合って遊ぶことができる環境を構成できていたか。

茨城女子短期大学

○活動の様子

<活動前の準備>



天候を見て短大芝生にコーナーを設置



お面をかぶって動物に変身

<活動>



動物になりきって遊ぶ



川の中を泳いで渡る



ジャングルのトンネルをくぐる

○学生の振り返りから

実際にかかわってみて、3歳児と4歳児の発達の違いについて次のように振り返っている。

《人とのかかわり方について》

- ・3歳児は、何かあると先生の所に行ってしまうので、初対面の私たちよりいつも関わっている先生の方が安心することがわかった。
- ・3歳児は、先生の周りにいる子が多かった。3歳の子は、友だち同士の物の取り合いが多かった。
- ・3歳児は、親しい先生の側じゃないと嫌な子が多かったが、4歳児は、友だちと物を共有したり、貸し借りの順番を待っている姿がよく見られた。

《環境とのかかわり方について》

- ・3歳児は、いろいろな遊びを用意したことで、好きなものを見つけて夢中に遊んでいた。4歳児は、思っていたよりはさがみが上手に使えたり、素材を自由に使って作ろうと目の前だけのものにとらわれていないようだった。
- ・4歳児は自分でやろうと取り組む子が多かった、3歳児は、遊びの世界に入りやすい特徴があった。
- ・4歳児は、環境が変わっても大丈夫であったが、3歳児は、いつもと違う環境だと不安になってしまうようだ。

《言葉の発達について》

- ・4歳児は、話が通じるし言いたいことははっきりわかる。思いやりのある言葉も使っていた。3歳児は、意志があるのはわかるけど、それを言葉にするのが難しいようであった。
- ・3歳児は、とにかくしゃべっていたけれど、4歳児は、思ってたよりも口数が少なく、すぐに遊びに集中している感じがであった。
- ・3歳児は、言葉よりも表情や動きで表す子が多かった。4歳児は、自分の気持ちややりたいことをきちんと言葉にしていた。また何か伝えたいに、どのような言葉にしていかわからない子がいた。

平成 24 年度

(3 歳児) 「ジャングル探検しよう」

○指導計画

指導日時 平成 24 年 6 月 1 日 (金 曜日) 10:30~11:30

クラス 3 歳児 たんぼ組 29 名 (男児 15 名 女児 14 名)
ひまわり組 30 名 (男児 18 名 女児 12 名)

ねらい	○ 先生や短大の学生と一緒に遊びを楽しむ。		内容	□ 先生や学生、周りの友達とふれ合う。 □ 動物になって体を動かして遊ぶ。	
時 間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助		
10:30	- 子どもたちが遊ぶ場所（芝生）に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。 「ジャングルたんけん」のイメージが膨らむようなものを、段ボールや新聞紙、スズランテープやブルーシート等身近な素材を使って作っておいたり、子どもたちと一緒に作ったりすることができるようにしておく。 準備物 ・段ボール箱 ・ガムテープ ・スズランテープ ・新聞紙 ・フラフープ ・ボール ・巧技台 ・ブルーシート ・ふろしき ・トイレットペーパーの芯 ・セロテープ ・色紙 など - 雨天の場合は、幼稚園遊戯室で行う。	○芝生に移動する。 ・自分で色を塗った動物のお面をかぶる。 ・先生や友達と一緒に並んで歩く。 ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ・自分で色を塗ったお面（動物）の話をする。 ○学生とふれ合いながら遊ぶ。 ・体に触れあって遊ぶ。 ・追いかけっこをする。 ・ケンパをする。 ○「ジャングルたんけん」のイメージで遊ぶ。 ・動物になって動く。 ・トンネルをくぐる。 ・橋を渡る。 ・泳いで渡る。 ・フープの島にジャンプする。 ・隠れる。 ・えさを探す。 ・双眼鏡を作る。	・短大の学生とはじめての活動が楽しみになるように、短大から届けられたお面に自分たちで色を塗っておく。 ・人数を確認し、短大に移動する。不安な表情の子どもがいたら、これからの活動どんな活動なのかをわかりやすいように話し、少しでも楽しみに思えるようにする。 ・元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊ぼうね」「お名前は？」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして遊びに誘う。また、子どもがかぶっているお面について「ライオンさんだね」「すてきなお面ができたね」などと話し、学生自らが動物になって動き遊びのきっかけを作るようにする。 ・学生も動物のイメージで動いたり遊んだりできるように、あらかじめお面としっぽを作り、身に付けておく。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり追いかけっこやケンパをしたりして緊張をほぐしていく。 ・子どもの数より学生の方が多いので怖がったりしないように、できるだけ子どもの目の高さになって話をする。 ・徐々に、「ジャングルたんけん」のイメージで遊べるように、「あつ、あつちに大きなライオンがいるみたいだ。行ってみよう」「川があるよ。泳いで渡ろう」「ジャングルのトンネルだ。くぐってみよう」などと声をかけ一緒に動いたり、子どもの動きを引き出すような環境（学生が何人かで足を広げトンネルをつくるなど）を作ったりする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなさそうな子どもがいたときには、体調が悪くないかどうか様子を観察する。表情などから子どもの気持ちを探り、無理のないように見守る。 ・学生が動物の動きをしたり、作ってみせたりしてモデルとなり、楽しそうな雰囲気をつくることで、自分から遊んでみようという気持ちになるようにする。 ・トイレに行きたい子どもがいたら、必ず担任の先生にその旨を話し、本館1階のトイレに連れて行き一緒に帰ってくる。 ・同じ道具を集めたり、一カ所に集めたりして学生と共に片付けができるよう、個々にわかりやすいように話をする。 ・「楽しかったね」「また遊びましようね」などと声をかけ、一人一人の表情を確認しながら挨拶をして見送る。		
11:15	使い終わった新聞紙はビニール袋に入れて、大きなボールを作り後で遊べるようにする。	○片付ける ・自分が遊んだ道具などを学生と一緒に片付ける。			
11:30	子どもたちが帰ったあとに、道具や素材を元の場所に戻す。	○学生にさよならの挨拶をする。 ・感想を伝える。 ・挨拶をする。			
評価の観点	(子ども) ・先生や学生、友達とのふれ合いを楽しんでいたか。 ・自分からおもしろそうな環境や遊びにかかわっていたか。 (保育者) ・「ジャングルたんけん」のイメージで遊べるような環境の準備やかかわりは適切であったか。 ・先生や学生、友達と触れ合って遊べるような環境をつくることができたか。				

茨城女子短期大学

○学生の振り返りから

活動後に振り返りシート（環境構成、環境へのかかわり、声かけ、計画・準備について）に書き込むことにより、自身のかかわりや育ちの捉えを振り返る機会をつくった。学生の記述の中から代表的なものを選定し、以下に示す。

◆声かけについて

A 自由に創作してもらいたかったので、否定的な言葉や、押しつけるような言い方をしないようにした。

B 楽しめるように、いろんな問いかけをしながらやったり、子どもの想像力を大切に、必要以上に手は出さないようにした。

C ダンボールを差し込んでいってだんだん大きくなるにつれてとても楽しそうに差し込んでいた。「ここに差したらかっこよくなるかな？」と声をかけてくれたし、「ここに窓書きたい」など時間が経つにつれて心を開いてくれて自己主張もしてくれた。

◆子どもの表現について

D 段ボールをたくさん組んでお家を作っていた。「ここはママの部屋」「ここはすべり台」と子どもたちの中ではすてきなお家の世界が広がっているようだった。

E 自分の考えていることを形にあらわし、自分の想像を豊かにあらわしていました。

F とまどいもなくイメージをもったのびのびと作っている様子でした。他の人が作った作品にも興味をもっていたりしてコミュニケーションがすごくとりやすかった。

G 自分の発想を大きくふくらまし、1つの恐竜を頑張って1人で作っていた。どうやったら大きな恐竜が出来るか、考えながら作っている顔がものすごく印象に残った。

H 最初はもじもじ遠慮しがちに作っていて、どんどん時間がたつ内に夢中になって、完全に自分の世界に入っていた。

○1年間の活動を振り返って

3回のいっしょにあそぼうの体験を通して、保育者になるために身につけておかねばならないことについて、学生たちは以下のような気づきを得ている。

◆声かけについて

A 自由に創作してもらいたかったので、否定的な言葉や、押しつけるような言い方をしないようにした。

B 楽しめるように、いろんな問いかけをしながらやったり、子どもの想像力を大切に、必要以上に手は出さないようにした。

C ダンボールを差し込んでいってだんだん大きくなるにつれてとても楽しそうに差し込んでいた。「ここに差したらかっこよくなるかな？」と声をかけてくれたし、「ここに窓書きたい」など時間が経つにつれて心を開いてくれて自己主張もしてくれた。

◆子どもの表現について

D 段ボールをたくさん組んでお家を作っていた。「ここはママの部屋」「ここはすべり台」と子どもたちの中ではすてきなお家の世界が広がっているようだった。

E 自分の考えていることを形にあらわし、自分の想像を豊かにあらわしていました。

F とまどいもなくイメージをもったのびのびと作っている様子でした。他の人が作った作品にも興味をもっていたりしてコミュニケーションがすごくとりやすかった。

G 自分の発想を大きくふくらまし、1つの恐竜を頑張って1人で作っていた。どうやったら大きな恐竜が出来るか、考えながら作っている顔がものすごく印象に残った。

H 最初はもじもじ遠慮しがちに作っていて、どんどん時間がたつ内に夢中になって、完全に自分の世界に入っていた。

このように、子どもとの様々な遊びを計画・準備し、実践し、振り返るというこの一連の活動の中で、学生たちは、環境構成、子どもへの言葉かけ、主体的なかかわり方、発達への理解等について、実践的に習得していくのである。これらの子どもたちと触れ合う経験を通して得られた新たな気づきや省察が、次の学びへの意欲へと繋がっていくと考察される。

〈5歳児〉「段ボールを組み立てて見立てて遊ぶ」

○活動の様子

準備



○子どもたちと一緒に活動するユニフォームの作製

3つの●が印刷してあるTシャツを用いて

3つの●をもとに何かに見立ててデザインするという活動を行った。今回の活動は、子どもとともに段ボールを組み立てていくうちに、「○○に見えるね」「○○みたいになってきたね」と見立てを楽しむということである。学生も見立てを楽しんでほしいという願いをもった活動である。



○段ボールを切って、切込みを入れておく。

グループに分かれて準備をする

段ボールを子どもが扱いやすい大きさに切り、組み立てられるように切込みを入れておく。大きさをそろえるよりも、様々な大きさがあつた方がいいのではなどと話をしながら作業を進める様子が見られた。

活動



○5歳児を迎え入れ（短大体育館）対面し、活動に入る。

グループごとに活動

はじめは緊張し何をしてよいかわからないという様子の子も多かったが、学生の声かけやリードもあり、次第に自分から動き出し段ボールを組み立てたり、「○○つくろう」と作っていくうちに見立てがはっきりしていくという姿が見られた。「色を塗りたい」「色紙で目をつけた」という要望も聞かれるようになり、学生たちは子どもの声に耳を傾け、話を聴きながら要望に応えようとしていた。



振り返り



○それぞれにできたものを紹介し、鑑賞し合う。

グループ同士で交流

「ドラゴン」「船」「おうち」「恐竜」「お化け屋敷」など、自分たちの作品を紹介する姿が見られた。学生同士も他のグループの作品を見合うことで、様々なイメージで様々な作品ができたことを知るとともに、できた作品に対してどのような言葉をかけて認めていくかを学んでいたようだった。

○活動の様子



トイレペーパーの芯を切って丸めて



豆を入れペットボトルのキャップでふた



学生の演奏に耳を傾ける子どもたち



作ったマラカスで一緒に演奏

○学生の振り返りから

活動後に振り返りシート（声かけ、計画・準備について）へ記入することにより、自身のかかわりや気づきについて省察する機会を設けた。学生の記述の中から代表的なものを選定し、以下に示す。

◆音楽とのかかわりについて

A 曲が流れた途端に楽器を鳴らし始め、自由に歌いながらリズムを刻んでいるのを見て、こちらまで笑顔になれたような気がした。

B はじめは緊張していた様子で、楽しめていないようだったけれど、楽器から音が出た瞬間、目がキラキラして、自分から「こうしたい」というような態度に変わっていった。

C 楽器を演奏している時の楽しそうな笑顔がとても印象に残っている。また私たちと一緒に演奏したいと言ってくれた女の子がいたのも、とても印象的で、またこういう機会があったらいいなと思った。

◆製作活動について

D 大きくなると何かを作る時、完成の形が気になるけれど、みんな斬新に切ったり貼りつけたり、十人十色のマラカスができて、とても見ていて楽しかった。

◆発達について

E 4歳児になると初めてでも泣くことはなく、成長していると感じることができた。先生の話にも耳を傾けることができるようになってきて驚いた。

F 4歳児は自分の「こうしたい」という気持ちをうまく伝えることができていた。3歳児と違って、人に慣れている様子もみられた。みんなで一緒に歌に合わせてやるのも一体感がでて、すごくよかった。「音でたよ」と喜んでいる様子だったのでよかったなとホッとした。

〈4歳児〉「自分で作ったマラカスで演奏しよう！」

○指導計画

指導日時 平成23年 6月 8日（水曜日） 10:30～11:30

クラス 4歳児 うめ組 24名（男児 9名 女児 15名）
もも組 22名（男児 10名 女児 12名）

ねらい	内容		内容
	☐友達と同じ物を持って、身に付けたりして遊ぶ。 ☐学生や友達と同じようなイメージをもって、一緒に動くことを楽しむ。 ☐遊びに使う物を学生と一緒に作る。 ☐作った楽器を鳴らして楽しむ。		
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	・子どもたちが遊ぶ場所（芝生）に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。 ・いろいろなもので音が出るものを作ったり、音が出るもので遊んだりできるように準備しておく。 準備物 ・トイレットペーパーの芯 ・鈴、豆類 ・ペットボトルのキャップ ・段ボール ・竹 ・スズランテープ ・キラキラテープ ・セロテープ ・はさみ ・マジック ・色紙 ・ふれあいドラム など	○芝生に移動する。 ・水筒を持っていく。 ○短大の先生の話を聞く ・本日の活動について ・準備してあるものについて ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ○芝生の上で遊ぶ。 ・かけっこ ・ボール ・ロープ など ○音で遊ぶ。 ・音の出るものを身近なもので作る。 ・マラカス ・太鼓 ・鐘 ・ボンボンや簡単な衣装を作って音楽に合わせて体を動かす。 ・ミッキーマウスマーチなど ・ふれあいドラムで遊ぶ。 ・友達や学生とタッチすることで音が出ることを楽しむ。	・短大の学生とのはじめての活動が楽しみになるように、担任から短大のお姉さんたちと一緒に芝生で遊ぶ話をあらかじめしておく。 ・水分補給のために、各自水筒を持っていくように話す。 ・人数を確認し、短大に移動する。不安な表情の子どもがいたら、これからの活動がどんな活動なのかをわかりやすいように話し、少しでも楽しみに思えるようにする。 ・一緒に作ったり、遊んだりすることに期待がもてるように具体的に準備したものを紹介しながら話を進める。 ・元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってたよ」「一緒に遊ぼうね」「お名前は？」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして遊びに誘う。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり追いかけてやケンパをしたりして緊張をほぐしていく。 ・子どもの数より学生の方が多いため、壁に視界を遮らないよう配慮する。また、できるだけ子どもの目の高さになって話を進めるようにする。 ・あらかじめ自分で作っておいた音の鳴るものを示したり、紹介したりしながら遊びに誘う。 ・作るコーナーでは、はさみやセロテープの扱いに注意し、安全に活動ができるよう配慮する。また、材料や道具がわかりやすいように、場を整理しながら進めるようにする。 ・学生自身が楽しそうに踊ったり、演奏したりして楽しそうな雰囲気をつくることで、興味や広がりを感じたいという気持ちが膨らむようにする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくない子どもがいたら、体調が悪くないかどうか様子を観察する。表情などから子どもの気持ちを探り、無理のないように見守る。 ・トイレに行きたい子どもがいたら、必ず担任の先生にその旨を話し、本館1階のトイレに連れて行き一緒に帰ってくる。 ・同じ道具を集めたり、一か所に集めたりして学生と共に片付けができるよう、個々にわかりやすいように話を進める。 ・子どもが親しみのある曲を演奏し、それに合わせて自分で作った楽器を鳴らす機会をつくり満足した気持ちになるようにする。
11:10		○片付けをする。 ・学生と一緒に身近なものを片付ける。 ・同じものを集める。 ○短大のお姉さんの楽器演奏を聴く。 ・作った楽器と一緒に演奏する。	・子どもが親しみのある曲を演奏し、それに合わせて自分で作った楽器を鳴らす機会をつくり満足した気持ちになるようにする。 ・「楽しかったね」「また遊びましょうね」などと声をかけ、一人一人の表情を確認しながら挨拶をして見送る。
11:20	・雨天の場合は、幼稚園4歳児保育室で行う。	○学生にさよならの挨拶をする。 ・感想を伝える。 ・挨拶をする。	
評価の観点	（子ども）・先生や学生、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたか。 ・自分から楽しそうな遊びを見つけ喜んで参加していたか。 （保育者）・音を鳴らしたり、音の出る楽器を作ったりすることができる材料の準備やかかわりは適切だったか。 ・先生や学生、友達と一緒に触れ合って遊ぶことができる環境を構成できていたか。		

茨城女子短期大学

○活動の様子



3歳児と学生がベアになって探検



いろいろなコーナーで活動



双眼鏡などの探検グッズ作り



コーナーで子どもたちの動きを支える学生

○学生の振り返りから

活動後に振り返りシート（環境構成、環境への子どものかかわり、声かけ、計画・準備について）に書き込むことにより、自身のかかわりや育ちの捉えを振り返る機会をつくった。学生の記述の中から代表的なものを選定し、以下に示す。

- A 3歳は場所に慣れるのに時間がかかるので、1つ1つの声かけやなじめるような環境作りが大切だと思いました。慣れてくると、家であった出来事を話したり、「ハサミがうまく使えるよ」と自分のことを話したりするようになりました。
- B 活動に興味がない子どもに、どのように接するのがいいのか、興味の引き出し方を考えさせられました。興味があることには質問をしてくる子どももいるので、答えられるようにしておかないといけないと思いました。
- C 子どもは、自分がイメージした行動とまったく違った行動をしていた（できることやできないことのイメージが違っていった）ので、この体験は貴重だと思いました。また、3歳児でも個性ができているので、いろいろな子に対応できるようになりたいと思いました。
- D 自分から積極的に学生と関わったり遊び出したりする子どももいれば、涙をこぼしながら先生にしがみついで離れない子どももいた。3歳児でもいろいろな育ちがあると思った。遊んでいる子どもは、本当に楽しそうにはしゃいでいた。一緒にいるこちらまで、自然と笑顔になった。
- E 慣れない環境に泣き出してしまいう子どももいましたが、先生が話しかけたり手をつないだりすると安心する姿を見て、子どもたちにとって先生の存在はとても大きいものだということを改めて感じました。

平成 23 年度

(3 歳児) 「動物に変身して探検しよう！」

○指導計画

指導日時 平成 23 年 6 月 3 日 (金 曜日) 10:30～11:30

クラス 3 歳児 たんぼ組 24 名 (男児 8 名 女児 16 名)
ひまわり組 25 名 (男児 11 名 女児 14 名)

ねらい	○ 先生や短大の学生と一緒にのおもしろそうな遊びにかかわる。	内容	○ 先生や学生、周りの友達とふれ合う。 ○ 動物になって体を動かして遊ぶ。
		内容	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動	保育者・学生の援助
10:30	- 子どもたちが遊ぶ場所（芝生）に危険なものがないかどうか点検し、安全な環境を整えておく。 「ジャングルたんけん」のイメージが膨らむようなものを、段ボールや新聞紙、スズランテープやブルーシート等身近な素材を使って作っておいたり、子どもたちと一緒に作ったりすることができるようにしておく。 準備物 - 段ボール箱 - ガムテープ - スズランテープ - 新聞紙 - フラフープ - ボール - 巧技台 - ブルーシート - ふろしき - トイレットペーパーの芯 - セロテープ - 色紙 など - 雨天の場合は、幼稚園遊戯室で行う。	○芝生に移動する。 ・自分で色を塗った動物のお面をかぶる。 ・先生や友達と一緒に並んで歩く。 ○短大の学生と挨拶をかわす。 ・はじめて会う学生に挨拶をする。 ・自分の名前を伝える。 ・自分で色を塗ったお面（動物）の話をする。 ○学生とふれ合いながら遊ぶ。 ・体に触れあって遊ぶ。 ・追いかけっこをする。 ・ケンパをする。 ○「ジャングルたんけん」のイメージで遊ぶ。 ・動物になって動く。 ・トンネルをくぐる。 ・橋を渡る。 ・泳いで渡る。 ・フープの島にジャンプする。 ・隠れる。 ・えさを探す。 ・双眼鏡を作る。	・短大の学生とのはじめての活動が楽しみになるように、短大から届けられたお面に自分たちで色を塗っておく。 ・人数を確認し、短大に移動する。不安な表情の子どもがいたら、これからの活動がどんな活動なのかをわかりやすいように話し、少しでも楽しみに思えるようにする。 ・元気に笑顔で一人一人と挨拶をする。「ようこそ」「待ってだよ」「一緒に遊ぼうね」「お名前は？」などと声をかけたり、自己紹介をしたりして遊びに誘う。また、子どもがかぶっているお面について「ライオンさんだね」「すてきなお面ができたね」などと話し、学生自らが動物になって動き遊びのきっかけを作るようにする。 ・学生も動物のイメージで動いたり遊んだりできるように、あらかじめお面としっぽを作り、身に付けておく。 ・まだ慣れないようであったら、ふれ合って遊んだり追いかけっこやケンパをしたりして緊張をほぐしていく。 ・子どもの数より学生の方が多いため怖がりしたりしないように、できるだけ子どもの目の高さになって話をする。 ・徐々に、「ジャングルたんけん」のイメージで遊べるように、「あつ、あつに大きなライオンがいるみたいだ。行ってみよう」「川があるよ。泳いで渡ろう」「ジャングルのトンネルだ。くぐってみよう」などと声をかけ一緒に動いたり、子どもの動きを引き出すような環境（学生が何人かで足を広げてトンネルをつくるなど）を作ったりする。 ・あまり動かない子どもやおもしろくなくそうなおもしろいときには、体調が悪くないかどうか様子を観察する。表情などから子どもの気持ちを探り、無理のないように見守る。 ・学生が動物の動きをしたり、作ってみせたりしてモデルとなり、楽しそうな雰囲気をつくることで、自分から遊んでみようという気持ちになるようにする。 ・トイレに行きたい子どもがいたら、必ず担任の先生にその旨を話し、本館1階のトイレに連れて行き一緒に帰ってくる。 ・同じ道具を集めたり、一カ所に集めたりして学生と共に片付けができるよう、個々にわかりやすいように話をする。 ・「楽しかったね」「また遊びましようね」などと声をかけ、一人一人の表情を確認しながら挨拶をして見送る。
11:15	使い終わった新聞紙はビニール袋に入れて、大きなボールを作り後で遊べるようにする。	○片付ける ・自分が遊んだ道具などを学生と一緒に片付ける。	
11:30	子どもたちが帰ったあとに、道具や素材を元の場所に返す。	○学生にさよならの挨拶をする。 ・感想を伝える。 ・挨拶をする。	
評価の観点	(子ども)・先生や学生、友達とのふれ合いを楽しんでいたか。 ・自分からおもしろそうな環境や遊びにかかわっていたか。 (保育者)・「ジャングルたんけん」のイメージで遊べるような環境の準備やかかわりは適切であったか。 ・先生や学生、友達と触れ合って遊べるような環境をつくることができたか。		

茨城女子短期大学

園の担任とも意見交換をしながらおおよその活動のイメージを固め、学生とともに具現化していった。具現化していく過程では、できるだけ学生同士での話し合いで決めていく部分を大切に、環境の準備等学生が主体的にアイデアを出し合いながら活動できるように心がけた。その中で、教員が作成した指導計画をもとに活動の全体的なイメージをつかんだうえで、具体的な援助を書きたしたり、環境図や準備物を記入したりして自分なりの指導計画を完成できるようにと指導計画を授業内容としている教科でも指導していった。実施後の振り返りのときには指導計画の中の「評価の観点」をもとに考察できるように繰り返し指導するようにした。また、同時に、各担当で相談し、アンケート等も行った。なお、連続しての活動が必要な時（2コマ続けての活動等）には、教員間で時間割を調整するなどの配慮をしてきた。

3. 「いっしょに遊ぼう」の取り組み

下に、平成 23 年度から平成 28 年度までの 6 年間の取り組みの記録の一覧表を記載し、次ページから各回の指導計画並びに活動の様子と学生の振り返りを紹介する。

年度	対象年齢	実施日	活動内容	活動場所
平成 23 年度	3 歳児クラス	H23年 6 月 3 日	動物に変身して探検しよう！	短大芝生運動場
	4 歳児クラス	H23年 6 月 8 日	自分で作ったマラカスで演奏しよう！	短大芝生運動場予定 →幼稚園遊戯室に変更
	5 歳児クラス	H23年 7 月 1 日	段ボールを組み立てて見立てて遊ぼう *指導計画なし	短大体育館
平成 24 年度	3 歳児クラス	H24年 6 月 1 日	ジャングル探検しよう	短大芝生運動場
	4 歳児クラス	H24年 5 月18日	マラカスを作って遊ぼう	芝生運動場予定 →幼稚園遊戯室に変更
	5 歳児クラス	H24年 7 月11日	海の生き物を描こう	短大体育館
平成 25 年度	3 歳児クラス	H25年 6 月27日	カエルになって遊ぼう！	短大体育館
	4 歳児クラス	H25年 6 月19日	お散歩に出かけよう	短大芝生運動場
	5 歳児クラス	H25年 6 月12日	ウォークラリーをして体を動かそう	短大体育館
平成 26 年度	3 歳児クラス	H26年 7 月 3 日	はらぺこあおむしになって遊ぼう	短大芝生運動場
	4 歳児クラス	H26年 5 月 8 日	しっぽをつけて遊ぼう	短大芝生運動場
	5 歳児クラス	H26年 6 月12日	カッパの絵を描こう	短大体育館
平成 27 年度	3 歳児クラス	H27年 6 月12日	幼稚園のいろいろな場所で遊ぼう	附属園
	4 歳児クラス	H27年 5 月 1 日	探検に出かけよう	短大芝生運動場
	5 歳児クラス	H27年 7 月 6 日	ザリガニの池をつくろう	短大体育館
平成 28 年度	3 歳児クラス	H28年 7 月15日	コーナー遊びを楽しもう	附属園
	4 歳児クラス	H28年 5 月20日	スイミーになって遊ぼう	短大芝生運動場
	5 歳児クラス	H28年11月 4 日	段ボール板を組み合わせで大きなものを作ろう	短大体育館

以上の理由から「保育実践演習」を1年次通年科目として開講することにしたが、授業内容としては前半には附属認定こども園（平成26年度までは附属幼稚園。以下附属園）の子どもたちとの交流「いっしょに遊ぼう」を、後半にはそれまでの学習や実習の経験から関心をもったテーマに分かれての活動を中心に計画した。

2. 「保育実践演習」の授業概要と「いっしょに遊ぼう」

「保育実践演習」の授業概要は次の通りである。

回	内 容	回	内 容
1	授業の概要 「いっしょに遊ぼう」について	16	附属園スポーツフェスティバル準備
2	グループ毎の活動（保育を学ぶ基礎）	17	「いっしょに遊ぼう」（5歳児）計画
3	グループ毎の活動（保育を学ぶ基礎）	18	「いっしょに遊ぼう」（5歳児）準備
4	「いっしょに遊ぼう」（4歳児）計画	19	「いっしょに遊ぼう」（5歳児）実施
5	「いっしょに遊ぼう」（4歳児）準備	20	「いっしょに遊ぼう」（5歳児）振り返り
6	「いっしょに遊ぼう」（4歳児）実施	21	「いっしょに遊ぼう」全体の振り返り
7	「いっしょに遊ぼう」（4歳児）振り返り	22	実習について（2年生との交流）
8	附属こども園園外保育下見、計画、準備	23	学習テーマについて（2年生のプレゼン）
9	附属こども園園外保育下見、計画、準備	24	テーマ別学習（2年生との交流）
10	附属こども園園外保育実施（4.5歳児）	25	テーマ別学習（2年生との交流）
11	附属こども園園外保育実施（4.5歳児）	26	附属認定こども園作品展見学
12	「いっしょに遊ぼう」（3歳児）計画	27	テーマ別学習（ゼミナールへ向けて）
13	「いっしょに遊ぼう」（3歳児）準備	28	テーマ別学習（ゼミナールへ向けて）
14	「いっしょに遊ぼう」（3歳児）実施	29	テーマ別学習（ゼミナールへ向けて）
15	「いっしょに遊ぼう」（3歳児）振り返り	30	まとめ 履修カルテ

「いっしょに遊ぼう」は、「保育実践演習」を行う活動として始まった、本学保育科の1年生と同じキャンパスにある附属園の子どもたちとの交流活動である。3歳児クラスから5歳児クラスまでの年齢毎に附属園との相談のもと活動日を決定し、取り組んでいる。実施にあたっては、附属園に「保育実践演習」の目標や「いっしょに遊ぼう」の取り組みの趣旨、内容について説明し、学生にとっても子どもにとっても豊かな経験となるような活動を目指すこととした。附属園からは、日常の保育に関連していること、子どもの育ちに



ていること、活動後に保育の中で生かされるような活動となることなどの要望が出された。学生にとっては、対象となる年齢の育ちを理解し、指導計画をもとに子どもたちが主体的に活動できるような環境を構成し、いっしょに遊びながらさらに育ちを理解し、環境や自分のかかわりについて振り返ることができるような活動にしていきたいと考えた。

具体的には、保育科教員を3グループ（3歳児担当、4歳児担当、5歳児担当）に分け、その担当が中心となり話し合いながら進めていくこととした。担当同士で、また保育科の他の教員や附属

違いを語ることがあった。机上の学習が多いということである。この頃、1年次の教育実習（附属幼稚園での5日間の実習）後に退学を申し出る学生もあり、保育について学びたいという動機を維持させるために、身近に子どもを感じられる（イメージできる）ことが必要なのではないかと考えた。それは、保育という専門科目を学ぶ心構えなども含めた素地をつくるということにも通じる。初年度教育の保育科版のような授業を展開する必要性があるのではないかと考えたのである。

②保育の専門性の構築へ向けて

保育者が保育の現場で直面する多様な課題に適切に対応し、子どもの保育と保護者支援を担っていくためには、より高い専門性が求められる。養成課程では、保育者に必要とされる知識や技術を明らかにしながら、授業内容の充実を図ることが必要である。その第一歩として、保育の基礎となる「子どもの実態の把握→計画→実践→振り返り」のサイクルを体験のなかで実感する必要がある。実習指導並びに保育課程論等で、指導計画や実習日誌（記録）の書き方を指導しているものの、机上での学習になりがちであり、学生にとって「子どもの実態の把握」「計画」「実践（環境の構成等も含めて）」「振り返り」の大切さや方法を実感として納得することは難しい。それを実感できるような機会を確保することが課題となっていた。

③学びの集大成は2年次後期の「教職実践演習」で

「教職実践演習」は、教職課程を設置する大学において「教職に関する科目」として平成22年度の入学生から必修科目となった。履修時期については、「教科に関する科目及び教職に関する科目のすべてを履修済み、あるいは履修見込みの時期（通常は4年次の後期）に設定することが適当である」³⁾ されている。本学保育科では、保育士資格と幼稚園教諭免許の両方取得することを基本としていることを考えると、学びの集大成としての授業内容は、「教職実践演習」に託すことができると考えた。

④入学者数を増加させるための方策として

平成22年度前後は、学生数が急激に減少した時期であった。入学者増加のための方策の一つとして本学保育科の教員に教育・保育・福祉現場経験者が多いという特長を生かし、「演習・実習重視のカリキュラム」や「少人数だからできること」をアピールすることで他校との差別化を図っていきたいという思いがあった。

⑤教員の相互交流から学び合いの機会の創出

大学教員の質の向上については、FD（ファカルティ・ディベロップメント）の重要性が叫ばれ、平成19年に大学設置基準において義務化された⁴⁾。それ以降、急速に大学に浸透し、本学でも実施してきている。しかし、それが現場に即した実質的な学びの場となっているかについては今後考えていかなければならない課題である。公開授業をFDとして実施し効果をあげている大学の報告も見られる⁵⁾が、本学では授業のシラバスを基本とした授業内容紹介が軌道に乗ってきたところであり、公開授業への準備は整っていない状況である。しかし、学科の教員同士が互いの授業内容に関心をもち、情報を交換し、よりよい授業展開を志向していくことが必要であることは言うまでもないことである。「保育実践演習」を、保育科教員全員が関わる科目とし科目横断的な授業を目指すことで、自分の授業の方法や内容を見直すきっかけになるのではないかと考えた。

「保育実践演習」の授業内容の検討

—「いっしょに遊ぼう」の実践を通して—

A report from a course of “Practical exercises for childcare”

:A consideration on a “Let’s play together” activity

神永 直美・佐藤 豊・助川 公継・海野 富江
 角田 雅昭・安藤みゆき・橋本 祥子・馬立 明美
 富田 浩子・長谷部はるか・廣部 朋美

1. はじめに

茨城女子短期大学保育科（以下本学保育科）では、「保育実践演習」（演習2単位）を1年次の通年必修科目として開講している。本稿では、「保育実践演習」で主な授業内容としている「いっしょに遊ぼう」（短大と同じ敷地内にある附属認定こども園（平成26年度までは附属幼稚園）の子どもたちとの交流の名称。以下「いっしょに遊ぼう」）の平成23年度から平成28年度までの取り組みを振り返り、その成果と課題を明らかにするとともに、今後のカリキュラムマネジメントの視点からそのあり方を考える一助としたい。

「保育実践演習」という科目は、平成21年に幼稚園教諭免許取得科目における科目名の変更（「総合演習」から「教職実践演習」へ）に伴い、「総合演習」から「保育実践演習」へと変更されたものである¹⁾。「保育実践演習」の目標には、「1. 保育に関する科目横断的な学習能力を習得する。2. 保育に関する現代的課題についての現状分析、考察、検討を行う。3. 問題解決のための対応、判断方法等について学びを深める。4. 必修科目（保育実践演習を除く。以下同じ）自らの学びを振り返り、保育士としての必要な知識・技能を修得したことを確認する。」の4項目があげられている²⁾。これらの目標から、「保育実践演習」は、保育に関する様々な教科目を学んだうえでさらに自分の学びをメタ的にとらえ、保育士として必要な知識技能を修得したことを確認し、保育士としての自分の意識を高めていくための科目であると言える。

幼稚園教諭免許を同時に取得できる指定保育士養成施設における「保育実践演習」の科目は、幼稚園免許取得科目である「教職実践演習（幼稚園）」と併合し、「保育・教職実践演習（幼稚園）」として2年次の後期に開講している施設が多い（インターネットで、指定保育士養成校であり、幼稚園教諭免許取得も可能な短大の中から無作為に10校抽出しシラバスを確認したところ、すべての施設において「保育・教職実践演習」として2年後期科目であった）。そのような中、本学保育科では改定前に「総合演習」を1年次後期科目として開講していたこともあり、あえて1年次通年科目（演習2単位 30コマ）として「保育実践演習」を、2年次後期科目（演習2単位 15コマ）として「教職実践演習」を開講することにした。「保育実践演習」を1年次通年科目としたのには、次のような理由があった。

①学生の保育について学びたい（保育者になりたい）という動機の維持

入学してしばらくたつと、学生が「入学前のイメージと違う」と保育科の学びのイメージの

- 石野由香里, 2016, 他者を鏡に省察を促すロールプレイの用法, 『体験の言語化』, 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター, pp. 145 - 151.
- 嘉手苅英子・上原綾子・名城一枝・大田貞子・金城 忍・上江洲貴乃・安里葉子, 2004, 看護の概念形成を目的とした初期看護実習の展開方法, 沖縄県立看護大学紀要, (5), pp. 59 - 65.
- 川喜田二郎, 1996, KJ 法－混沌をして語らしめる, 川喜田二郎著作集 5, 東京, 中央公論社.
- 倉橋 惣, 1944, 保育実習指導概要, 幼児の教育, 44 (7), pp. 1 - 3.
- 松田千都・渡邊慶一, 2017, アクティブラーニングを活用した保育実習事後指導－保育実習 1 の学びを促進する協同学習の取り組み－, 京都聖母学院短期大学研究紀要, (46), pp. 32 - 46.
- 益満孝一, 2004, 精神保健福祉援助実習生支援のあり方についての研究, 九州看護福祉大学紀要, 6 (1), 231 - 241.
- 長宗雅美・寺島義保・小野香代子・山田進一・黒葛原健太郎・安井夏生・高塚人志, 2008, 現代 GP「医療系学生の保育所実習による子育て支援」－乳幼児との継続交流における体験型コミュニケーション授業実施報告と終了時の評価, 大学教育ジャーナル, (5), pp. 105 - 115.
- 中村雄二郎, 1992, 臨床の知とは何か, 岩波書店, 岩波新書, 136p.
- 中津郁子・岡木理恵, 2010, 臨床心理を学ぶ大学院生における保育実習の意義について, 鳴門教育大学紀要, (25), pp. 73 - 87.
- 西 隆太郎・伊藤美保子, 2013, 実習生とともに保育を考える, 保育士養成研究, (31), pp. 105 - 114.
- 太田早津美・上村晶・勝浦眞仁・加藤信子・青木文美・加藤望・水落洋志・上田敏, 2016, 保育士養成校におけるアクティブ・ラーニング活用の実態と課題に関する研究, 全国保育士養成協議会第 55 回研究大会研究発表論文集, p. 114.
- 音山若穂・利根川智子・井上孝之・上村裕樹・三浦主博・河合規仁・安藤節子・和田明人, 2012, 保育者養成における実習指導への対話的アプローチの導入に関する基礎研究, 群馬大学教育実践研究, (29), pp. 219 - 228.
- 佐藤 学, 1997, 教師というアポリア, 世織書房, pp. 13 - 15.
- 就実大学・短期大学アクティブラーニングワーキンググループ, 2015, 就実大学・短期大学におけるアクティブラーニングワーキンググループの取り組み報告, 就実論叢, (44), pp. 275 - 289.
- ション, D. (佐藤学・秋田喜代美, 訳), 2001, 専門家の知恵－反省的实践家は行為しながら考える, ゆるみ出版.
- 谷口直隆, 2010, コミュニケーション教育における演劇的活動の意義と可能性－目標と方法の対応という観点からの一考察, 国語教育思想研究, (2), pp. 11 - 20.
- 徳島大学大学院ヘルスバイオ研究部医療教育開発センター, 2007, 医療系学生の保育所実習による子育て支援～医療職(医師, 看護師)を目指す学生の人間力を高める, 初年度取組成果報告書Ⅱ.
- 津守 真, 1989, 保育の一日とその周辺, フレーベル館, pp. 76 - 77.
- 津守 真, 1997, 保育者の地平, ミネルヴァ書房, pp. 293 - 294.
- 津守 真, 2002, 保育の知, 教育学研究, 69 (3), 特集 教育における臨床の知, pp. 357 - 366.
- 田垣正晋, 2001, 障害者人生と語り, やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編), カタログ現場心理学－表現の冒険, 金子書房, pp. 52 - 59.
- 上村裕樹・音山若穂・井上孝之・三浦主博・和田明人・織田栄子・京免徹雄・利根川智子, 2015, 教育・保育における対話型アプローチの取組み, 帯広大谷短期大学紀要, (52), pp. 19 - 29.
- 和田明人・君島昌志・青木一則・米山珠里・日野さくら, 2013, 保育者養成におけるアクティブ・ラーニング, 東北福祉大学研究紀要, (37), pp. 57 - 71.
- 和栗百恵, 2010, 「ふりかえり」と学習－大学教育におけるふりかえり支援のために, 国立教育政策研究所紀要, (139), pp. 85 - 100.

V 最後に

太田ほか（2016）は、全国保育士養成校協議会研究大会の研究発表論文集に掲載された過去 10 年間の「授業研究」の研究発表において、アクティブラーニングの出現割合が増加傾向にあることを報告している。松田・渡邊（2017）は、各養成校の実習事後指導の事例をレビューし、アクティブラーニングを活用した事後指導の効果について述べている。

このようにアクティブラーニングについての論文は急増しているが、アクティブラーニングの説明概念や用語は新しいものであっても、その内実となる個々の教育手法そのものは、決して新しいものでない（和田ほか、2013）。そのアクティブラーニングが、今、あらためて注目されているのは、「教員が何を教えたか」ではなく、「学生が何をできるようになったのか、何を得たのか」という〈学習者中心の教育〉が、大学教育改革の流れと呼応しているからである。本論で、学生の振り返りシートを丹念に検討したのも、報告会で学生が何を得たのかを教員が振り返ることが重要であり、今後の授業実践に反映させていくためである。

アクティブラーニングの論文が急増した契機といえるのが、2012 年の中央教育審議会の答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』であると述べられている（就実大学・就実短期大学アクティブラーニング・ワーキングチーム、2015）。この答申には、「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」との副題がつけられているが、生涯続く学びの起点となることが大学に求められ、それを実現する教育として、アクティブラーニングに注目が集まっていると考える。

安藤ほか（2016）は、ポスター発表のタイトルの副題を「実習の集大成〈伝える〉学びの双方向性」としたように、「実習報告会は、実習の集大成。報告会が終わるまで、実習は終わっていない」と学生に呼びかけていた。実習における振り返りの重要性を伝えたかったからである。報告会終了後の 2 年生の振り返りシートには「実習を振り返ることができ、自分にとって良いスタートになった」といった将来に向けての記述が多くあり、実習体験が報告会で閉じられてしまうのではなく、振り返りによって未来に開かれていることを感じた。

アクティブラーニングへの関心の高まりとともに、リフレクティブ・ラーニングの必要性及び有効性を検証する研究も蓄積（和栗、2010）されてきている。その中に体験的な学習を推進する早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）の「学生の心に火をつけるふりかえり」についての試みがある。本学における実習報告会における振り返りは、果たして、学生たちの心に火を灯すことができたのだろうか。

実習報告会の活動が、ひいては本学での学びのすべてが、学生たちにとって、保育者として生涯続く学びの、口火を切るもの（起点）であってほしいと願ってやまない。

VI 引用文献

- 安藤みゆき・清水浩子・海野富江，2016，実習報告会におけるアクティブラーニング—実習の集大成〈伝える〉学びの双方向性—。全国保育士養成協議会第 55 回研究大会研究発表論文集，p. 109.
- 安藤みゆき・清水浩子・海野富江，2017，実習報告会におけるアクティブラーニングの実践—実習事後指導の在り方を探る—。日本保育者養成教育学会第 1 回研究大会プログラム・抄録集，p. 99.
- 石山貴章・安部 孝・田中 誠，2010，保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）—実習事後指導を通じた「自己評価」と「気づき」に関する分析から—。九州ルーテル学院大学紀要，（40），pp. 59 - 72.

くらいの時間で書けますか?」,「施設実習で宿題を教えてと言われても、できなかったときはどうすればいいですか?」など、本当にいろいろなことを心配していて、実習に行く前の学生の心細さ、切実な不安が伝わってくるようであった。それらについて2年生たちは、非常に丁寧に対応してくれていた。1年生のアンケートには、「もっと個別の質問の時間が欲しかった。3か所ぐらいしか回ることができなかった。」といった意見もあった。全体発表と個別説明の時間の配分も今後の課題である。

4) 情報の個別性に対する配慮

2年生の運営方法のアンケートに「指導案は園によって形式が全然違うので、発表してしまうと逆に1年生が戸惑ってしまったかなと思った」というものがあった。指導案や日誌など、実習先によって、実習生に求めるものは確かに違う。報告会の発表内容が、その学生個人、または、その学生の実習先での考え方であって、それが一般的な考え方と違う場合もある。2年生が1年生に情報を伝える時も、「これは個人的な考えだけれども」、「私の実習先では」といった前置きが必要なこともあるだろう。

1年生のために、具体的な情報を伝えることはとても良いことであるが、それは、数ある方法のひとつであるということも伝えることが必要であったと感じた。

4. 学生とともに学ぶ

実習報告会の活動の中で、筆者ら教員も学生たちの振り返りの輪の中にはいり、学生の実習体験をともに振り返ったり、自らの指導を振り返った。子どもとどのように信頼関係を結べば良いのか、子ども同士のトラブルにはどのように対応すればよかったのかなど、実習生が抱く疑問は、保育の本質を改めて考えさせられるものもある。津守(2002)は、実践の不確実性について、保育者が心を決め、心を通わせて子どもと出会い、子どもの表現を読み、それに応答していくのであって、公式を当てはめるわけにはいかない、実に主体的な行為である、と述べている。さらに、佐藤(1997)の、保育に従事するならば「不確実性」を自らの仕事の宿命として受け止めなければならないという言葉を紹介し、この不確実性こそが実践の性格であり、それを持ちこたえるだけの自我を育てることこそが、保育・教育全体の課題であると述べている。

「不確実性を持ちこたえる自我を育てる」とは、難しい命題であるが、筆者ら教員も、ひとりの「反省的实践家」(ショーン、2001)として、自らの実践に向き合い、振り返り、捉え直し、自らを成長させていくことが求められていると考える。

また「不確実性」と向き合うことが重要である一方で、「子どもを大事にする、子どもの命を守る」という揺るがないものがあることも忘れてはいけないと考える。倉橋(1994)は、実習指導の根本にあるのは、何よりも子どもという存在の大切さを、概念ばかりでなく、実体験を通して実習生が理解することだと指摘している。学生が、子ども(利用者)という存在の大切さを実習体験として学ぶためには、教員が普段から保育への理解や思いを深め、それを実習生、実習現場、教員間で伝えあうこと(西・伊藤、2013)が必要ではないだろうか。

その人の良さや、自分に足りないところを得ることができて良かった」と話していた。チーム保育に求められる協調性を育むことができたと考える。

課題としては、2016年度から、1グループの人数を5名以内にすることでグループ数は増えて、18グループになり、全てのグループの発表に時間がかかるようになってしまったことである。一方で学生からは、寸劇などをやるには、1グループの発表時間が5分というのは、短すぎるという意見もあった。グループの数を減らす検討も必要かもしれない。しかし、1グループの構成人数を多くしてしまえば、一人ひとりの主体的な活動が減ってしまい、一部の学生だけが活動するようになってしまう。今回は、5人だったので、一人も手を抜くことなく、全員で協力していた。

学会発表のポスターセッションで得た意見としては、1学年の人数が少ない大学だからできる試みではないかとのことであった。本学も、来年度より定員が増えるので、検討し直さなくてはならないだろう。

2) ポスター製作・資料のスライド、冊子

運営方法のアンケートで1年生から多くあった意見は、2年生の発表を聞く時に、手元に資料があるとわかりやすいし、施設ごとの情報を冊子にしてもらえれば、実習前に読み返すことができるというものだった。また、ポスターをビデオで映すと、見にくいので、スライドにして映してほしいという意見もあった。これは、同様な意見が2年生からもあり、ポスターを作らず、パワーポイントで作ったスライドを映した方が良さだろうとのことだった。

確かに、ポスター製作の作業は時間がかかり効率的ではなく、その時間も振り返りの話し合いに集中したり、冊子作りの時間にあてた方が良いのではないかとの意見は担当教員からもあった。

しかし、学会発表のポスターセッションで、ある養成校から、実習報告会をパワーポイントを用いた口頭発表形式で実施しているが、パワーポイントのスライドは、結局一人だけが作り、あとは見ているだけになりがちであるので、みんなでポスターを作るという、このグループワークはとても良いとの意見も得られた。その養成校では、今では手書きの資料を投影機で拡大して映しているという。パワーポイントでつくったスライドで発表するよりも、盛り上がるからとのことであった。また、ある養成校からは、「見て楽しい、読んで役立つポスター」が報告会後も校内に掲示されているというのがとても良いとの意見があった。また、1年生の中には、実習を全部やり切った暁には、どのようなポスターを作ろうかと、すでに楽しみにアイデアを練っている学生もいる。

2年生の振り返りシートの記述の考察のところでも触れたが、このポスター製作の作業の時間も意外と面と向き合って語りあうよりも話しやすく、振り返りが深まった面もあるようであった。以上を踏まえ、ポスター製作、資料作りは、限られた授業時間の中でどのように取り組むのかは、今後の課題である。

3) 二部構成・個別の時間

2016年度から、全体発表の後に個別にグループの説明を受ける時間を設けたが、学生たちのアンケートではとても好評であった。

個別の時間で、1年生からどのような質問を受けたのかについてもアンケートで聞いているが、「実習中、トイレはどのタイミングでいけばいいですか?」、「水は飲みますか?」、「日誌は、どれ

4) 「実習体験の再構成」

振り返りシートに、「辛いことの方が多かったのですが、学びがたくさんあったと改めて思い出し、忘れないようにしたいと思いました。」と記述していた学生がいた。仲間と振り返ることで、ただ辛かっただけの実習ではなく、様々な学びがあったことを思い出し、自らの実習体験を再構成して、記憶に定着させ、次に活かしていこうとしている姿勢が感じられる。

和栗(2010)によれば、Moon(2004)は、振り返りは学習者自身が自らの知識や体験などを見つめ意味を構築するプロセスを作り出す、と述べているが、実習体験が、自分にとってどのような意味を持つものになるのか、その意味は、振り返りによって見いだされていくということであるのだろう。

養成校の学生にとって、実習は資格取得のためのものであるが、そのことが時には、学生に実習体験の持つ意味を矮小化させてしまうこともあると感じる。医師を目指す学生に、「人間力」や「コミュニケーションスキル」を獲得させるために、「保育所実習」を実施するという試みがある(長宗ほか、2008; 徳島大学大学院ヘルスバイオ研究部医療教育開発センター、2007)。また、臨床心理士を目指す大学院生にも、共感的理解や受容的態度、想像力を育む訓練として保育所実習を課している試みもある(中津・両木、2010)。それらの実践は、養成校の教員や学生に、保育実習そのものの意味を再認識させてくれる。

特に施設実習は、一生懸命に生きている子どもたちや利用者の方々の人生の一端に触れる体験である。その体験を振り返り、学生自らの人生に意味づけしていくことが、実習生を受け入れてくれた子どもや利用者への誠実な態度といえるだろう。そのためにも、体験を体験のままに終わらせず、体験からの学びかたを学ぶ(嘉手苅、2004)ことが大切だといえる。

3. 本学の実習報告会の実践について

本学の実習報告会は、学生主体のものであり、学生の意見を反映しながら改善していきたいと考えているので、報告会の振り返りとは別に、運営方法についても1、2年生にアンケートを実施している。また、実習報告会の概要は、その一部を「全国保育士養成協議会第55回研究大会」(安藤・清水・海野、2016)、「日本保育者養成教育学会第1回研究大会」(安藤・清水・海野、2017)において発表しており、ポスターセッションの参加者との情報交換により、本学の実践における特徴の再確認や今後の課題の検討などを行っている。それらの内容を踏まえ、筆者ら担当者が実習報告会を振り返った内容と、今後の課題を以下に示す。

1) 学生のグルーピング

学生のグルーピングを教員が行ったことも、今回のグループワークの成功の要因のひとつであったと考える。学生の個別の振り返りシートの内容を読み込み、実習先の評価も参考し、さらに学生の特性も考慮し、それぞれのグループの力が偏らないようにしながら、筆者ら担当教員で話し合いながら、83名を実習先の種別ごとにグルーピングするので時間はかかる。しかし、学生が主体のグループワークではあるが、より高い効果を得るためには、教員側の用意周到な準備が必要ではないだろうか。

ある学生は「2年間の短大生活の中で、一度も話したことの無い人と同じグループになったが、

2) 「伝えたいという想い」

振り返りシートには、「1年生に分かりやすくまとめることで、自分でも実習で学んだことを整理することができた。」「自分が苦勞したことを後輩にうまく伝えようと試行錯誤したことで、改めて自分の苦手な部分に気付くことができた。」との記述があった。1年生にわかりやすく、伝えるためには、自分の体験や思いを掘り下げて、適切な言葉に表現しなくてはならない。この掘り下げる作業が振り返りを促進させた要因の一つになったのではないと思われる。

また、自分たちが1年生だった時のことを思い浮かべ、後輩たちが少しでも実習で困らないようにと、前向きな気持ちで実習に臨めるようにと、心を砕くその姿は教員の心も動かすほどであった。

その2年生の気持ちが、1年生にも伝わったのは、次の1年生の振り返りシートによってわかる。「どの先輩からも、1年生に『実習を頑張ってほしい、やり切ってほしい』という思いや応援してくれる気持ちがとても伝わった。」「どのグループの先輩も、私たちのために、熱心に質問に答えてくれたり、こんなことがあったと具体的に教えてくれて、ためになった。」「少しの質問でも丁寧に掘り下げて教えてくれたから、すごくわかりやすかったし、ありがたかった。」

本学は短大なので、本格的に外部実習に行く頃には、アドバイスしてくれる先輩はもう卒業しており、4年制大学のように、先輩から後輩への伝達は難しい。しかし、自分の体験を誰かのために役立てたいと思うのは、人間の本能的なものなのではないだろうか。実習に関するスキルや実習に対する思いを、後輩に伝えていくという文化をこの報告会により本学に定着させていくことが重要であると考ええる。

3) 「他者を鏡として自己を知る」

2年生の振り返りシートに「他の施設実習の寸劇を見て、私もあのように対応できたら良かったのかなと、自分の反省点を見つけることができた。」との記述があった。先にも述べたが、1年生も2年生の寸劇を見ることで、挨拶や笑顔の大切さについて自分を振り返り、学んでいた。1、2年ともに、報告会で寸劇を見たことにより、他者を鏡として自分を見つめ、振り返りを深めていたと考える。

谷口（2010）は、「コミュニケーション教育における演劇的活動の意義と可能性」の中で、平田オリザの演劇を用いたコミュニケーション教育を紹介し、「演劇的活動は、自身のコミュニケーションを振り返るための効果的な措置」であり、「自身のコミュニケーションを相対化して考えることができる」と述べている。また、石野（2016）は、「他者を鏡に省察を促すロールプレイの用法」の中で、「振り返り（reflection）の語源である reflect には、反射するという意味がある。」とし「他者を鏡にして、自己を知る、つまり他者を鏡として気づきを得る」ことの重要性について述べ、「物理的な鏡に映る自分は、どこまでも自分でしかない。しかし、他者を鏡とした時の自分は、自分の中に他者を見、他者の中に自分を見ることで、他者という可能性に開かれた気づきを得ることができる。気づくだけでなく、自分に要素を認め、取り入れることによって、飛躍の可能性に開かれた鏡となる」と述べている。

実習事前授業でのロールプレイ導入の検討は先にも述べたが、事後指導としての実習報告会でも、演劇的な手法による振り返りは非常に効果的ではないかと考える。

これこそ、アクティブラーニングの醍醐味であり、アクティブラーニングの大きな特徴は、言語による伝達を超える側面を多分に包含している（和田ほか、2013）ところにある。

メラビアン¹の法則にもあるように、コミュニケーションにおいて、視覚情報や、聴覚情報などの方が、言語情報よりも、圧倒的に多く相手に影響を与えている。報告会での2年生の発表している姿や寸劇をみることで、ノンバーバルの伝達の力を体験として学んだのであろう。

2. 2年生の振り返りシートについて

1) 「対話の力」

ワールドカフェなどの手法を用いた対話的アプローチが、保育（実習）の省察を深めるという先行研究（上村ほか、2015；音山ほか、2012）があるが、本学の報告会の活動でも、グループでの振り返りの話し合いやポスター製作をしながらの対話により、振り返りが深められたことが推察される。

振り返りシートには、「他の人の話を聞きながら自分の体験したことや考えたことなどを思い出し、他の人に話すことで意見・感想をもらい、自分だけで反省した時より深い振り返りができて、成長したように感じる。」といった記述があった。体験したことの意味を、同じように実習した仲間の発言からの照り返しにより気づいたり、体験を言語化して仲間に伝えようとすることによって、振り返りが深まっていったと思われる。

「施設実習が終わった後に、すぐに幼稚園実習、またそのすぐ後に就職活動が始まり、あまり振り返ることができなかったが、友達と話す中で、実習中の自分と向き合うことができた。」といった記述もあった。本学は、施設実習が終わった数日後には幼稚園実習が始まり、幼稚園実習が終わった次の日から後期の授業が始まり、その日から一気に就職活動が始まっていく。そのような慌ただしい日々の中で、報告会のグループでの振り返りで、やっと実習中の自分に向き合えたという学生もいたであろう。また、「日誌を書く時に、毎日その日の実習を振り返っていたが、時間をおいて、こうしてみなでもう一度実習について振り返ると、違うことに気が付くこともあった。」といった記述もあった。自分だけで振り返る内容と、仲間と振り返る内容が違うのは当然であろうし、また、実習直後の振り返りと数か月たったの振り返りでも、やはりその内容が違うのであろう。いずれにしても、報告会の活動の振り返りにより、多層的、多面的な振り返りが行われたといえる。

さらに、振り返りシートに「友達と実習を振り返っていたら、実習中、どんなことをしたのか、その時、どんな感情がでたのか、どんどん思い出した。」「友達と話しているうちに、実習での出来事など、様々な場面が思い浮かび、振り返りができたと思う」との記述があったが、仲間と語り合っている中で、心が動かされ、相互作用がおり、その時の感情がよみがえり、振り返りが深まった瞬間があったのではないだろうか。

西・伊藤（2013）は、津守（1989）による省察の瞬間は、「向こうからやってくる」の言葉を引用しながら、「子どもと出会った体験の感動が、われわれの心を省察へと促す」と述べている。報告会のグループでの振り返りは、ポスター製作、発表原稿作成、それらの作業も合わせると4コマを費やしたが、作業しながらの対話の中で、実習中の子どもの表情やしぐさが思い出され、感情が動き、振り返りを深められたのでないかと考える。

て聞けた。」「絵本や紙芝居、手遊びや導入の仕方の実演がどれもすごいと思うものばかりで自分もできるようになりたい。」「風船運びゲームの主活動の導入に、バルーンを作って見せる実演などで、主活動の導入の仕方や主活動の展開が具体的に分かり自分もできるようになりたい。」「誕生日会のペットボトルを使ったマジックの実演が良かったので、自分も子どもたちを引き付けるものをいろいろ工夫したい。」等の記述や、「今のうちにどのようなことを頑張ればいいのかという目標を明確にできて良かった。」「自分の足りないところ、努力しなければいけないところが見えた。」といった記述もあり、実習までの目標、実習でやってみたい事などがイメージできたことが推察される。

4) 実演を見ることによって、得られる「気づき」や「学び」

挨拶の大切さは実習指導の授業で何回も伝えているつもりではあるが、実習先からの学生への評価に、「挨拶ができない」とか「積極性が足りない」などと書かれることも多い。今回の実習報告会で、とても参考になったと振り返りシートに多く記述されていたのが、「挨拶の良い例、悪い例を実演した寸劇」と、「忙しそうに働いている先生にどのように声をかけるかという設定の寸劇」で、実習先の先生役、実習生役、子ども役を2年生がそれぞれ演じたものだった。

「挨拶は、いつもどういうふうにすればいいのか悩んで不安しかなかったが、先輩が、寸劇で良い例と悪い例をやって見せてくれたのがよかった。」「実習先の先生が忙しそうにしている時に、どのように声をかけ手助けすればいいのか寸劇で実演して教えてくれたので、次からは、先生に自分から声をかけてみようと思えた。」などがあり、「挨拶」や、先生への声かけに悶々と悩んでいた学生もいたことに気づく。また、「雑で適当な挨拶や、自信のない挨拶では、自分では、挨拶しているつもりでも、相手に挨拶していることが伝わらないことがあるのだということに気づき、自分の挨拶を振り返ることができた」と記述していた学生もいた。実習の心構えとして、挨拶をしっかりすることが大切と授業で言えば、学生が挨拶をするようになるというほど単純なことではないと深く反省させられる。

その他、「主活動に入る前の導入の良い例、悪い例も演技でわかりやすく説明してくれて参考になった。」「実習生だと甘えが出て、子どもはなんでもやってもらいたがるけれど、難しい所だけ援助して、なるべく自分でやるように促すことの大切さが実演でわかった。」という振り返りシートの記述もあり、2年生の実演から、1年生が多くのことを気づき、学んでいたということがわかる。それらを踏まえ、実習事前指導の授業では、積極的にロールプレイなどを取り入れるなどの工夫も必要なのではないかと考える。

5) 言葉による伝達を超えるものによって学ぶ

実習報告会での臨場感の中で、言葉だけでなく表情の重要性を体験として学んだ学生も多かった。振り返りシートには、「自己紹介の実演の時の先輩の笑顔が素敵で、笑顔って大切だと改めて感じることができた。」「発表している方が楽しそうにしていると、見ている方も楽しく前向きな気持ちになれるのだと思った。」「先輩が楽しそうに話していると説得力がある。」との記述があった。実習の苦勞の先にある「成長した自分の姿」も、先輩たちの充実感や達成感に満ちた表情といった非言語的な伝達の力により思い描いている部分も多いであろう。

動)や〈受苦〉によってであることが、よく示されている。

実習体験は楽しいものだけでない。「実習を途中でやめたいという思いが頭をかすめたことはあるか」と、実習を終えた2年生に筆者のゼミナールで聞いてみたところ、3分の1以上の学生が手を挙げた。報告会に参加した1年生もすでに5日間の幼稚園実習を体験し、これからの本格的な外部実習に対して不安感を抱えていた学生も多い。しかし、報告会で2年生の話を聞き、前向きな気持ちになれたことが先のアンケート結果(図1)や振り返りシートの内容から推察することができる。

一般に実習生は、慣れない環境の中で「自分はだめだ」と悲観的になりやすい。しかし、自分だけではない、先輩たちも不安だったが乗り越えられたと思うと、自分が悩みを抱えながらも専門職として工夫しながら成長するという視座を得ることができ、苦難がある道も歩み出せる(益満、2004)。

しかし、一方で、先に示した実習報告会後のアンケート結果(図1)では、「前より実習が不安になった」と答えた学生が3%いたことも心に留めておかななくてはならない。振り返りシートには、「とても参考になったが、来年の今ごろは先輩方のようにできるのか不安にもなった。」との記述もあり、先輩たちが輝かしく見えれば見えるほど、不安に駆られてしまうのであろう。

また、「これからの実習は、もっと厳しく大変なんだと分かった。実習が辛くてリタイアする人もいると聞いていたことがあったが、自分もリタイアしないか不安だ。」「たくさんの気持ちでいっぱいになってしまった。ひとつひとつこなしていきたい。」との記述もあった。実習報告会は、保育所実習、施設実習、幼稚園実習の報告を全て一度に実施するので、そこでの言語、非言語の多くの情報に圧倒され、不安な気持ちに駆られてしまうのもやむを得ない。先にも述べたが、大切なのは、不安な気持ちは誰にでもあるがそれは乗り越えられるものなのだ、という見通しを持てるような実習事前指導の授業の工夫であると考ええる。

2)「施設実習への理解」について

先に示したアンケート結果では、「施設実習についてイメージできましたか?」の問いに対して、89.5%の学生が「イメージできた」、または「ほぼイメージできた」と回答している(図2)。幼稚園、保育所(園)は、ほぼすべての学生がどちらかを子ども時代に経験しており、さらに1年生は、実習報告会までに、短大付属の保育園で2日間の実習体験、短大付属の認定子ども園で5日間の教育実習を経験している。それに比し、児童養護施設等は、経験したことがない学生がほとんどなので、イメージするのは難しいであろうが、振り返りシートの記述からも、今回の報告会によって施設実習への理解が進んだことが推察される。

3)「技術目標」について

実習におけるピアノや手遊びの重要性は、教員らが何回もいろいろな授業で話してきたことだが、報告会では、1年生たちはまるで初めて聞くかのように目を輝かせて納得しており、教員が多くを語るより、先輩の一言や実演が説得力を持つことを実感する。

振り返りシートには、「50日間の実習を終えた先輩たちのお話には、重みがあり、緊張感を持っ

○自分が行っていない施設の話がすごく参考になったし、他のグループの発表も聞くことができて勉強になった。

5)「今後への意欲」

- 1年生に伝えることにより、実習を振り返ることができ、自分にとって良いスタートになった。
- 改めて施設実習での出来事を思い出して、また、頑張ろうと思うことができた。
- 友達の意見や実習の事を聞き、あの時、もっとこうしていたらよかったのかなど、これからに向けての振り返りができた。
- 皆の指導案や子どもへのアプローチの仕方の話が聞けて、自分は1年生に伝える立場だったけど、すごく、勉強になった！風船の導入とか、ぜひ実践してみたい。
- 友達の実習の話が聞けて自分に足りない所や真似したいところなど、将来につなげられる振り返りができた。

6)「実習体験の再構成」

- みんなと話すことで、実習が良い経験になったと改めて感じた。
- 実習中に実施したことを皆に教えたり、楽しかったこと、大変だったことなど思い出し、実習が、自分にとってとても良い経験になったと改めて感じた。
- 辛いことの方が多かったのですが、学びがたくさんあったと改めて思い出し、忘れないようにしたいと思いました。
- 実習中は辛くて終わった後は「終わった！」という解放感しかなかった。でもこうやって改めて振り返ると、一生懸命子どもとかかわっていた自分がいた。自分の自信にしたい。

IV 考 察

1. 1年生の振り返りシートについて

1)「自分の将来像・実習への意欲」について

振り返りシートの記述から、1年生は、実習の苦勞を乗り越えた先にある「成長した自分」を、2年生の姿から思い描き、実習への意欲に結びつけていることが推察された。報告会での先輩たちの話にはドラマがあり、その「物語」を聞きながら、自分たちの「物語」も組み立てていこうとしているようだった。「実習中は辛くても・・・あの実習があったから今の自分があると思えるようになるんだと思った」という記述があったが、先輩たちの姿から、実習中の苦勞のすべてが、自分の成長に結びつくのだというメッセージを受け取っていた。

教員として、学生たちが実習を一つひとつ経験するたびに成長していく様は、目の当たりにしてきたことであるが、中村（1992）は「臨床の知とは何か」の中で次のように述べている。

《ひとは経験によって学ぶ》という諺はほとんど世界の至るところに見いだされると言っているが、この諺は、ギリシャ語では、《TA PATHEMATA, MATHEMATA》、直訳すれば《受苦せしものは学びたり》という言い方で言われている。つまりここには、ひとが〈経験によって学ぶ〉のは、ただなにかを体験するからではなく、むしろそこにおいて否応なしに被る〈受

○障害者施設の実習は大変だけど、職員の人たちは優しく、利用者の方と会話したり、会話できなくても気持ちが通じて楽しいよと言っていたので、施設実習は、大変だけどやりがいがあるのだと思った。

3. 2年生の振り返りシートの記述内容 (2016 年度)

83 名の実習報告会の振り返りシートの内容を検討した結果、振り返りの質が深められた要因として、1)「対話の力」、2)「人に伝えたいという想い」、3)「他者を鏡として見た時の自分」をあげることができる。また、そのような振り返りや報告会に参加して得たものとして、4)「新しい知識・経験の共有」、5)「今後への意欲」、6)「実習体験の再構成」の3つを見出すことができた。

1)「対話の力」

- 他の人の話を聞きながら自分の体験したことや考えたことなどを思い出し、他の人に話すことで意見・感想をもらい、自分だけで反省した時より深い振り返りができて、成長したように感じる。
- 施設実習が終わった後に、すぐに幼稚園実習、またそのすぐ後に就職活動が始まり、あまり振り返ることができなかったが、実習を振り返りながら友達と話す中で、実習中の自分と向き合うことができた。
- 友達と話しているうちに、実習での出来事など、様々な場面が思い浮かび、振り返りができたと思う。
- 同じような体験をした仲間と振り返ると、実習中、どんなことをしたのか、その時、どんな感情がでたのかどんどん思い出した。
- 日誌を書く時に、毎日その日の実習を振り返っていたが、時間をおいて、こうしてみんなでもう一度実習について振り返えると、違うことに気が付くこともあった。とても、貴重な時間だった。
- 実習を一緒に行った仲間と、利用者さんとどのように関わったか、どんなエピソードがあったかなど振り返ることができた。「私はこの時～したよ」など意見交換をする中で振り返りができた。

2)「人に伝えたいという想い」

- 1年生に分かりやすくまとめることで、自分でも実習で学んだことを整理することができた。
- 自分が苦労したことを後輩にうまく伝えようと試行錯誤したことで、改めて自分の苦手な部分に気付くことができた。
- 実習内容や施設の様子を伝えるために、考えながら作業をしたので改めて振り返ることができた。

3)「他者を鏡として見た時の自分」

- 他の施設実習の寸劇を見て、私もあのように対応できたら良かったのかなと、自分の反省点を見つけることができた。

4)「新しい知識・経験の共有」

- 他の施設の実習と比較することで、自分の実習のことを、もう一度違う角度から考えることができた。自分の実習先の特徴なども理解できた。

- 実習先によって全然違うので、オリエンテーションの時に、質問することを前もって、決めておき、しっかり聞いてくることの大切さを確認した。
- 忘れものをした時は、勇気をだしてきちんと言うこと。
- どのグループの先輩も挨拶が大事と言っていたので、しっかりとできるようにしたいと思う。
- 子どもと遊びながらも、先生の動きを見る、当たり前のことかもしれないけど、改めてその大切さを先輩の寸劇を見て感じた。

4)「施設実習への理解」

- 未知で不安しかなかった施設のイメージが、質疑応答の時に、「施設は温かい所」や「家庭のような場所」など、たくさん説明していただき、前向きになれた。
- 施設は、「もうひとつの家」と言っていた先輩の言葉が心に残った。
- 児童養護施設の発表で、「実習をさせていただくという気持ちで取り組む」という言葉が印象に残り、前向きな気持ちになれた。
- 児童養護施設の実習がだいたいイメージできるようになった。(特に宿泊実習)
- 児童養護施設と乳児院の話を聞いて、施設に少し暗いイメージを持っていたが、明るいイメージに変わった。とてもやりがいがあったと聞いて、早く実習に行きたいと思った。
- SIDS(乳幼児突然死症候群)について学ぶことができた。乳児院では子供たちが寝ている間に、顔に布団がかかっていないかをオムツはどうなのかを確認することが大事だと学んだ。
- 乳児院のグループの先輩が全員笑顔で話していたので、実習にも楽しさがあるのだと思った。
- 子どもたちに自分のコンプレックスを言われたときの対処法の実演が参考になった。
- 料理から洗濯までやる。家事はできるようにしておいた方がいいことがわかった。
- 子どもとテレビを見ててもいいよと言われても、先生が洗濯物を取り込んでいたら、たたむの手伝う。率先してやることが大切。
- 勤務時間が不規則、施設ごとに実習の時の服装が違うことがパフォーマンスでわかった。
- 児童養護施設は、子どもたちとテレビを見ることも多いから、話題作りにドラマなど見ておいた方が良いというアドバイスが参考になった。
- 宿泊実習は、夕飯が早く日誌を書いている時にお腹が空くので、お菓子やパンを持っていくと良いなど、実際に体験した先輩だからわかるような細かいことが、とても参考になった。
- 児童養護施設の高校生との接し方が不安だったので、話が聞けてよかった。
- 乳児院の「巣立ちの会」(子どもが退所するときの会)の話が印象に残った。職員は愛情をこめて子どもたちを育てているからこそ、嬉しいけれど寂しいのだなと思った。
- 重症心身障害児者の支援をしている施設に行った先輩が、「生きているって、こういうことなんだなあと感じた」という言葉が、胸に響いた。
- 施設実習に不安があり本当にできるかと思っていたが、命の大切さを感じたという先輩の言葉に、人と人とのつながりの深さや大切さを感じ、頑張ろうと前向きになれた。
- 利用者の方にはこだわりが強い方などがいること、そんな利用者の方とのかかわり方について教えてもらった。わからないことは担当の先生に聞くとやさしく教えてくれると聞いて安心した。
- 障害者施設へ行った先輩たちから「大変でも嫌にはならなかった」と聞き驚いた。

○先輩が楽しそうに話していてやりがい伝わり、前向きになれた。

2) 「技術目標」(実習までにできるようになりたいこと、実習で実践したいと思ったこと)

- 実習指導以外の授業で作ったパペットやペープサートが、こんなふうに導入に使えるという事がわかったから、自分も取り入れたい。
- 保育園などではどのタイミングでもいろいろな曲を弾けるようにしておくこと。童謡だけでなくアニメの曲も練習しておくといいと聞いたので練習しておこうと思った。
- 手遊びをする時は、自分で思っているよりも大げさにやると、子どもたちも楽しんでくれることや、実際に子どもたちに人気のある歌や手遊びがわかってよかった。
- 絵本や紙芝居、手遊びや導入の仕方の実演がどれもすごいと思うものばかりで自分もできるようになりたい。手遊びをたくさん覚えておくことの大切さを改めて感じた。
- 主活動の導入の仕方や主活動の展開が具体的に分かり自分もできるようになりたい。(風船運びゲームの主活動の導入に、バルーンを作って見せる実演など)
- 誕生日会のペットボトルを使ったマジックの実演が良かったので、自分も子どもたちを引き付けるものをいろいろ工夫したいと思う。
- 絵や工作が苦手なのでどうしようと思っていたが、折り紙をやるのもありと聞いて、折り紙をいろいろと折れるようになろうと思った。また、ピアノや歌、手遊びなど、子供たちにやってみて、できないと言わなくてすむように、練習しておきたい。
- 食事は、好き嫌いをなくし、早く食べられるようにしておく。
- 子どもは、実習生だと甘えが出て、なんでもやってもらいたがるけれど、難しい所だけ援助して、なるべく自分でやるように促すことの大切さが実演でわかった。
- 私は子どもが好きだが、幼稚園実習の時に絵本を上手に読んだり、子どもを引き付けるのが苦手だった。今回絵本を読むコツや子どもの引き付け方を教えてもらえたので、実践してみたい。

3) 「実習の心構え」

- 自己紹介の実演の時の先輩の笑顔が素敵で、笑顔って大切だなと改めて感じる事ができた。
- 挨拶は、いつもどういうふうにすればいいのか悩んで不安しかなかったが、先輩が、寸劇で良い例と悪い例をやってみせてくれたのがよかった。
- 実習先の先生が忙しそうにしている時に、どのように声をかけ手助けすればいいのか寸劇で実演して教えてくれたので、次からは、先生に自分から声をかけてみようと思った。
- 提出期限や時間を守るなど、あたりまえの事ができるのが一番だと知ることができた。私はこのあたり前ができないので、見直そうと思った。
- 苦しい事に対して、前向きにやっていると子どもたちもわかってくれるし、できるようになるとアドバイスを頂き、頑張ろうと思った。
- 実習は自分の行動次第で、楽しくもなるし、厳しくもなるんだと思った。
- 実習は大変だけど、積極的に動く新しいものがたくさん見えてきて、実習が楽しくなる。
- 実習で失敗したらどうしようという思いがあったが、計画通りできないのは当たり前と聞いて、失敗を恐れずにやるのが大切なんだと思った。

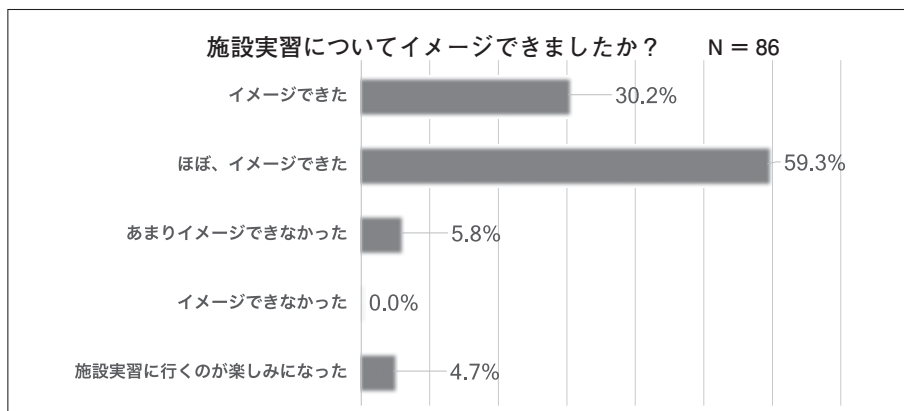


図 2

2. 1年生の振り返りシートの記述内容（2016年度）

86名の実習報告会の振り返りシートの記述内容を、KJ法（川喜田、1996；田垣、2001；石山ほか、2010）を参考にグルーピングを行った。その結果1年生が報告会で得たものは次の4つのカテゴリーに識別できた：1）「自分の将来像・実習への意欲」、2）「技術目標」、3）「実習の心構え」、4）「施設実習への理解」。ここでは、振り返りシートの記述内容で重要と思われるものを抜粋して、カテゴリーごとに示す。なお、重要個所は太字で示した。

1）「自分の将来像・実習への意欲」

- 実習中は辛くても、実習が終わりに近づいたり、終わってから楽しかったなど、**あの実習があったから今の自分があると思えるようになるんだ**と思った。だから最後まであきらめずに頑張ろうと思った。
- 先輩方の発表を聞いて、大変だったことや辛かったことも、やはりあるんだなと思ったけど、それよりも充実感や達成感に**充ち溢れていたのが印象的**だった。
- 実習中の楽しかったことだけでなく、辛かったこともきちんと説明してくれたところで、自分だけじゃなくて、先輩たちも大変な思いをして乗り切ったんだなと思えた。
- 先輩方の姿を見て、実習は辛いけれど乗り越えれば、先輩方みたいに人前でも堂々とできるようになれるのかなと、これから頑張ろうと思えた。
- 先輩たちのリアルな話を聞いて、漠然としていたこれから経験する実習がリアルになって、自分と先輩たちとの差を思い知らされた。1年間でこの差を埋めるために、**頑張ろうと心から思えた**。
- 「保育所実習は、2月と6月と同じ所に行く。2月の実習で心が折れて、6月は正直行きたくないと思っていたが、子どもたちも覚えていてくれたり、子どもたちの成長も自分の目で見ることができ、嬉しかった」という先輩の話を聞いて、**不安でいっぱいの実習だったけど少し楽し**みになった。子どもたちに6月まで覚えてもらえているように頑張りたい。
- どの先輩も実習に行く前は、緊張し不安な気持ちがあったというのを聞いた。それでも積極的に実習に臨むところはかっこいい。先輩方のように明るく積極的に実習に取り組みたい。

Ⅲ アンケートと振り返りシートの結果

1. 1年生に実施したアンケート結果（2016年度）

実習報告会后に、アンケートを1年生に記名式で実施した。記名式にしたのは、実習に対する不安が強い学生を把握して個別指導につなげたり、振り返りシートの記述内容と照合し、2年次で実習を経験したあとの変化をフォローし、その学生の成長の軌跡を追うことができるからである。

アンケートの内容と結果は以下のとおりである。

本日の実習報告会に参加して、自分の気持ちに一番近いものに○を付けてください。

1. 具体的なことを先輩から聞くことができ参考になりましたか？

- | | | | |
|----------------|-----|-------------|----|
| ① 参考になった | 93% | ② 少し参考になった | 7% |
| ③ あまり参考にならなかった | 0% | ④ 参考にならなかった | 0% |

2. 実習に対して、前向きな気持ちになることができましたか？（図1）

3. 保育所（園）実習に対して、イメージができましたか？

- | | | | |
|------------------------|-------|--------------|-------|
| ① イメージできた | 32.5% | ② ほぼ、イメージできた | 65.1% |
| ③ あまりイメージできなかった | 3.4% | ④ イメージできなかった | 0% |
| ⑤ 保育所（園）実習に行くのが楽しみになった | 0% | | |

4. 施設実習について、イメージができましたか？（図2）

5. 幼稚園実習に対して、イメージができましたか？

- | | | | |
|---------------------|-------|--------------|-------|
| ① イメージできた | 34.9% | ② ほぼ、イメージできた | 60.5% |
| ③ あまりイメージできなかった | 2.3% | ④ イメージできなかった | 0% |
| ⑤ 幼稚園実習に行くのが楽しみになった | 2.3% | | |

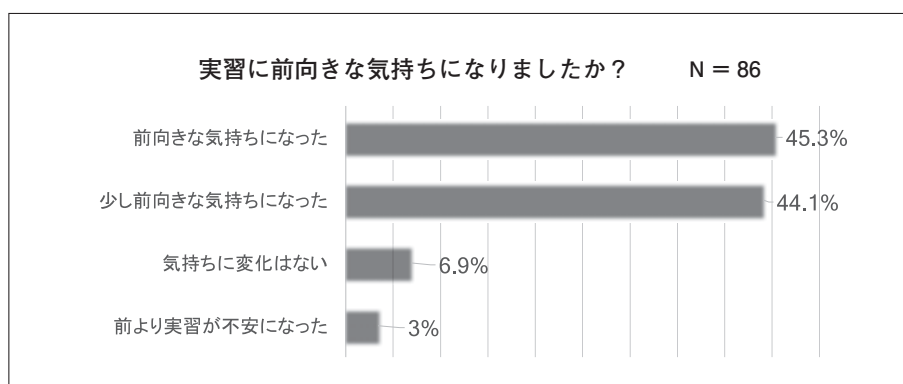


図 1

質問を十分にできなかったという2015年度の1年生のアンケート結果を踏まえ、2016年度より、二部構成にして、個別説明の時間を確保し、異学年の双方向の交流による学びを深めるようにした。1年生は、約3から4グループを回る。



3. 実習報告会の振り返り（1年生は実習事前指導の1コマ、2年生は事後指導の1コマ）

1年生は報告会直後にアンケートを記入しているが、実習事前指導の授業においても実習報告会を振り返り、参考になった内容、実習意欲が高まった発表、実習報告会に参加して感じたことや考えたこと等の振り返りシートの記述を課した。さらに来年は、報告会を運営する側になるので、運営方法に関する意見も記述するように促した。

2年生には、まず各個人で実習報告会を振り返り、仲間との協力はできたか、自分自身の実習の振り返りはできたか、発表は1年生に伝わったか、他のグループの発表の感想、卒業までの課題等について、振り返りシートの記述を課し、次にグループとしての振り返りシートと実施報告書（右写真）の作成を課した。また、実習報告会の運営方法について改善した方が良い点などのアンケートを実施した。

一年生に伝えよう（二年生）・先輩から話を聞こう（一・二年生）2016

【実施報告書】

部	乳児院（宿泊）	3
班	41-1	3
班	41-2	3
班	41-3	3
班	41-4	3
班	41-5	3
班	41-6	3
班	41-7	3
班	41-8	3
班	41-9	3
班	41-10	3
班	41-11	3
班	41-12	3
班	41-13	3
班	41-14	3
班	41-15	3
班	41-16	3
班	41-17	3
班	41-18	3
班	41-19	3
班	41-20	3
班	41-21	3
班	41-22	3
班	41-23	3
班	41-24	3
班	41-25	3
班	41-26	3
班	41-27	3
班	41-28	3
班	41-29	3
班	41-30	3
班	41-31	3
班	41-32	3
班	41-33	3
班	41-34	3
班	41-35	3
班	41-36	3
班	41-37	3
班	41-38	3
班	41-39	3
班	41-40	3
班	41-41	3
班	41-42	3
班	41-43	3
班	41-44	3
班	41-45	3
班	41-46	3
班	41-47	3
班	41-48	3
班	41-49	3
班	41-50	3
班	41-51	3
班	41-52	3
班	41-53	3
班	41-54	3
班	41-55	3
班	41-56	3
班	41-57	3
班	41-58	3
班	41-59	3
班	41-60	3
班	41-61	3
班	41-62	3
班	41-63	3
班	41-64	3
班	41-65	3
班	41-66	3
班	41-67	3
班	41-68	3
班	41-69	3
班	41-70	3
班	41-71	3
班	41-72	3
班	41-73	3
班	41-74	3
班	41-75	3
班	41-76	3
班	41-77	3
班	41-78	3
班	41-79	3
班	41-80	3
班	41-81	3
班	41-82	3
班	41-83	3
班	41-84	3
班	41-85	3
班	41-86	3
班	41-87	3
班	41-88	3
班	41-89	3
班	41-90	3
班	41-91	3
班	41-92	3
班	41-93	3
班	41-94	3
班	41-95	3
班	41-96	3
班	41-97	3
班	41-98	3
班	41-99	3
班	41-100	3

発表したこと

職員説明（お・ろ・ん）
誕生会・誕生日の会
人見知り、関わり
乳児院突然死経験の
説明（実際に赤ちゃん人形と
使用して触・て・け・く）

振り返りシート

乳児院（宿泊）
同仁会

1日の流れ

ラシャ式
ノリ、ハサミ
ボンド

発表物の「さみ」準備

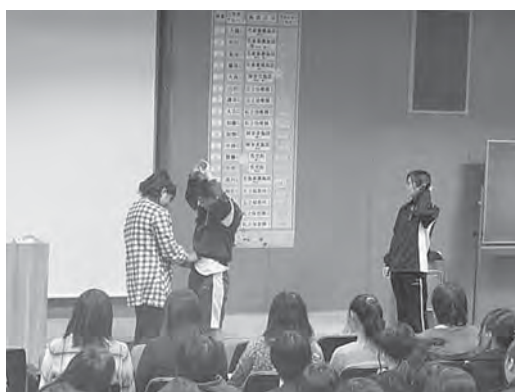
※当日は、赤ちゃん人形とベビーベッドも使用。



18枚のポスターは、報告会終了後1年間、学内の目につきやすい複数箇所に掲示する。「見て楽しく、読んで役に立つ実習ポスター」が後輩たちの大学生活の日常にある。



SIDS（乳幼児突然死症候群）を防ぐための夜勤実習の実演：ビデオで拡大し説明している。



実習生役と子ども役に分かれて、実習の一場面をロールプレイで示す。左は絵本の読み聞かせの良い例と悪い例。右は、子どもが実習生だと思って甘えて、「先生、シャツをスポンに入れて」と言ってきたときに、全部やってあげるのではなく、「後ろは、難しいからやってあげるけれど、前は自分でやろうね」と声をかけながら促す様子。

第二部 個別説明



各グループのブース別に詳細な説明と1年生との質疑応答。

第一部 全体発表



司会・進行



タイムキーパー



ポスターをビデオで映し、スクリーンに拡大して、会場全体の参加者に見えるようにして、その内容をもとに発表している。1年生は、熱心にメモを取りながら聞いている。



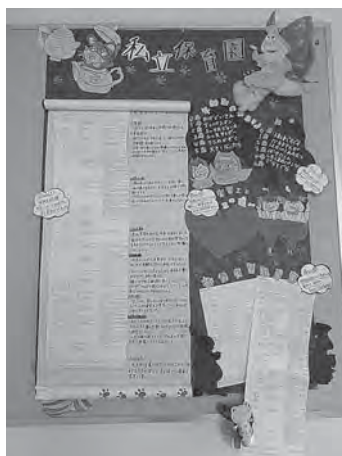
お誕生会でみんなの前
で披露して、好評だっ
た手品の実演



☆「見て楽しい、読んで役立つポスター」を作る。

☆ポスターは、報告会では拡大してスクリーンに映し出すが、その後大学構内に1年間掲示するので、今までに培った壁面製作のスキルを活かし、折り紙などを使い立体的で魅力的なものを作る。

☆1グループ、5分間の発表であるが、メンバー全員がそれぞれの役割を果たせるように工夫する。



一日実習の指導案を添付



各施設で指示された服装や
名前の付け方の違いを紹介



実習の内容、一日の流れ、
日誌、部分実習案を紹介

実習報告会のポスターの例

5) 実習報告会のリハーサル

実習報告会本番と同じ視聴覚室で、ビデオやプロジェクターを用いて、リハーサルを実施した。

2. 実習報告会（キャリア形成ゼミの2コマ：1、2年生合同）

実習報告会は、学生が主体的に運営し、教員は参加者として学生の活動を見守った。報告会当日の学生の活動を以下に記す。

第一部 全体発表

☆司会、進行、タイムキーパー、会場係、アンケート回収などを行う。

☆18グループが順番にポスターの内容説明、ポスター内の発表個所をビデオで拡大してスクリーンに投影、寸劇・部分実習の再現・制作物の紹介などのパフォーマンスをする。

第二部 個別説明

☆1年生→興味関心の高いグループのブースに行き、詳細な説明を聞いたり、質問をする。

☆2年生→グループ毎にブースに分かれ、全体発表の補足や1年生の質問に応答する。

Ⅱ 本学の実習報告会におけるアクティブラーニングの目的と概要

実習報告会の活動は、1年生にとっては、事前指導として、実習をやりきった先輩との双方向の交流により、実習のイメージをつかみ、モチベーションを高め、具体的、実践可能なテクニカルスキルを身に付けることを目的としている。2年生にとっては、事後指導として、実習を振り返り、実習での気づき、苦労や感動、失敗や改善案などをグループで話し合い、体験を言語化して共有し、報告会において1年生に伝えることを目的としている。

1. 実習報告会までの準備（実習事後指導の8コマ分）

1) 実習報告会の目的、活動の内容、スケジュールの説明

2) 実習先の種別によるグルーピング

「保育実習指導Ⅰ」、「保育実習指導Ⅱ」、「保育実習指導Ⅲ」、それぞれの事後指導の授業において記入した、振り返りシートの内容と学生の特長などを考慮して、教員が学生をグルーピングした。

以前は学生の自由選択にしていたが、仲の良い学生同士が集まる傾向があったので、普段あまりかかわりのないメンバーと話し合ったり、協働作業することにより新しい知識や自分の考えに出会えたり、就職後のチーム保育に求められる協調性や人間関係のストレスコントロールの向上にもつながると考え、教員がグルーピングしている。

2015年度は、実習生78名を4人から7人の15グループに分けたが、2016年度は、各自のグループ内での役割が明確になり、主体的に活動することができるように、実習生83名を前年度より少ない4人から5人の18グループに分けた。

2016年度は、宿泊実習と通勤実習の違いも考慮し、「障害児施設（通い）」、「障害者施設（通い）」、「障害者施設（宿泊）」、「児童養護施設（通い）」、「児童養護施設（宿泊）」、「乳児院（通い）」、「乳児院（宿泊）」、「情緒障害児施設、児童自立支援施設」、「私立幼稚園」、「公立幼稚園」、「公立保育所」に分けた。なお、2015年度は、「認定子ども園」のグループも設定したが、2016年度は幼稚園および保育所のグループに含めた。

3) グループでの実習の振り返り（体験の言語化と間接的な体験の共有）と実習報告会計画書の作成 振り返りのテーマや計画書作成のポイントを以下のように助言した。

☆1年生だった時、どのような不安を抱えていたのか、どのような情報が欲しかったのかを思い浮かべ、伝える内容を考える。
 ☆実習では、どのような技術や態度が必要かつ有効であったか、実習前に身に付けておいた方が良かったと思うものは何か。
 ☆実習での心に残ったエピソードは何か、また実習前と実習後の自分の変化は何か。
 ☆1年生に伝えたい内容を言葉やパフォーマンス（寸劇や手遊びの実演）など、どのような方法で伝えるのが効果的であるか。

4) ポスター製作・口頭発表原稿作成

グループで話し合った計画書をもとに作成する報告会のポスターや発表原稿について、以下のよう

原著論文

実習報告会におけるアクティブラーニング ― 実習事前事後指導の在り方を探る ―

Active learning method in report meetings on practical training
for seeking appropriate advance and post practice guidance

安藤みゆき・富田 浩子・海野 富江

Key words ; 実習報告会 事前事後指導 体験の言語化 振り返り (reflection)

I はじめに

待機児童問題が深刻さを増している現代において、保育士の確保と質の向上は喫緊の課題である。そしてそのような時代の要請に応え得る養成校の授業の工夫が必要であろう。

津守 (1997) が、保育を振り返る省察は、保育者の専門性を支える行為であると述べているように、学生が自らの保育を振り返り省察する力を身に付けていくことが保育士の質の向上に繋がる、と考える。その意味においても実習事後指導における実習の振り返りは重要である。

一方で、実習に不安を抱え資格取得をあきらめてしまう学生もあり、事前指導の重要性も増している。しかし現状は、誤字脱字の注意、服装、髪型、言葉使い、時間厳守など社会人としてのマナーやルールといった、実習指導以前のことを伝えるために多くの時間を割かなくてはならない。限られた時間の事前指導で、学生がポジティブな思いで実習に臨み、実り多い学びを得ることができるようにするためには、効果的な授業の工夫が必要である。

以上のような課題を踏まえ、本学においては、実習事前事後指導の一環として、1・2年生合同の実習報告会を実施している。以前は、体育館でのポスター発表形式で実施していたが、実習で人気のあった手遊びや絵本の読み聞かせ（導入も含めて）などをポスター前で実演するグループもあり、他のグループの説明が聞き取りにくいという学生の意見もあった。

そこで2015年度からは、そのような学生の意見も取り入れ、新しいスタイルの実習報告会を実施している。その取り組みの一部は「実習報告会におけるアクティブラーニング―実習の集大成(伝える)学びの双方向性―」というテーマで、「全国保育士養成協議会第55回研究大会」で発表(安藤・清水・海野、2016)している。2016年度は、2015年度の報告会の振り返りを活かし、さらに改善を試み、その一部を「実習報告会におけるアクティブラーニングの実践―実習事後指導の在り方を探る―」というテーマで、「日本保育者養成教育学会第1回研究大会」で発表(安藤・清水・海野、2017)している。

本論では、こうした2年間の実習報告会におけるアクティブラーニングの実践の様子を報告するとともに、報告会后に1年生に実施したアンケート、および1・2年生が記録した振り返りシート

の質的分析により、実習事前事後指導の在り方を検討することを目的とする。

(2) マップを作成して

資格取得に関わる教養・専門科目と履修時期を柱に図式的に表した。また、教養科目と専門科目の授業方法（講義、演習、実習）では、アンケートから抽出したキーワード等を付け加えた。

ある学生から、「入学前には幼稚園教諭や保育士の資格が比較的容易に取得できると考えていたが、実際にはとても大変で、特に実習関係では、保育所、施設、幼稚園と3か所あり日誌の記入や提出期限等かなりきつかった。」といった感想があった。そこで実習への心構えや取り組み姿勢に関するようなキーワード等も追加することとした。

1枚の用紙に収めるには、データ量が多いため、将来の職業（幼稚園教諭や保育士）に関する資格取得の流れがわかるような科目配列をとった。

4. 最後に

課題としては、各科目ごとのDPとの関連、また履修するにあたっての難易度、さらに各科目間の関係性の可視化などがあげられる。シラバス等の活用とあわせて保育科内での論議が求められる。

また、シラバスに示された評価方法・基準による評価や必修・選択科目等の修得状況に対する評価とあわせ、DPの基準等についても教員間において共通理解を図っていくことが大切になってくると考える。

参考文献

- 1) 学校法人大成学園 茨城女子短期大学 2016 学生便覧, p3.
http://www.taisei.ac.jp/jp/iwjc/outline/three_policies.html
- 2) 平成 27 年度保育科入学生・入学前オリエンテーション・アンケート調査結果, 2015 年 3 月 12 日実施
- 3) 学校法人大成学園 茨城女子短期大学 大学案内 2016, p8, p11.

参考文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー) 及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー) の策定及び運用に関するガイドライン, 2016 (平成 28) 年 3 月 31 日, p7.
- 2) 文部科学省 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ, 未来に花開かせるために～」2014 (平成 26) 年 12 月 22 日
- 3) 文科省「用語解説」2013 (平成 25) 年 5 月
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_002.pdf
- 4) 国士舘大学 第 1 回 FD 研修会資料「カリキュラムの可視化マップ作成研修会」, 2013 (平成 25) 年 3 月 14 日

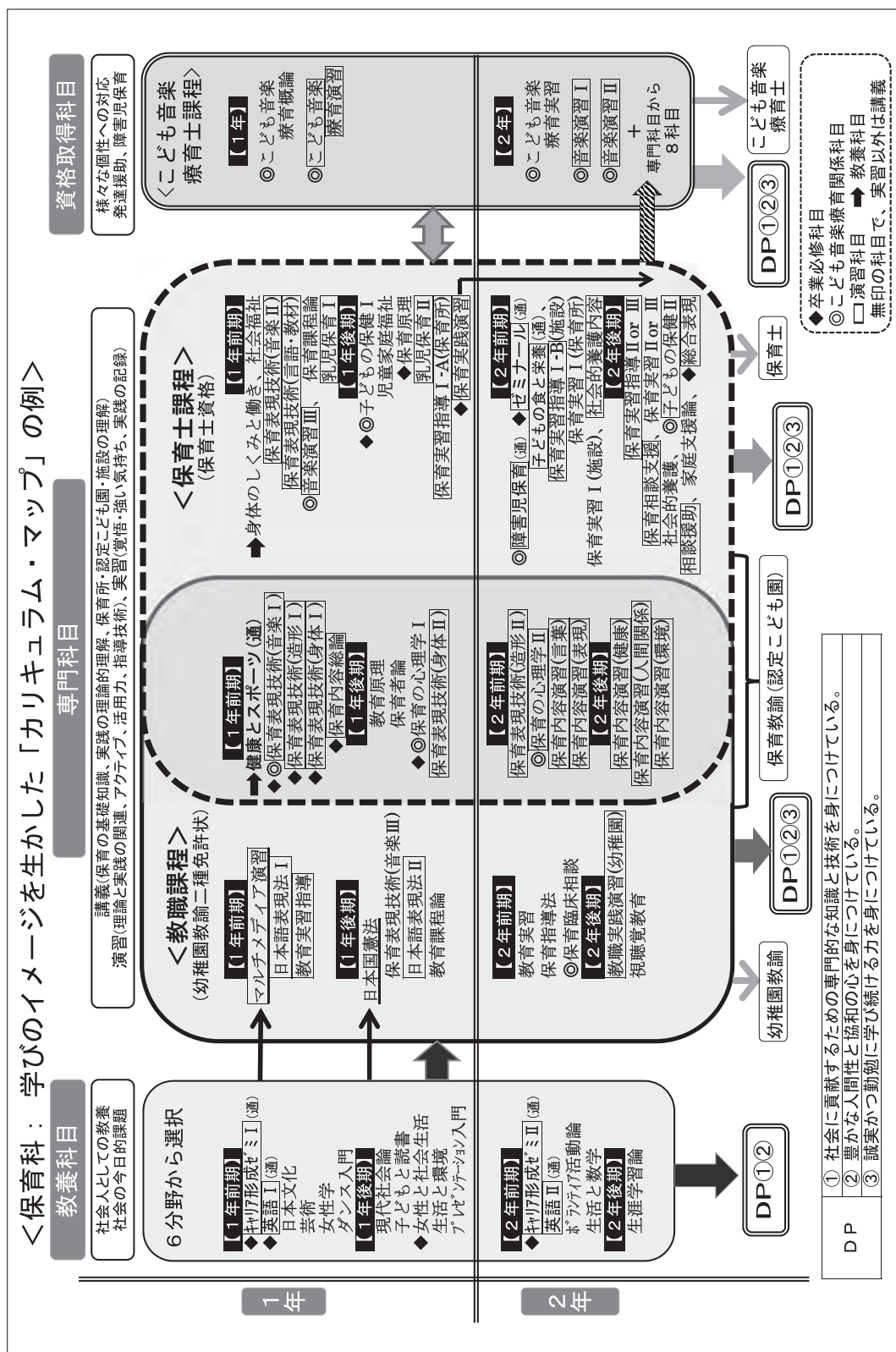


表2 専門科目の分類と一覧

	分 類	1 年次	2 年次	内 容
保育科専門科目カリキュラム	基礎的・基本的な知識の修得	教育原理 保育者論 児童家庭福祉 社会福祉 保育原理	相談援助 社会的養護	保育者になるために必要な「教育」「保育」「福祉」の本質や概念の理解を深めます。
	子どもの育ちや内面を理解する	保育の心理学Ⅰ 子どもの保健Ⅰ 幼児と環境	保育の心理学Ⅱ 子どもの保健Ⅱ 子どもの食と栄養 家庭支援論 保育臨床相談	子どもの育ちを家庭等の背景を含め多様な角度からとらえ理解していきます。
	保育の技術を高める	保育表現技術 (音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ) 保育表現技術(造形Ⅰ) 保育表現技術(身体Ⅰ・Ⅱ) 保育表現技術(言語・教材) 音楽演習Ⅲ	保育表現技術(造形Ⅱ) 幼児音楽 幼児造形 幼児体育 音楽演習Ⅰ・Ⅱ	実際に身体を動かしたり、手先を使ったりしながら保育の技術を学びます。
	実践力をつける	保育課程論 教育課程論 保育内容総論 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 日本語表現法Ⅰ・Ⅱ 児童文化	保育内容演習(健康) 保育内容演習(人間関係) 保育内容演習(環境) 保育内容演習(言語) 保育内容演習(表現) 障害児保育 社会的養護内容 保育相談支援 視聴覚教育 保育指導法	幼児教育は「環境を通して行うもの」であり、「遊びを通しての指導」が中心です。そのことをふまえ、どのような環境の構成が必要か、どんな援助が必要かを五領域や育ちの面から考えていきます。
	保育の現場を知る	教育実習指導 教育実習保育実習指導Ⅰ-A(保育所) 保育実習Ⅰ(保育所)	教育実習 保育実習指導Ⅰ-B(施設) 保育実習Ⅰ(施設) 保育実習指導Ⅱ(保育所) 保育実習Ⅱ(保育所) 保育実習指導Ⅲ(施設) 保育実習Ⅲ(施設) ※(ⅡまたはⅢを選択)	実習は保育者になるための大切なプロセスです。子どもたちの夢を育む幼児教育や児童福祉のプロをめざすために、実習体験を通して保育現場の理解と望ましい保育者のあり方について学習します。
	課題を探究する	保育実践演習	ゼミナール 総合表現 教職実践演習(幼稚園)	子どもたちと実際に触れ合ったり、教育・保育の今日的課題や、自己課題について、少人数グループにわかれて探究したりします。ゼミナールでは実践を通して、また話合いや文献を通して学びを深めていきます。
	こども音楽療育士課程	こども音楽療育概論 こども音楽療育演習	こども音楽療育実習	障害のある子どもの育ちを援助するための音楽活動の実践技術や、音や音楽の使い方など多くの基礎技術を学びます。

表1、表2は、2年間の保育科のカリキュラムを表したものである。³⁾ 専門科目のカリキュラムの分類は、学生にとってどのような力を身につけるかという点でわかりやすいものになっている。

一方で、保育者(幼稚園教諭、保育教諭、保育士)の養成という視点からみると、学生は将来どのような職場で働き、そのための資格取得をいかにするかという点で、高い関心をもっている。そのためには、取得すべき科目にはどのようなものがあるのか、他の資格との関連はどうか、どのような順で学んでいくかというイメージをもたせることは大切である。

そこで、前述のアンケート調査でのキーワードを生かしたカリキュラム・マップの例を試みた。

- ・今を精一杯生きる！充実した学生生活で終わりたい (11)
- ・きちんと単位と資格をとり、しっかりと卒業したい (8)
- ・まだまだ卒業したくない。(5)
- ・社会人として頑張る。保育士としてがんばりたい。早く働きたい (5)
- ・2年間あつと言う間だった。授業は大変だった。でも学ぶことがたくさんあった (5)
- ・もっと教えてほしかった。自分のもっている実力をもっと伸ばしていきたい (3)
- ・車の購入や保険など色々と話しているうちに社会人になるのだと改めて気が引き締まった。(2)
- ・ピアノのレパトリーを増やす
- ・一人暮らしが楽しみ。無事に卒業できるか
- ・もっとゆっくりしたい。紙芝居の舞台を作りたい！
- ・とにかく3年は勤めることを目標！

- ・続けられるか ・スキルアップを図りたい ・得意分野（遊びの種類等）を増やす
- ・保育士としてはやく働きたい ・もっと学びたい

(3) 調査結果について

アンケートの「アの項目については」、入学前と卒業前で比較を行った。また、ウの（ア）（イ）項目は2年間の教養科目と専門科目の学びについて学習成果との関連から調査したものである。ウの（ウ）は専門教科の講義、演習、実習別に印象に残ったことを自由に、また（エ）の項目は、保育に関する職業のイメージをどう捉えているかを探ったものである。最後に、現在の心境を書いてもらった。

専門教科の講義、演習、実習の回答からキーワードを抽出し、カリキュラム・マップの中に取り入れれたり、履修する上での心構えや、科目の特徴をわかりやすく示したりすることで、学びの全体イメージにつながればと考えている。一方で、2年間で資格取得が可能であるということは、それだけ授業内容もタイトであり、しっかりとした構えをもたなければならないという強いメッセージを暗に示していることにもなる。

3. アンケートのキーワードを生かしたカリキュラム・マップ作成の試み

(1) カリキュラム一覧から、資格取得の関連性がわかるカリキュラム・マップへ

表1 教養科目の分類と一覧

	分 類	1 年次	2 年次	内 容
教 養 科 目 カ リ キ ュ ラ ム	人間と文化	日本文化 芸術 子どもと読書		教養科目は、表現文化学科、保育科の両学科において共通に開講されています。体系的なものの見方や柔軟な思考力を身につけるために幅広い内容のカリキュラムを用意し、「人間と文化・人間と社会・生活と科学・実務と情報・人間と健康・外国語」の6つの分野から成る20科目を設定しています。
	人間と社会	日本国憲法 現代社会論 女性学 女性と社会生活 キャリア形成ゼミⅠ	生涯学習論 ボランティア活動論 キャリア形成ゼミⅡ	
	生活と科学	生活と環境 身体のしくみと働き	生活と数学	
	実務と情報	マルチメディア演習 プレゼンテーション入門		
	人間と健康	健康とスポーツ ダンス入門		
	外国語	英語Ⅰ	英語Ⅱ	

(6)

- ・子どもに寄り添うこと、家庭的でゆったりとした生活が重要、一緒に成長していく。(5)
- ・お母さんのような面倒見、家庭に代わって保育する、保護者支援 (5)
- ・包容力がすごい、見守る力、観察力、子どもの気持ちの安定 (4)
- ・臨機応変な対応、子どもの気持ちを考える、生活習慣を身に付ける (3)
- ・体力、長時間、忙しい、大変そう (3)
- ・複数担任でチームワークを組んで連携して行っている (3)
- ・責任や負担が大きいけど、すごくやり甲斐のある仕事 (2)
- ・たくさんの手遊びや製作ができる

【学生のイメージ】

・乳児理解 ・チームワーク（連携） ・健康と体力 ・保護者支援 ・包容力

オ. 就職するにあたって不安なことや心配なことはありますか。(59 名回答)

- ・人間関係が築けるか不安 (13)
- ・社会人 1 年目で環境がかわるのでやっていけるか不安、適応できるか、続けられるか (9)
- ・ピアノができるか不安 (8)
- ・保護者との対応が上手くできるか、保護者との信頼関係、連携ができるか。(5)
- ・責任が重くなるが、うまくやっていけるか、きちんとできるか (5)
- ・早起きできるか、住むところは大丈夫か、勤務時間が不規則にならないか (3)
- ・長く続けられるか、保育が自分に合っているか、しっかり勤めることができるか (4)
- ・担任になったら子どもたちへの保育の仕方やクラスをしっかりとめられるか (2)
- ・クラスの担任や行事の運営がきちんとできるか (2)
- ・実習で行ったことがない障害児施設などでやっていけるか、子どもを支えることができるか、施設の子（大きい子）と仲良くできるか (2)
- ・指導案や日誌を書くこと (2)
- ・配属先がどこになるか、配属先の職場の雰囲気が自分に合うか心配 (2)
- ・絵本、手遊びのレパートリーを増やさなくては
- ・仕事に慣れるか心配。身につくまで時間がかかってしまうか、体調を崩さないか・・・
- ・実習と就職ではやることが違うだろうから不安
- ・縦割りクラスの指導案の書き方について学びたい
- ・家から少し遠いため通勤は大丈夫か
- ・働くのが楽しみだが、仕事と家庭の両立ができるか、やるしかない、頑張る
- ・あまり理解していないので勉強をしようとしても何をしたらいいかわからない

・人間関係が不安 ・保護者との信頼関係の構築 ・社会人としてやっていけるか
・絵本や手遊びなどのレパートリーを増やす

カ. その他（卒業を前に今考えていることを自由に！）(43 名回答)

- ・現実を知り、身体的、精神的に辛く大変だったけど、精神的にすごく鍛えられたと思う (3)
- ・施設など様々なところで実習ができ、多くの先生の話聞いてためになった (2)
- ・実習を通して、自分にあっているかどうかがあった (2)
- ・最初は緊張して失敗が多かったが、楽しいことや嬉しいことがたくさんあり充実した。(2)
- ・実際に、イメージと違うことがあった。現場でどのような力が必要とされるかがわかった(2)
- ・その場に応じて臨機応変に動くことや、思い通りに動けないのが辛かった。(2)
- ・他の実習生と比べられて精神的にきつい面が多くあり厳しかった。
- ・障害児への理解が深まったのがよかった。

【学生の印象】

・覚悟・強い気持ち　・理想と現実　・実践の文章化　・臨機応変　・観察力　・即応力

エ. 次の職種のイメージを自由に書いてください。(必要とされる能力や心構えなど)
(主なもの)

○幼稚園教諭 (57 名回答)

- ・教育的な知識、就学に向けての教育、保育をつなげる、学校の先生 (27)
- ・ピアノの技術 (15)
- ・遊びを通して教育をする。遊びを展開させる力、周りをみる力、子どもの学びにかかわる力 (5)
- ・笑顔、あらゆることに臨機応変に対応できる力 (3)
- ・生活習慣を身に付けさせる、入学に備え字を覚えさせる (2)
- ・一人担任が多く 30 人以上の子どもを一人で担当しないといけなから指導力が求められる (2)
- ・3～5 歳児により多くの理解がないとだめ、子どもの良いところを伸ばす

【学生のイメージ】

・教師　・幅広い知識やピアノ等の技術　・保幼小連携　・担任と責任　・幼児理解

○保育教諭 (46 名回答)

- ・幼稚園、保育園両方の役割、幅広い知識や技術が必要 (21)
- ・年齢層が広く、幼保連携で業務が大変、時間も長くなりそう (6)
- ・認定こども園 (5)
- ・ピアノができ教養がある人 (4)
- ・幼保の機能をどちらも取り入れ、地域の子育てや保護者支援をしっかりとする (4)
- ・一人一人の子どもの家庭に応じた対応 (2)
- ・周りのことをみる力が必要だと思う (2)

【学生のイメージ】

・乳幼児への対応力　・幅広い知識と技術　・認定こども園　・子育て支援　・個別対応

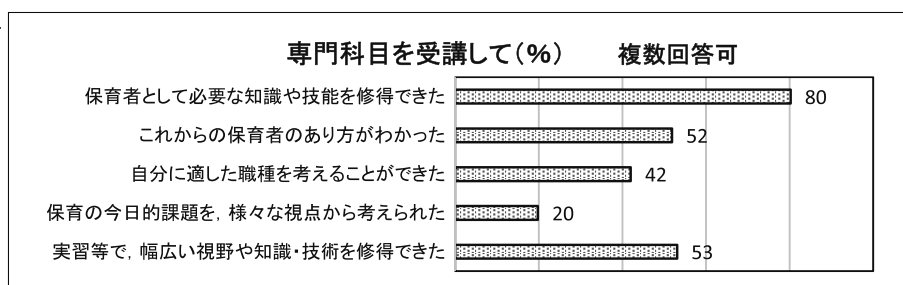
○保育士 (48 名回答)

- ・様々な年齢の子ども、乳幼児を預かる上での知識、乳児の保育をする (22)

(4)

(イ) 専門科目を受講して（本学で設定している学習成果との関連から）

図 4



「保育者として必要な知識や技能を修得できた」80%、「フィールドワークや地域貢献を通じて幅広い視野・知識・技術を修得できた」53%に対し、教養科目と同様保育に関しても「今日的な課題」についてはやや意識が低い傾向となった。

(ウ) 専門科目（講義、演習、実習）で良かったこと辛かった事など印象に残っていることは何ですか。
〈主な回答〉

○講義（48 名回答）

- ・ 保育の歴史や知識・用語、保育士として役立つことなど様々学ぶことができた（17）
- ・ 座って聞く授業が中心で、集中力が続かなく辛かった。（15）
- ・ 自身の体験などを織り交ぜたりしながら講義をする先生が多くとても参考になった（4）
- ・ 授業を分かりやすく説明してくれたり、映像を活用したりしたところが印象に残っている（3）
- ・ プリントに記入するものの方が後から見直しやすかった。自分なりにまとめられよかった（2）
- ・ これまであまり知らなかった児童養護施設等への知識が増えた（2）

【学生の印象】

- ・ 保育の知識・用語理解
- ・ 座学中心
- ・ 自己啓発
- ・ 実践の理論的理解
- ・ 理論の応用・適用
- ・ 児童養護施設理解

○演習（54 名回答）

- ・ 手遊び、ダンス、歌、掲示物等の制作技術を、体を動かしわかりやすく学ぶことができた（30）
- ・ 発表や制作、課題が多く大変だった（7）
- ・ 周りの人と理解し合ったり協力したりすることができた。様々な意見やアイデアを聞いた（6）
- ・ ピアノのレベル別レッスンは丁寧に教えてくれ、1年生の時より上手になれた（4）
- ・ 人前でも歌えたり、発表できたりすることができるようになった。（2）

【学生の印象】

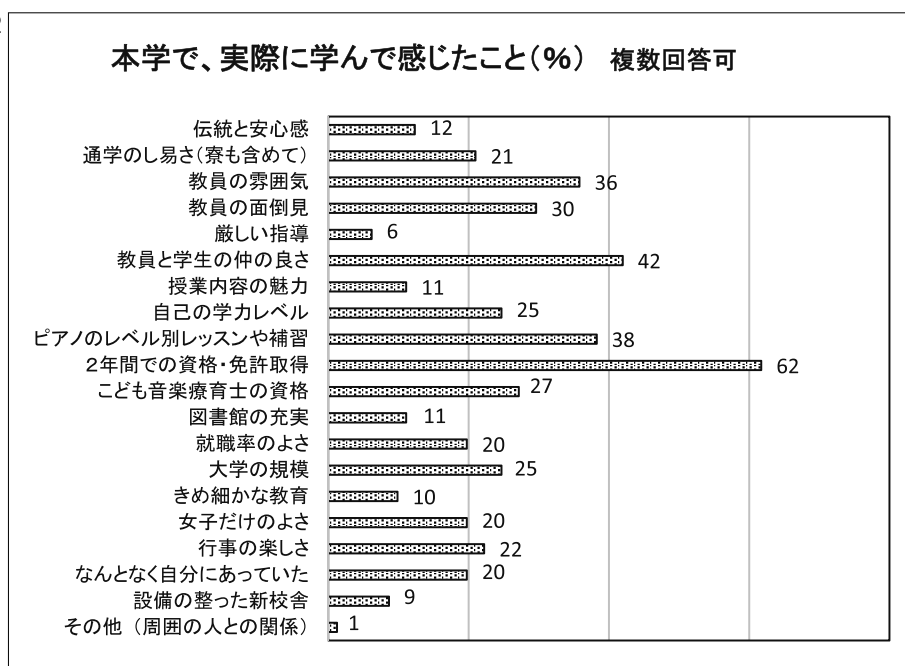
- ・ 理論と実践の関連
- ・ アクティブ
- ・ 指導技術
- ・ 即実践
- ・ 実用的
- ・ 活用力

○実習（65 名回答）

- ・ 子どもの反応や動き等、保育をより深められた。スキルアップに繋がった。（22）
- ・ 日誌の書き方や翌日提出等が大変、部分実習や指導案を考えるのが辛かった（19）
- ・ 体調管理（寝不足、体調を崩した、水疱瘡など）が大変だった（4）

イ. 本学で、実際に学んで感じたこと（本学に対するイメージ）（複数回答可）

図 2



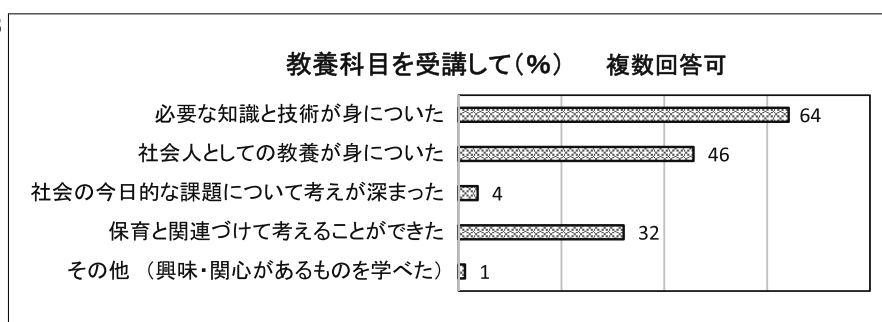
本学に対するイメージは、「2年間での資格・免許取得ができる」が最も多く、「教員と学生の仲の良さ」、「ピアノのレベル別レッスンや補習」、「教員の雰囲気」と続いている。

本学の方針である「グループ担任制による少人数教育」や「時代のニーズにあった資格取得」、特に「こども音楽療育士の資格」等によるものと考えられる。また「大学の規模（大規模でなく、こじんまりとしているところがよい）」や「女子だけのよさ」等は、本学ならではの特徴である。

ウ. 授業について（複数回答可）

(ア) 教養科目を受講して（本学で設定している学習成果との関連から）

図 3



「社会の今日的な課題への関心」については、授業の在り方等を含め、現実的な課題意識を高めるような改善策が必要であると感じる。

(2)

の重要性をあげている。学生に身につけさせる知識・能力と授業科目との間の対応関係を示し、学びの道筋や見通しを示すものである。

特に、保育科においては、将来保育士や幼稚園教諭、あるいは保育教諭として現場に立つことを目標に掲げ入学してくる学生が多いことから、現在学んでいることが将来にどう結びつくのか、知識の量だけでなく、それぞれの知識がどのようにつながり、構造化されているのかということを考えることはとても大切である。

今回は、入学前のオリエンテーション時に実施したアンケート調査の結果と、2年間学んだ後の調査結果とを比較することで、どのような思いで教養科目や専門教科を学び、実習ではどのようなことを感じたか、あるいは保育士や幼稚園教諭等についてどのようなイメージを抱いているかを知ることが目的とした。加えて、今後入学してくる学生への学びの手引きとなるようなカリキュラム・マップへ反映できないかを試みたものである。

2. 平成 27 年度入学生へのアンケート調査

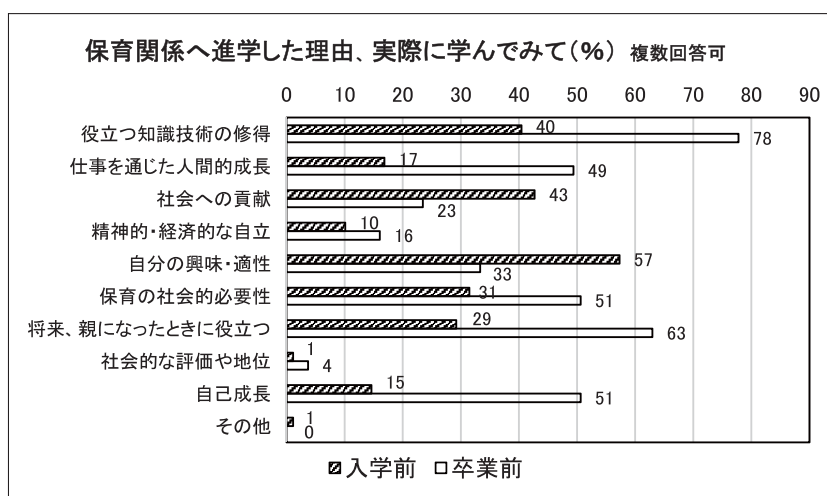
(1) 調査時期及び人数

- ・入学前オリエンテーション（平成 27 年 3 月 12 日）、入学予定者 89 名²⁾
- ・卒業 2 か月前（平成 29 年 1 月 13 日）、卒業予定者（2 学年）81 名

(2) 調査内容（いずれも質問紙による調査）

ア. 今、保育関係を学んで、感じていること（入学前と 2 年後の比較）複数回答可

図 1



最も多かったのは、「役立つ知識技術が習得できた」と感じている学生が約 80%、続いて「将来、親になったときに役立つ」が 62%と高く、入学前の調査より大幅に増えている。進路が決定したり、今後の人生を考えたりできる状況を見ると当然と考える。

また、この 2 年間で「自己成長（自分自身、成長できたと思う）」を感じている学生が 51%、また「保育の仕事は社会的にも必要性だと思う」51%、「今後仕事を通じて、人間的成長ができると思う」が 49%となっており、昨今の社会情勢の影響も大きいと感じる。反面、「社会的な評価や地位」については、労働条件等が他の職業に比較して厳しい等、現代社会の抱える課題がそのまま反映されており、「必要である」とわかっているが複雑な心境がうかがえる。

研究ノート

学びのイメージを生かしたカリキュラム・マップ作成の試み ～2年間における保育科学生の学びに関する意識調査から～

Trial of making of the curriculum map that is reflected students' learning from classes
: A survey on consciousness of the students' of the childcare course about classes

助川 公継

Key words ; 三つのポリシー (DP, CP, AP)、カリキュラム・マップ

1. はじめに

夢や目標をもって入学してきた学生が、学生生活を終え、社会人として巣立つ時期になったとき、入学前に抱いていたイメージが、2年間でどのように変化してきただろうか。教員にとっても、学生がどのように学び、教授した内容がどのように受け止められているかを知ることが、今後の指導に生かす上で貴重なものとなる。学生にとっても、予めどのような履修内容なのかを知り、さらにどのような心構えで取り組んでいけばよいかという方向性を知ることが、学習を進めていく中で意欲や成果の面で大きな影響があると考えられる。

茨城女子短期大学（以下、本学）では、目指す人材像として「時代に適応できる堅実な女性の育成」を校是に据え、さらに保育科の学生には、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー（DP））として、以下の3点を定めている。¹⁾

- ・ 社会に貢献するための専門的な知識と技術を身につけている。
- ・ 豊かな人間性と協和の心を身につけている。
- ・ 誠実かつ勤勉に学び続ける力を身につけている。

また、入学者の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー（AP））として「子どもの健やかな育ちを支えることを学ぶための基礎学力をもつ人」、「良好な関係を築くことのできる協調性をもつ人」、「コミュニケーション能力や社会性が身についている人」について、オープンキャンパスや各種の進学説明会等を通して提示している。入学後は、APにそって2年間でDPまで高めていく手段が、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー（CP））であり、以下の内容をオリエンテーションや授業の中で伝えていくようにしている。

- ・ 社会のニーズに対応した保育者の養成
- ・ 保育の専門的知識、技術の習得
- ・ 理論に基づいた実践の重視

中央教育審議会大学教育部会から出された三つのポリシーの策定及び運用に関するガイドラインでは、留意すべき事項として組織的で体系的な教育の展開と学生の学修成果の評価として、カリキュラム・ポリシーを具体化し、可視化して共有するためのカリキュラム・マップや履修系統図の活用

執 筆 者（執筆順）

小 林 和 子（教授：日本近代文学）

助 川 公 継（教授：教育学・教科教育・学校経営）

安 藤 みゆき（准教授：臨床発達心理学）

富 田 浩 子（講師：保育学）

海 野 富 江（准教授：保育学）

神 永 直 美（教授：幼児教育学）

佐 藤 豊（教授：日本画・造形教育）

角 田 雅 昭（准教授：保育学・発達心理学）

橋 本 祥 子（准教授：保育実践）

馬 立 明 美（講師：こども音楽療育）

長谷部 はるか（講師：舞踊学）

廣 部 朋 美（講師：発達心理学・幼児音楽）

茨城女子短期大学紀要 第44集

平成 29 年 3 月 31 日 発行©

編集者 茨城女子短期大学紀要委員会

発行者 額 賀 修 一

発 行 茨城女子短期大学
茨城県那珂市東木倉 960-2

印 刷 ワタヒキ印刷(株)
水戸市城東 1-5-21
Tel. 029-221-4381

BULLETIN OF IBARAKI WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

No.44 (2017)

< CONTENTS >

1. Kazuko KOBAYASHI ;
A study on “Hitotsu no yakusoku” by Osamu Dazai ; with reference to
“Yukino yo no hanashi” , “Sekibetsu” 1
2. Kimitsugu SUKEGAWA ;
Trial of making of the curriculum map that is reflected students’ learning from classes
: A survey on consciousness of the students’ of the childcare course about classes ... (1)
3. Miyuki ANDO, Hiroko TOMITA and Tomie UMINO ;
Active learning method in report meetings on practical training
for seeking appropriate advance and post practice guidance (11)
4. Naomi KAMINAGA, Yutaka SATO, Kimitsugu SUKEGAWA, Tomie UMINO,
Masaaki KAKUTA, Miyuki ANDO, Sachiko HASHIMOTO, Akemi UMADATE,
Hiroko TOMITA, Haruka HASEBE and Tomomi HIROBE ;
A report from a course of “Practical exercises for childcare”
: A consideration on a “Let’s play together” activity (32)

PUBLISHED

by

Ibaraki Women's Junior College

IBARAKI